二次元ドリームマガジン

『イセリア英雄戦記』単行本化記念のカラーイラストも掲載!

cover illustration by
雛森瑞羽

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

立ち読み版

新連載小説
初回から2話掲載で表紙のヒロインが触手まみれに!
聖換天使エクスラグナ
Reincarnate Angel Exragna
上田ながの×雛森瑞羽

カラーピンナップポスター
いるまかみり／雛森瑞羽
雪月竹馬

大人気えっちマンガ
ぱふぇ／おおたたけし
NO.ゴメス／空木次葉

今号の特集
触手(しょくしゅ)

大好評連載&読み切り小説
堂々の最終回
対魔忍ユキカゼ
蒼井村正×竜胆

アリシア 淫獄の姫騎士
斐芝嘉和×桐島サトシ

単行本発売中
イセリア英雄戦記
天戸祐輝×牡丹

高岡智空×白家ミカ
小豆沢亜澄×汰尾乃きのこ

今号も登場!分岐小説
少女勇者ルトラ
～恥獄の淫堕調教～
大熊狸喜×sian

カラーマンガ
魔術師とアルカナの化身
高浜太郎

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

vol.65
2012 08
定価 990 yen

セシリー　搦め捕られし心と身体

小説：空蝉（うつせみ）
イラスト：カドウ

コクピット内部にけたたましくエマージェンシーコールが鳴り響く。

『聞こえるかセシリー。応答しろ！』

管制からの呼びかけもひっきりなしに届けられていたけれど――。

「あくぅぅぅっ、今はそれどころじゃないっ……っつーの！」

――マジで返事をする余裕もない。なぜなら。

にゅぢゅりゅるるるるっ！

赤々と濡れ光る大量の触手がコクピット内にあふれ返り、蠢いている。

じっとりとした湿り気に、ぶよぶよとつかみどころのない触れ心地。ツルリと滑らかな質感を、起動スーツ越しにもはっきりと感じ取ることができた。

管制は「精神汚染による幻覚症状だ」とかなんとか吠えていたけれど、とてもそうは思えなかった。

――ぬぢゅっ！

「ひゃぁ……っ！　ど、どこ触ってんのよっ、このスケベ触手が！」

スーツの上から、へそ付近をなめしゃぶられた。相手のどこが舌なのか判然としないけれど、確かにそのようにされたと感じる。

ぞわぞわと全身に奔る怖気に混じって、もどかしいような、切ないような感覚が駆け抜けた。

『いいかセシリー！　落ち着くんだ。今見えてるものや感じてるものは、全部お前の欲求を具現化して精神を剥き出しにしようとする敵の攻撃で……』

「だ、れが欲求不満だってぇ……？　ハッ……馬鹿も休み休み言いなさいよね……っ」

――ぐりゅうっ！

「ひゃぐっ！」

股下に潜り入った肉厚の触手がのたうって、刺激を受けた腰が反射的に浮き上がる。

ツルツルの表皮をまとっているせいでつかみどころがなく、触手どもは実質好き放題に人の身体中を這いずり回ってくれていた。

異形の執拗な愛撫によって、起動スーツ内側の肉体は明らかに火照りを帯び始めている。今しがた強（しぶと）かに擦られた股の割れ目も、早々にじっとりと蜜を染ませて震えてしまっている有様だ。

「そ、操縦桿を握ってなきゃ。今アタシが席を離れたら、ぁっ……」

ぷっくりと胸元に浮いた乳首をねちっこくなで擦られながら、それでも懸命に操縦桿にすがりつく。もじつく尻を、どうにか操縦席に座らせ続ける。

いくら体感を強めて機体とのシンクロ率を高めるためといえ、素肌に直接まとう起動スーツは、あまりにも薄く、無防備だ。

「あ、アタシが戦わなきゃ……この星はエイリアンだらけになっちゃうんだから、ぁぁっ……ひっ！」

襲来する異星の未知生物から星を、祖国を守るため。人体とシンクロすることで驚異的な強さを発揮する機体を駆り、これまで何度も危機を乗り越えてきた。

（でも、本当はもう戦うのはイヤでしょ？）

「……ッ⁉　だ、誰よあんたっ！」

不意に、管制からのものではない声がコクピットに――いや、頭の中で直接響く。

（普通の女の子らしく、友だちとおしゃべりしたり。おしゃれして、恋して……エッチだって）

「うるさいっ！　アタシはそんなどこにでもいる俗物女じゃないわよっ！」

左手で操縦桿を、右手は巻きつく触手の群れを握り潰し、声の限りに叫びたてた。叫んでしまってから激情に駆られた理由に――図星を指されたからだ――気づき、赤面したのも束の間。

異形は人の感情を逆なでするみたいに、しつこく胸のふくらみをコネコネ。ねちっこくもみ立てては、チョンチョンと的確に乳首のある場所を突っついてくる。

（我慢しなくたって、いいじゃん。アタシはアタシの好きなように生きるの。……ね？）

心の中に直接届くその声は、まぎれもなく自分自身の――声の響きに違いなかった。

「これも精神汚染、攻撃の一環って……わけ？　ハンッ、こんな手でどうにかしようなんて見くびられた、っぁ！　もんね……」

づる、っ！　ぬづるるるうっ！　ぎゅむ、ぎゅむぶぢゅうう！

思い切り乳房をもみ潰され、意識が、痛みと甘痒さの狭間に沈殿してゆく。

（ほぉら。乳首だってもうこんなにカチカチに勃起してるじゃない。正直になっちゃおうよ）

「っさい……！　うるさいうるさいうるさいっ！」

いつも以上に敏感になった肢体の火照りは、もはや抑えがたいレベルにまで達してしまっている。

きっと、全身に這う触手の体液に、発情成分か何かが含まれているのだ。

「でなきゃ、こんな……っぁァ！　こんっ、なっ、あっあああァァ……〜〜……っ！」

また。今度はより激しく、淫らに座席から腰が飛び跳ねた。ぐっちょりと濡れた股間に裏地が張りついて心地が悪い――そう感じた瞬間に、起動スーツの股間部分は破り取られ、湿った割れ目が丸ごと露わとなってしまう。

「やっ、あ……ど、っ、うして、ぇ……」

聖換天使
エクスラグナ
Reincarnate Angel Exragna
第一話 エクスラグナ
小説 NOVEL 上田ながの
挿絵 ILLUSTRATION 雛森瑞羽
異形達を屠る
最強無敵の天使降臨!!
著者近刊
『美畜退魔師 痴獄の学園』
18
好評発売中!

街に現れたそいつは異形の魔物だった。一見するとナメクジにも見える生物。ただし、その大きさはちょっとした象くらいはあるだろうか？　緑色の体表をうねらせながら、嗅ぐだけで吐き気を催させるような体臭を街中に漂わせている。そいつがほんの少し蠢くだけで、アスファルトで覆われた道路が腐った。

「い、いやっ……も、もう、ゆ、ゆるひて……ゆるひでぐだざいぃ……」

化け物はただそこに存在しているだけではない。そいつは身体から触手を伸ばし、女性の身体に巻き付けていた。蛇の胴回りくらいはありそうな緑の触手が、軟体動物のようにうねる。ゴムを思わせる柔らかでありながら弾力性のある体表から分泌させる肉液で衣服を溶かし、女性の肌を晒させると、膣を容赦なく犯す。醜悪な肉の塊で秘裂を押し開き、何度も何度も膣奥を突いていた。

手足や腰を触手によって拘束され、宙吊りにされた女性に逃げる術はない。

「だずげっで、だずげでぇえええ」

黒髪の美しい女性は溶けた衣服から乳房を晒しつつ、泣きながら許しを請うことしかできなかった。

あまりに無力で哀れな姿であったが、化け物は慈悲の心など持ち合わせない。女を犯し、繁殖する。化け物の行動原理はただそれだけだった。

「やだっ！　やだよぉお」

犯されるのは一人だけではない。何人もの女性や少女達が、餌食となっていた。

「こ、このっ！　化け物めぇっ!!」

通報を受けたらしい警官隊が、化け物に向かって銃を撃つ。パンパンという乾いた音が辺り一帯に響き渡った。犯される女性達の身体は宙に持ち上げられている。撃つことに躊躇う必要はない。

だが、そのどれもが通じない。化け物に命中はするのだけれど、すべての弾はゼラチンのように柔らかな体表に食い込み、飲み込まれるだけで、化け物に対して何らダメージを与えることができなかった。

「く、くそっ！　くそぉおおっ！」

それでも警官隊は銃を撃つ。撃ち続ける。中には恐怖し、震え、腰を抜かす者もいたが、銃口だけは化け物に向け、撃ち続ける。

犯される被害者達を救いたい――彼らの強い想いが、銃弾に込められているかのようですらあった。

が――想いだけでは届かない。

「■△○×■■■」

化け物が言葉にならない咆哮を上げた。同時に触手が振るわれる。

「ぎゃあああっ！」

まるで鋭い刃だった。一人の警官の腕が斬り飛ばされる。鮮血が辺り一帯に飛び散った。更に触手は牙を剥く。

人形でもなぎ倒していくかのように、次々と警官隊を血祭りに上げていった。

「ひっ、ひぃいいいっ!!」

腕を斬られ、胸を突かれ、首を刎ねられる。降り注ぐのは血の雨。救いたいという想いをズタズタにするには十分すぎる状況だった。

「い、いやだっ！　いやだぁあああっ!!」

遂に警官隊は総崩れとなる。銃を捨て、背を向け、逃げ出す。彼らを責めることなど誰にもできない。死にたくない。誰だって死にたくなどないのだ。

「××○◇●●」

慈悲なき化け物はそれでも攻撃の手を緩めない。逃げ惑う警官隊に対し、更に触手を振るおうとする。

「「待ちなさいっ!!」」

鈴の音のような二つの声が辺り一帯に響き渡ったのは、その時のことだった。

「■×○○▲」

触手も動きを止める。どこに目があるのか分からないが、化け物は間違いなく声の聞こえてきた方向へと身体を向けた。

そこにいたのは二人の少女。

一人は燃えるような紅い髪をポニーテールに結っている。長い睫毛が揺れる瞳を鋭く細め、化け物を睨んでいた。

「絶対に許さねぇ」

少女――高坂レイはプルンッと桃のように瑞々しい唇を血が滲むのではないかというほどに噛み締めながら、化け物に対して敵意を燃やす。激情が小柄な身体から溢れ出ていた。

「……絶対にやっつけてやるんだから！」

もう一人の少女――高坂リナも怒りの炎を燃やす。レイの紅い髪とは対照的な肩の辺りで切り揃えた蒼い髪を揺らしながら、丸みを帯びた瞳で化け物を睨んだ。

二人の身長は一五〇センチくらいだろうか？　二人ともブレザータイプの制服に身を包んでいる。胸元はお世辞にも豊かとは言い難い――というかツルペタだ。ウェストも引き締まっているわけではなく、タータンチェックのスカートから伸びる脚もスラリとした脚線美とはとてもいえない。完全な幼児体型である。

ただ、それが二人の魅力を増していた。並んでいるとまるで人形の姉妹のようにも見える。二人が並んで歩いている姿を見れば、誰もがほっこりと温かな笑みを浮かべることは間違いないだろう。

ただし、それはあくまで平時の場合でだ。今回のような状況――化け物の前でとなると、話は異なる。

「に、逃げなさいっ！　早く逃げなさいっ!!」

生き残った警官隊の一人が足を止め、声を上げた。巨大な化け物に相対するには、二人の存在はあまりにちっぽけにしか見えない。

「大丈夫だよ」
「うん。おじさんこそ早く逃げて」
しかし、二人は逃げるような素振りを見せなかった。可愛らしい顔には不似合いな怒りの表情を浮かべながら、互いに見つめ合い、頷き合うと――
「「メタモルフォーゼ!!」」
右手を天に掲げ、音を奏でるような声を上げた。
カアアアッ!!
二人の身体が輝きに満ちる。同時に身に着けていたブレザー制服が光の粒子となって溶け、消えた。露わになる白い肌。ツルペタな胸、毛も生えていない秘裂まで晒される。生まれたままの無垢な少女達の裸身がそこにあった。この肢体を新たな光が包み込む。それらの光がブーツとなり、グローブに変わり、スカートに変化し、胸元を彩るリボンを構成していった。
「魔殺天使(まさつてんし)レイ――悪はアタシが燃やし尽くす!!」
赤を基調としたバトルドレスに身を包み、レイは力強い言葉を紡ぐ。
「魔殺天使リナ――邪悪な者はボクが洗い流してやるんだから!!」
青を基調としたバトルドレスに身を包み、リナは元気に宣言した。
「平和を脅かす醜い化け物……」
「ボク達が退治してやるんだから!!」
ビシッと二人はポーズを決める。
「こ、これは……」
呆然と生き残った者が呟いた。
「もう大丈夫だ。ここはアタシ達に任せてあんた達は逃げな」
「そうそう。ここはボク達に任せて」
二人は自信に満ちた表情で告げる。言葉の中に恐れは一切存在しなかった。
「……あ、わ、分かった……。す、すぐに応援を呼んでくる!!」
それが彼らにも伝わったのだろう。生き残り達は頷きながら逃げていく。
「そうそう。それでいいんだ」
その姿を見つめながら、レイはうんうんと頷く。
「だよね。ここから先はあんまり人には見せたくないしね」
リナもこれに同意しながら、改めて化け物を睨んだ。その瞳に浮かぶのは怒り――を超越した少女には似合わない憎悪の炎だった。
「お前達は絶対に許さねぇ。肉の一片も残らずに消滅させてやるよ!」
憎悪と共にレイは右手を突き出す。
「ファイアーカッター」
言葉と共に強大な力がレイの肉体から溢れ出した。力によって生み出された炎が刃を作り出す。
シュパアアアッ!
「――■■■■■!!」
刃がすべての触手を切り裂いた。
「きゃああっ!」
拘束され、陵辱されていた女性達が解放される。吊り上げられていた肉体が、地面に落下していった。
「バブルボール」
これに対して今度はリナが力を発動させる。作り出されたのは巨大なシャボン玉だった。これらが落下する女性達を優しく包む。彼女達は泡の中で、安心したように眠りについた。
「さあ、あとはテメーだけだ」
触手を睨む。先程以上の怒りが、小柄な身体から溢れ出していた。
この怒りはレイ、そしてリナにとっては当たり前のものである。憎悪こそが二人にとっての力だった。
すべての始まりは一月前。突如として街に出現した化け物――悪魔の兵士(Evil Pawn)――通称EPに襲われたことから始まる。
あの頃、レイとリナはごく普通のどこにでもいる幸せな双子の姉妹でしかなかった。父と母との四人暮らし。特別に裕福だったというわけではないけれど、家族が一緒にいるというだけで幸せだった。みんなで笑い合う生活――それがずっと続くものだと思っていた。
でも、それはあっさりと破壊されてしまった。EPの出現によって……。
みんなで出かけた家族旅行。その先で父は殺された。母は二人の目の前で犯された上に、EPの子を産まされ、発狂し、そのまま死んでしまった。そしてレイとリナも散々陵辱された。それこそ狂い死にしたいと思うほどに……。
しかし、二人は救われた。〝彼女〟によって。そして力を得たのである――魔殺天使に変身する力を。
〝彼女〟によればこの力は犯された時にEPから流し込まれた魔力によって生まれたものだろうということだった。
憎むべき相手から与えられた力――正直憎い。父と母を殺した存在の力など、存在しているだけで汚らわしかった。実際〝彼女〟に力を消すことは可能だともいわれている。
それでも二人は力を受け入れた。この力があれば、EPどもを根絶やしにできるから……。
「アタシは――」
「ボクは――」
「「EPを滅ぼすまで戦い続ける!!」」
それが二人の誓いだった。
「行くぜぇっ! ファイアースピアッ!!」
炎が槍を作り出す。レイの真価は接近戦にあった。
「ハアッ!!」

著者近況 どうも皆様こんにちは♪ 最近家の母が通っている整骨院に行ったら、母より身体が硬いと先生に言われてしまった上田ながのです！ まずウォーキングから始めましょうねっていわれちゃいましたよ～。お、俺の身体はボロボロだぁ！ あ、内容小説と関係ない……。

大地を蹴り、敵に接近する。これに対し化け物――EPは触手を幾本も伸ばしてきた。
「レインアロー!!」
これに対応するのはリナだ。力で生み出した水の弓矢を天に向けて撃ち放つ。
シュバババババッ!!
すると一本だったはずの矢は、数十――いや、数百にまで数を増やし、まるで雨のように敵に向かって降り注ぐ。
「□×●▲▲△!!」
矢の一本一本が、伸ばされた触手を切り裂き、EPの醜悪な肉体に突き刺さった。EPは言葉にならない声を上げて悶える。
「もらったぜ!」
この隙を見逃しはしない。敵の懐に入り込み、槍の先端を向ける。
「ハアアアアアッ!!」
ありったけの力を穂先に込め――
「ファイアースピア千烈突きぃいいっ!!」
ヒュバババババッ!!
一本の槍が千本に分裂して見えるほどの速度で敵を突いた。
「――□□■■■」
敵の醜悪な肉体がズタズタになっていく。緑色の体液が飛び散った。切り裂かれた触手が宙を舞う。
「だぁあああああっ!」
全勢力を込めた一撃で、EPの中央を刺し貫いた。
「××△○◇!!」
この刹那、化け物が動く。槍をその身に受けながらも、新たな触手を生み出し、突き出してくる。
ズドッ!
「ぐはぁあああっ!」
鳩尾(みぞおち)に入る触手の一撃に、小柄な身体は吹き飛んだ。一瞬息が詰まり、目の前がプツッと電源を切られたテレビのように真っ黒に染まる。
「○▲○○■■!」
この隙を見逃さず、EPは追撃の触手を伸ばす。
「アイスシールド!!」
これにリナが素早く反応した。作り出した氷の盾が、レイの身体を守る。触手はシールドに触れた瞬間凍りつき、砕けた。
「わ、わりい」
「油断は禁物だよ」
「わ〜ってるって……」
この隙に紅髪の魔殺天使は体勢を整える。
「しっかし、思った以上にタフだな。前までのEPならさっきので終わってたぞ」
「進化でもしてるのかな? それでも……勝つのはボク達だけどね」
ニイッと自信ありげにリナは笑った。彼女の笑みに「そうだな」と答えながら、ギュッと手を繋ぐ。
「じゃああれをやるぞ。準備はいいなリナ?」
「勿論。レイねえこそできてる?」
「たりめ〜」
見つめ合いながら、頷き合う。
「■■■!!」
この隙をつくように、またも触手が作り出され、放たれる。
二人はこれを見つめつつも、焦りなど微塵も見せない。手を繋ぎ合ったまま、静かに息を整える。
「炎の力――」
「水の力――」
やがて二人はゆっくりと口を開いた。
「「二つの力を一つに――」」
空いた手を敵に向かって突き出す。
「「ユニゾンバーストロンド!!」」
二人の力が混ざり合い、強大な攻撃の奔流となって両の手から撃ち放たれた。
バッシュウウウウウウンンッ!!
尋常でないエネルギーが触手を飲み込む。勿論それだけでは止まらず、EPの肉体までも一撃のもとに吹き飛ばした。
「――――」
断末魔の悲鳴を上げる間すら与えない。
肉片一つ残らず、敵を完全消滅させた。
「アタシらの」
「勝ちってね」
双子はない胸を張る。
「キャアアアッ」
「いやぁあああっ!」
複数の悲鳴が上がったのはその瞬間だった。
「な、なんだ!?」
敵はたった今完全消滅させたはず。だというのに一体何が?
「レイねえあそこ!」
先に気付いたのはリナだった。彼女が指さす先を見つめ――
「なっ!?」
絶句する。
視線の先に浮いているのはバブルボールだ。悲鳴を上げたのはその中の女性達。彼女達の身体の中からは、幾本もの触手が伸びていた。
「ど、どうなってる!? 本体は消滅したはずだろ!?」
本来EPが生み出す触手は、本体から切り離されればその時点で消滅するはずだった。だというのに、彼女達の体内に残っていた触手が活動している。あり得ないはずの光景だった。
「……ま、まさか……」
しばらく呆然とした後、何かに気付いたように蒼髪の魔殺天使が口を開く。
「あ、あっちが本体?」

著者近刊 『美畜退魔師 痴獄の学園』、『魔界王女』シリーズ、『令嬢捜査官洗脳計画 抗えぬ美態調教』、『僕のパーティーが修羅場すぎて世界が救えない』シリーズ、『マゾらぶ! 幼なじみは性奴隷』ほか 好評発売中!

「――なっ」
ならば説明はつく。だが、そのようなことは今まで一度もなかった。
「チッ！　仕方ねえ。やるしかねえぞ」
これまでなかった事態に混乱してしまうけれど、戸惑っている暇はない。彼女達を救わなければならなかった。このまま放っておいたら、以前の自分達の二の舞だ。あんな目に遭う人間を増やしたくなどない。
「でも、どうやって⁉」
「そ、それは……」
ただ、気持ちが逸っても、女性達を救う術はなかった。触手は完全に女性達に取り憑いてしまっている。この状態では手を出すことができない。
「く、くそっ！」
どうする？　どうすればいい？　〝あの人〟ならこういう時にどうする？
必死に考える。
「わ、わああっ！」
リナが悲鳴を上げたのはこの刹那のことだった。
「リナッ⁉　くっ、な、なんだっ⁉」
慌てて妹の方へと視線を移そうとする。この瞬間を狙い撃ちするように、足下に巨大な魔法陣のようなものが作り出された。その中から幾本もの触手が姿を現す。
「こ、このおっ⁉」
伸びる触手によって手首、足首が拘束された。慌ててこれを引き千切ろうともがくのだが、先程魔殺天使としての最大技を放ってしまった為、まともに力を込めることができない。
にちゃっ！　ぐちゃあっ！
「は、はなせっ！　このやろっ！　放さないとぶっ殺すぞ⁉」
「こいつ！　離れて！　離れてよォっ⁉」
もがく姉妹を嘲笑うように、触手が足首から太股へと上がってきた。ネトネトの体液に覆われた感触が気色悪い。ぶつぶつと肌が粟立っていった。
（あ、あんな目に遭うのはもう嫌だ⁉）
一月前の陵辱を自然と思い出してしまう。
「うおおおっ！　燃えろォおおっ⁉」
化け物に犯されるなど二度とごめんだった。身体の中に残る力を燃やす。炎がレイを包み込んだ。
「くっ！　うあっ！　止まらない！　どうして止まらないんだっ⁉」
しかし触手は動きを止めない。炎などものともせず、白い肌に粘液の跡を残していく。
（足りない。力が圧倒的に足りないんだ！　くそ……もっと集中させろ！　最後の一滴まで力を――）
身体の中に残っているすべての力を結集させる。それならばこいつを振り解くことだって……。
触手によって身体が宙に持ち上げられる。両手両足を左右に力強く引っ張られた。
「うあっ！　さ、裂けるっ⁉　裂けちゃうよぉ」
水平に広げられる足。スカートが捲れ、レイの紅いショーツが、リナの蒼いショーツが露わにされてしまった。妹が悲鳴を上げる。
「ぐ、そ、それ以上引っ張るなぁ！」
ミシミシと関節が軋む音が聞こえそうなほどに足を開かされてしまう。反射的に声を上げるが、ＥＰにこれを聞き届けてくれるような意識というものがあるとはとても思えなかった。
肉紐がショーツを撫で回し始める。生温かな体液が下着に染み込んでくるのが分かった。
「くひいっ」
ショーツの上から秘裂をなぞられる。瞬間、ピリッと全身を駆け抜けるような刺激が走った。ビクンッと身体が震える。
（こ、これは……やばい……）
嫌でも一月前の陵辱を思い出してしまう。
抵抗もできないまま、何度も犯された記憶だ。触手によって処女を奪われ、汚液を散々膣中に流し込まれた。その際に与えられた絶望を忘れたことなど一度もない。あの時の悲しみを忘れたことなど一度もない。
そして、与えられた快楽を忘れたことも――
「いやっ！　いやだっ⁉　あんなのもう嫌だよぉ」
リナも思い出してしまったらしい。悲鳴を上げて身をよじる。魔殺天使ではなく、高坂リナという一人の少女としての姿を、彼女は見せてしまっていた。
「だ、大丈夫だリナ！　大丈夫。お前はアタシが救ってやるから。お姉ちゃんに任せろ⁉」
本当はレイだって彼女みたいに悲鳴を上げたかった。犯されるのは恐ろしい。けれど、それ以上に妹を救わなければならないという気持ちが勝る。
「れ、レイねえ」
半泣きになりながら、リナはこちらを見つめてきた。そんな妹に笑いかけてみせる。
（集中だ。集中しろ！）
何度も自分自身に言い聞かせ、意識を自分の内側へと潜り込ませようとした。
「んああっ！」
が、それを嘲笑うように、蠢く触手がバトルドレスの胸元を溶かす。ツルペタな胸が露わにされてしまった。そこに幾本もの触手が伸びてくる。肉紐の先端部が花のようにクパッと開き、桜の花びらのような乳輪と乳首に吸い付いてきた。
「くっ！　き、きもちわりーんだよ！　離れろ化け物っ⁉　ぶっ殺すぞ！」
少女は口汚くこれを罵る。とはいえ、当然通じることなどなく――
じゅずるるるるっ！
「んあああっ」

触手による吸引が始まった。
「す、吸うなっ！　こ、このっ――吸うんじゃねえ！」
途端に痺れるような感覚が身を襲う。集中させていた意識が四散した。
「や、やだ。おっぱい……ボクのおっぱい吸わないでよぉっ！」
同様の責めはリナに対しても行われる。じゅずっ！　ぶじゅずるるっという下品な音が辺り一面に響き渡った。
平らな乳房が触手の汚い唾液によって穢されていく。白い肌がヌラヌラと妖しく光った。
しかも、触手の責めは胸に対してのみ行われるわけではない。乳房を吸いつつ、ショーツの上から秘裂をなぞることを止めようとしなかった。
「くっ！　んんんんっ！　くっ、す、少しの、し、辛抱だリナ。す、すぐにあ、アタシが助けてやるからなっ！　んんん」
以前刻まれた愉悦の味が蘇ってくる。乳房を吸われ、秘裂を撫でられるたび、明らかな快楽が身を襲ってきた。
それでも魔殺天使は妹に語りかけ、意識を集中させようとする。たった一人残された家族。妹だけは守りたかった。
（こんな程度じゃアタシは負けねぇ。負けるわけにはいかねぇんだ）
強い意志が少女を支える。
だが――
ぶじゅうっ！
「なっ！　こ、このっ！　この野郎！　そ、そこには、そこには触るんじゃねえっ!!」
遂にショーツを破り取られてしまう。まだ毛も生えていない幼い秘裂が、白日の下に晒された。ショーツの上から嬲られた為か、花弁は僅かに開いてしまっており、ピンク色の柔肉が覗き見えてしまっていた。肉襞はうっすらと湿っている。
「や、やだよっ！　こんなことしないでよっ！」
リナの陰部も晒されていた。彼女の花弁に触手が吸い付く。ニチャニチャと音を立てながら、襞の一枚一枚を吸引していくのが分かった。
「す、吸わないで。そんなところ吸わないでぇ。あっ！　んっんっんん」
襞を吸われ、ビクビクと身体を震わせる。必死に口を引き結び声を上げないようにしてはいるものの、快楽を覚えてしまっていることは間違いないように見えた。
「す、少し……ほんの少し耐えるだけだ。す、すぐにアタシが助けるか――んんんっ!!」
必死に妹を励まそうとするのだが、触手は容赦などしてくれない。レイの陰部にも肉先が押しつけられた。しかも、リナに行っているような吸引をしてくるわけではない。ニチッと媚肉に肉先が沈む。
「まさか……止めろ。そ、それは止め――」
敵が何を考えているのか理解する。いや、理解させられてしまう。全身から血の気が引いていくのを感じながら、この動きを止めようと口を開いたのだが――
ぶじゅぽっ！　ぐじゅぽおおっ！
「んあああっ！　は、挿入って……挿入ってきた!!　あ、アタシの膣中にば、化け物が挿入ってきたっ!!」
聞き入れてもらえるはずなどなく、触手が膣中に侵入してきた。幼い秘裂が痛々しいほどに押し開かれる。身体の中に穴を開けられていくかのような感覚が走った。
「ぬ、ぬっけ！　止めろ！　挿入れるなっ！　そ、それ以上はやめ――んぁあああっ！」
陵辱から逃れようと必死に身をよじったが、拘束された状態での抵抗など意味を持たない。触手は嘲笑うように、二人の体勢を変えてくる。まるで空中で四つん這いになっているかのような形にされた。姉妹が互いに向かい合う。涙を流すリナの顔が目の前に……。その状態で遂にはズンッと膣奥を叩かれてしまった。
「○○■△」
触手が笑う。まるで「どうだ？　気持ちいいだろ？」と嘲笑しながら問うてきているように聞こえた。
「か、感じない。こ、こんなことで、あ、アタシは感じないっ！　て、テメーなんかで感じない！」
正直なことをいえば膣奥を突かれただけで、意識が飛びそうなほどの快楽を肉体は覚えてしまっていた。結合部からはジュワリッと愛液が溢れ出す。それでもレイは快楽を否定した。
「んあああっ！　は、挿入ってる！　挿入ってるぅ!!　あっあっあっ」
リナも犯されている。綺麗な秘裂に突き刺さる醜悪な肉触手。淫靡な姿だった。それを見つめながら、再び意識を力に集中させる。
「アタシが――んっんっ――た、助けてやるからな。す、少し、ま、待ってろ……」
姉が弱い姿を見せるわけにはいかないのだ。妹を安心させるように、膣奥を突かれながらレイは微笑んだ。
「あ……うん。そ、そうだよ。ボクが、ボクがレイねえを――あっあっあっ――お、お姉ちゃんをた、助ける。助けてあげるっ！」
この笑みに、少女のように怯えていたリナも頷いた。救いたいという強い想いが伝わったのだろう。彼女も浮かべていた怯えを消し、戦士の顔に戻る。
二人の間に希望が生まれた気がした。二人の気持ちが一つになれば、こんな化け物には負けない。

身体の奥底から力が湧き上がってくるのを感じた。しかし、希望など簡単に打ち砕かれてしまう。
ずちっ！
「あっ!? え、そ、そっちは！」
新たに向けられた触手が、肛門に押し当てられる。
「な、何をする気だ？」
一瞬敵の行動の意味が理解できなかった。けれど、すぐに現実を理解する。
「う、嘘だろ？ い、今……こ、こっちに挿入ってるんだぞ……む、無理だ……」
湧き上がりかけていた力が消え去る。代わりに覚えたものは恐怖だった。
「だ、駄目だ――そ、それだけはだ――おっ！ おっおっおっ、ほぉおおおっ!!」
ずじゅぶっ！ みぢっ、みぢみぢみぢみぢぃっ!!
躊躇などない。思いやりなど欠片も存在しない。そうすることが当然だというように、肉触手が肛門を押し開いた。
「おっ！ つ、つぶれっる！ あ、アタシっが、つ潰れるぅっ！ おおお！ さ、裂けるっ！ し、尻が、アタシの尻が裂けるぅ!! おおおお」
触手で膣を犯されつつのアナル蹂躙。小さな肛門が痛々しいほどに押し広げられていく。肉壁が膣と直腸の触手によって潰されていくかのような感覚を覚えた。
「は、挿入らない。そ、それ以上は――んふーんふーんふー、は、はいらなっい！ も、もうとま――んほぉおおっ!!」
ズンッと腸奥まで触手は潜り込む。
じょばっ！ じょぼろろろっ！ ぼじょおおっ！
「お、おじっご！ ふひーふひーふひー、おじっごでぢゃっでるぅ」
肉触手に圧迫され、膀胱が押し潰された。黄金水が溢れ出す。止めることなどできない。尿道を小便が通り抜ける感覚に、肉体は愉悦を覚えてビクビクと震えてしまった。
「お、お姉ちゃん！ んっんっんっ！ お、お姉ちゃんっ!!」
この姿に膣を犯され、乳房を吸われながら、妹が声をかけてくる。
（だ、駄目だ。リナにあんな顔させちゃ駄目だ……あ、アタシはお、お姉ちゃんなんだぞ）
今にも泣き出しそうな顔だった。彼女にそんな表情をさせるわけにはいかない。だからこそ、お漏らしをしながらもレイは笑ったのだが――
「こ、これくらい、も、問題な――んほぉおおっ!!」
これは一瞬で消されてしまう。腸奥の触手が更に奥へと侵食を始めたからだ。
「な、ど、どうする気だ!? おっおっ、そ、それ以上は、は、挿入らないっ！ 挿入らないぞぉ」
直腸内が蹂躙されていく。巨大な異物によって、内臓が拡張されていた。この感覚が肉悦となって身を襲う。
「と、とまっ――どまっれ！ どまれぇえええっ!!」
ボコリッと下腹部が膨らんだ。腸内で触手が蠢いているのが、外側からでも分かる。
「んふーんふーんふー」
意識を力に集中させるどころではなかった。これ以上体内に侵入されないよう、括約筋に力を込めるのがやっとである。
「こ、こすれっる！ ひっ！ くひぃいいっ!!」
けれども人間の力だけで化け物を止めることなどできない。それどころか、力を込めたことにより、より摩擦が大きくなり、与えられる刺激が強いものに変わってしまった。
ズリッと直腸を擦られるだけで、身体中がビクビクと震える。同時に膣奥を突かれると、それだけで達してしまいそうだった。
「■○○×△□」
イキそうなのかと問うようEPが咆哮を上げる。
「い、イがない。て、テメーみたいなば、化け物にイカされることなんか……おっおっおっ……あ、ありえねぇ」
それは敵に対する言葉であると同時に、自分自身に言い聞かせるものでもあった。
じゅごっ！ ぶじゅごぉっ!!
「おッ！ むほっ！ そ、そこはっ、ぞ、ぞごはお、おながっ！ おながだぁっ！」
けれど否定の言葉は敵を喜ばせる結果にしかならない。耐えるレイを笑うように、化け物は更に肉奥へと触手を進めてきた。
遂には直腸から胃の入り口にまで到達する。勿論、そこで止まる気などないようだった。
「や、やべっろ……そ、それ以上はやべ――んほぉおおっ!! お、おっなが、ぎ、ぎだ！ お、おながのながにまできだぁあああっ!! んひっんひぃいい」
制止の言葉など届かない。容赦も躊躇もなく、遂には胃まで陵辱されてしまう。この瞬間、ほんの数瞬意識が飛んだ。
ビックンビックンと全身が震える。触手に犯される膣から、ブシュッと愛液が飛び散った。
「○●○●□×」
この姿を見てEPが笑った気がする。
「ち、ちがっう！ い、イッてない。あ、アタシはイッてないっ!!」
直接達したのかと問われたわけではないのに、レイはイッてないと連呼し、絶頂を否定した。
ぐじゅぽっ！ ずごぉおおっ！
「ひへっ！ あ、ま、まだっ？ まだぐっるのが!? こ、これ以上は、む、無理だ！ 無理だぁっ!!」
否定に対する触手の答えは、更なる陵辱。胃の中

を蹂躙した触手が、今度は食道まで犯し始める。
（こ、殺される。このままじゃ殺される……）
触手に刺し貫かれたら生きてなどいられない。血の気が引いていくのを感じた。
（ち、力……は、早く力を集中させないと……）
自分の為にも、リナの為にも時間がない。
魔殺天使は必死だった。
しかし、意識を集中させることは許されない。食道に対する陵辱。これさえも肉体は快感として受け止めてしまっていた。
「お、おぼっ！　ぎ、ぎっでる。の、喉の、す、すぐしょこまで、きでるぅ。や、やっだ。ご、ごんなのいやだぁ」
触手が蠢くたびに軽く意識が飛んでしまう状況で、集中などできるはずもなかった。遂に触手は食道から喉奥にまで達する。
「じ、じぬっ……ご、ごんなのじぬう……。も、もうやべろ。だ、だのむ……だじゅげで、だじゅげでぐれぇ……。じにだぐない。じにだぐないよぉ」
妹の為に必死に耐えてきたけれど、もう限界だった。眦からボロボロと涙が零れた。
「お、おねがっい。助けて、お姉ちゃんを助けてっ!!　ボクはどうなってもいいから助け――んあああ」
この姿に犯される妹も嘆願の声を上げてくれる。
しかし――
ぼじゅっ！　どぼじゅうっ!!
「おっ！　こほっ!!　んおおおお！　んぶえっ、ぶふぇぇえ」
懇願など無慈悲な化け物には届かない。遂には触手によって全身を貫通されてしまった。口腔からグロテスクな肉先が姿を現す。
「あ……んぶっ！　い、いっぶ！　いぶぅううっ」
これが引き金となったかのように、絶頂感が全身に広がっていった。耐えることなどできない。壊れた玩具のように何度も身体を痙攣させながら、魔殺天使は愛液をブシャアッと飛ばし、再び黄金水を周囲に撒き散らした。
「あ……あば……ふぶう……」
地面と身体を俯せ状態で水平にされながら、串焼きにされた蛙のようにピクッピクッと全身を震わせる。化け物と戦っていた戦士の面影はどこにもなかった。
「お、お姉ちゃん！　お姉ちゃん!!」
目の前にいるはずのリナの声が遠くに聞こえる。
（た、すけないと……り、リナを助けないと……）
心も身体もボロボロだった。それでも妹を救いたいという気持ちだけは死んでいない。
（ち、力を――）
「むぶえぇっ！」
が、ここまでしてなお触手は動きを止めなかった。口腔から飛び出した触手が今度はリナに向かって伸びていく。
（ま、まっしゃが……だ、だめだぁ。しょ、しょれだげはやべろぉ）
EPが何を考えているのか理解する。これだけは止めねばならなかった。
（頼む。や、止めてくれっ！　お願いだから……リナだけは許して。ゆるじでよぉ）
けれども今の状況では心の中で懇願することしかできない。あまりに無力だった。そして、懇願が通じるはずもなく――
じゅずぼぉっ！
「やっ！　んあっ！　んもぉあぁっ！　く、くるっしい!!　もぼっ、く、ぐるじいよ、お、おねえぢゃんっ！」
遂に触手はリナの口腔にねじ込まれる。しかも、ただ口の中を犯すだけではない。喉奥から食道に潜り込んでいくのが分かった。ボコリッとリナの首筋が内側から膨れあがる。
（や、止めろよっ！　リナを、リナを汚すのは止めろよぉっ!!）
これは姉にとってあまりに絶望的な光景だった。涙が再び溢れ出す。
「もっ、んぼっ！　んぼぉおおっ!!」
触手に内臓を犯され、苦しげに震える妹の姿に、心が引き裂かれてしまいそうだった。
じゅずぶっ！　じゅずぶうっ！
「んひっ！　んひぃいいいっ!!」
時折妹は全身をビクビク震わせる。彼女が達しているのだということがレイにも分かった。
（だっめだ。あ、アタシも、アタシもイクぅっ！）
そんな妹の姿を見つめながら、自分自身も達する。辛いはずなのに、苦しいはずなのに、身体がドロドロに蕩けてしまいそうなほどの快楽を覚えてしまっていた。
ぐじゅっ！　じゅずぼっ！
「あ、あへぁあああっ！　い、いっぶ！　ぼぎゅ、いぶぅうっ」
やがて口腔から挿入った肉触手が、リナの肉体を貫通し、肛門から先端を現す。瞬間、妹はまたも達した。
グルンッと白目を剥きながら、小便を垂れ流す。あまりに無様な姿だ。
（ああ、気持ちよさそうだ。リナ……凄く気持ちよさそう……あ、アタシも、アタシもまたいっぐぅ）
だというのに、その姿がとても心地よさそうで――引っ張られるようにレイも達した。
姉妹二人の絶頂。これに触手は喜ぶように、更に蠢く。リナの肛門から突き出した肉先を、再びレイの肛門に向けて伸ばしてきた。
ぐじゅぼっ！　じゅずぼぉおおっ！

「むぼっ！　お、おぼっ！　い、いっぷ！　いぶぅ」
「あへぁああっ！　らっめ、らべぇええ」
妹と姉は、口腔と肛門、二つの穴で繋がり合いながら、無様な悲鳴を上げて互いに達した。
（も、もうらべだぁ……な、何も考えられない……。あは、あはは……いいや、もう気持ちよければそれでいいや。リナと一緒ならそれで……）
理性が溶けていく。肉悦だけがすべてになっていた。うっとりとレイ、そしてリナは瞳を細める。
ぶびゅばっ！　どびゅっ！　ぶびゅるるっ!!
「あぢゅいぃ！　いっぐ！　いぐいぐいぐううっ♥」
「いぎゅのぉ。おねえひゃんといぐのぉ♥」
刹那、快楽に堕ちた二人を祝福するかのように、周囲の肉触手が白濁液を撃ち放ってきた。全身に濃厚熱液が降りかかる。この熱気が再び二人を快楽の頂へと押し上げていった。
（あへぁ……こりぇでいい……こりぇでもういいんらぁ♥）
気持ちよかった。何も考えられなくなるほどに……。この快楽さえあれば、他に何もいらない――そう思えた。
「諦めちゃ駄目よ」
凛とした声が響き渡ったのはその時のことだった。
（――え？）
一体誰の声なのか？　自然と瞳をそちらへと向けると、そこには一人の少女が立っていた。
桃色がかった髪をツインテール状に二つに結った少女。白銀色と黒色のコントラストが美しいバトルドレスを身に着けている。腰回りを彩るスカート部分が風に舞う様が美しい。
胸元は今にもバトルドレスを引き千切ってしまいそうなほどに膨らんでいた。キュッと窄まったウェストから張りのあるヒップまでが、艶めかしいラインを描いている。太股はムチッと膨らみ、女の色香を漂わせる。太股からふくらはぎが描く曲線が、どこか淫靡な空気を醸し出しているようにも見えた。それでいて、足を隠す白銀のブーツが、彼女の高潔さを現しているようにも見える。
顔立ちは同性であるレイですら一瞬見惚れるほどに整っていた。真っ直ぐ通った鼻筋に艶やかな唇。鋭く細められた切れ長の瞳が、真っ直ぐこちらを睨んでいた。
（え……くす……ラグナ……）
心の中で彼女の名を呼ぶ。
そう、レイは彼女を知っていた。いや、自分だけじゃない。リナも彼女を知っている。
彼女こそ、一月前に二人を助けてくれた〝あの人〟。レイとリナが目標としている人だった。
そう、彼女の名は――
「聖換天使（リンカネイトエンジェル）エクスラグナ――悪いけど、貴方を滅ぼすわ」
凛と名を名乗る。ただそれだけで、辺り一帯に充満していた邪気が吹き飛んでいくのを感じた。
「□■■■!!」
これに対してEPが吼える。余裕を持った咆哮に聞こえた。
（に、げてくれ……ひ、人質が取られているんだ……だから……）
未だバブルボールの中の一般人は人質に取られた状況である。下手に手を出せば彼女達が危ない。必死に視線でそれを訴えた。
「レイは優しいわね。でも大丈夫。なんの問題もないから」
これにエクスラグナは気付いてくれる。けれど彼女は引く様子を見せず、静かに右手をこちらに向けて突き出した。
「……エンジェルボイス！」
同時に右手に力が集中していく。それが衝撃波となって爆ぜた。
ラァァァァァァァァァ!!
美しい旋律。まさに天使の声を思わせるような音色が辺り一面に広がっていく。
瞬間――
「×■△□●△!!」
女性達を拘束していたEPが絶叫を上げて消滅する。放たれた旋律の中で、光の粒子へと変わっていった。
この一撃に耐えたのは、散々レイとリナを陵辱してきた触手だけだ。魔殺天使の力を吸収したことで、どうにか耐えることができたらしい。ただ、先程の一撃で触手はこちらの体内から分離し、地面に転がされていた。聖邪を識別し、邪のみを滅ぼす力による効力なのだろう。
「×△○■□！」
これにEPは怒りの声を上げる。体積を膨張させ、幾本もの触手を作り上げると、エクスラグナにそれを向ける。
シュバァァァッ！
空を切り裂く鋭い一撃。けれどエクスラグナはこれを避けようともせず、ただ静かに見つめ続ける。
「あ……あぶっ……はあっはあっ……危ねぇ！」
思わず声を上げた。
それでもエクスラグナは静かに立ち続ける。
「だ……だっめ……駄目ぇえぇ！」
リナが悲痛な悲鳴を上げた。
刹那――
ボッ!!
短い音と共に、触手が塵に変わる。
「――なっ!?」

レイですら呆然とする光景だった。一体何が起きたのだろうか？

「……貴方程度の力じゃ私に触れることはできないわ。私の力は貴方達EPが持つ邪の力とは正反対の聖なる力。聖と邪はぶつかり合えば対消滅する表裏一体のもの。でも、片方の力が圧倒的に大きければ……答えは見た通りよ」

疑問に対する答えがそれだった。

（軽くいうけど……尋常じゃねぇ……）

人質などなしでまともにぶつかり合えば、レイだって今回のEPには負けない。ただ、だからといって相手を一方的に消滅させるほどの力など持ち合わせてはいなかった。

敵のみを触れることなく消滅させるほどの力量差――少なくとも蟻と象くらいの差は必要である。

「×■……●○□！」

その事実にEPも気付いたようだった。一瞬怯んだ様子を見せた後、女を孕ませ、増殖するという本能しか持ち合わせていない生物が逃げに転じる。感情などないはずの生物が、恐怖しているようだった。

「逃がさないわよ……。ソニック――ブレイド！」

トンッとエクスラグナは大地を蹴る。

次の瞬間、黒衣の少女戦士の肉体は逃げに転じたはずのEPの前にあった。その手には巨大な剣が握られている。

「――――」

一瞬の静寂。次の瞬間、僅かに間を置いた後、EPの身体は二つに切り裂かれ、光の粒子となって消滅した。

「す、すげぇ……」

この光景を見つめながら呆然と呟く。視界に映るエクスラグナの背は、どんな存在よりも神々しく見えた。

「……ヒーリングウィング」

ポツリッと黒衣の戦士が呟く。すると彼女の背から天使を思わせる真白の翼が伸びた。純白の羽が大きく広がる。翼は辺り一帯を包み込む。

「あ……あったけぇ……」

「なんだか……身体の奥底にまで染み込んでくる」

まるで身体中を翼によってくるまれているかのように感じた。うっとりと瞳を細める。散々肉体に刻み込まれた汚辱の一つ一つが、翼の中で浄化されていくのを感じた。

光が消えた頃には、すっかり体力は元に戻っており、堕ちかけた心までも健やかに回復していた。レイとリナだけでなく、陵辱され、意識を失っている女性達も同様のように見える。

「凄い。こんな強大な癒やしの力を使えるなんて……。こんなのボクにはできない」

回復した自分の身体を見つめながら、リナは感動に身体を震わせる。

「やっぱすげえ。ラグナさんはやっぱりすげえよ」

感動しているのはレイも同じだった。

完全無欠の戦士。ありとあらゆる敵を圧倒する力を持ち、傷ついた人々までも救うことだってできる。エクスラグナの存在は、レイにとって理想そのものだった。

「悪かったわね遅くなって」

力の使用を終えたエクスラグナが、申し訳なさそうな表情で声をかけてきた。

「いえ、そんな……ありがとうございました。助けていただいて。ほらあ、レイねえも」

「ああ。本当に……ありがとうございます」

妹と一緒に頭を下げる。心からの感謝だ。

「ちょ、そんなに頭を下げないで。私はやるべきことをしただけだから。それに、ここに来るのが遅れてしまったし……」

すると彼女は恥ずかしそうに顔を真っ赤にした。彼女の正体は知らないし、年齢も分からない。けれど、こういう姿は何となく自分達に近いようにも見える。多分三、四歳年上なくらいだろう。

だからこそ、余計に尊敬の念も生まれるし、感謝の気持ちも大きなものとなった。

「でも、貴女のお陰でボク達は救われました。本当に感謝してるんです」

「ああ、ありがとうございますなんて言葉一つだけじゃたりねーくらいだよ」

一体こうして何度彼女に救われてきただろうか？

「も、もう！　そんなに人をからかわないで。そ、それじゃあわ、私はもう行くから。じ、じゃあね」

何度も彼女への素直な気持ちを姉妹で口にしていると、遂に我慢できなくなったように顔を赤くしながら、エクスラグナは一言残し――ゆっくりと宙を舞った。単独飛行――レイやリナ、そしてEP達にはできない技である。

彼女は空中で一度こちらに向かって手を振ると、どこへともなく飛び去っていった。

「……アタシはもっと強くなるよ」

エクスラグナが去った空を見つめながら拳を握りしめて、心の底からの気持ちを呟く。

「多分そんなことはないだろうけど、いつかあの人が危機に陥るようなことがあったら、絶対救えるようになってみせる。そうでもしねーとあの人に恩返しをすることなんか絶対にできないからな」

「……そうだね」

この言葉にリナも頷いた。

「よし、じゃあまずはここの後始末だ」

「だね」

できることから地道にやっていく。

いつか必ず彼女に追いつく為に。

心の中に決意の炎を燃やしながら、妹と共に倒れている女性達の介抱を始めた。

152ページにつづく

そうだ…私がやらなくちゃ…

奴の力が崩れかけている今

退魔刀で断ち斬らねば淫魔はすぐに再生するぞ

そのために神人の下へ来たのだ…

退魔の刀を手に、再び立ち上がった紫乃！
ついに決着か…!?

紫乃 ～退魔剣士～ 最終話

漫画 COMIC NO.ゴメス

NO.ゴメス最新刊
グラビティ・ダイ
好評発売中！

ボキッ
ドクン!!

……

……

やったな紫乃(しの)…
これで――

紫乃…？

…わ…私…

結局自分の力で
何も出来なかった
のだ…

そ…それに…
私の身体…たくさんの
人や淫魔に…

うぅッ…

絶対神人にも
嫌われちゃったのだ…

…紫乃…

そ…

そんなわけないだろっ!!

オレは何があってもお前を嫌いになんてならねぇよ!!

…その…

だからさ……

紫乃…

これからもずっとオレの傍にいてくれよ…

そ

それって…

お嫁さんにしてくれるのか!?

嫁ぇえ!!?

だだって昔の約束…

え?

神人が引っ越しちゃう前に…

「わたし大きくなったら神人の……」

「そうだなー 紫乃は弱っちいから俺が守ってやんないとなー」

「うぅ~… 大人になったらぜったいつよくなるのだ」

そういえばそんなこと言ったような言わないような…

ん…

まぁ…

武藤神人

紫乃の…お母さん

よもや娘に手を出して責任をとらんとは云わせぬ…よろしく頼むぞ

わっわかりました…っっ!!

——…まぁ

そういうことでこれからもよろしくな 紫乃

じわ…

づぅ〜〜〜〜〜〜〜ッッ!!

そして——…

淫魔が消滅したと同時に…

悪霊の噂から今回の事件全て学園の生徒達の記憶から消え去っていたという…

わっ

また学園には日常が戻ってきた

でも

紫乃は前とは変わってたことにオレはすぐ気付いた

その日の夜のこと…
神人――
どうした
…んー♥
すり すり
な なんだよ またしたいのか？
…うん…♥
あッ♥
んッ♥
ぬりゅ
ぬりゅ
あ♥
こ…これ お■んことち■ち■ 擦れて
すごく Hなのだ…♥
あッ♥ あん♥
このまま だっこしてほしいのだ…
お前… なんか今日変だぞ？ デレデレというか…
ぬりゅん

そんなこと…ない…の
んッ…♥
ちゅッ
ちゅッ
ん～♥
んぐッ!?
ちゅうう…
あ♥
あん♥
もっといーっぱい精子(せーし)ほしいのッ
ったく…っこないだまでHも知らなかったくせに
はっ♥
は♥
ぎゅッ
ぬちゅッ
えへへ…それじゃあ紫乃がち[redacted]ち[redacted]もっと元気にしてあげるのだ
えっ？
おいおいさっきも風呂入る前に二回もやっただろ…
まだ足りないのかよ？
うんッ♥足りないのだ
ぬちゅん
ぬちゅッ
にちゅッ
ぬちゅッ
んぐッ…

みてみてー♥
ほらっ
ヤベぇ…気持ちいいッ
!? お前いつのまに
あ♥ あん♥
そんな…んッことをッ…
こうやって…ち[illegible]ちいじるの「尻こき」っていうの試してあげるのだ♥
く…ッ
うぅ…紫乃ッ
うッ…！
で…出そう…
あッ
勝手に精子(せーし)出しちゃダメなのッ！
今度はこっちに…いっぱい
精子(せーし)ちょうだい♥
えッ

小説／高岡智空
NOVEL
挿絵／白家ミカ
ILLUSTRATION
魔法少女蹂躙！
触手が初な身体を這いまわる！
魔法少女
ブレイズルナ

長い――長い戦いでした。
わたくしとエミリさん……あ、失礼しました。わたくし、星見彩香と大親友の月上エミリさんが魔法の力を受け取り、悪しき魔法使いの手から鏡の世界を救ったのは、つい先日のことです。それは一年にも及ぶ、何度も挫け、諦めそうになる危機を二人で乗り越えた、厳しくも誇らしい日々でした。
わたくしたちの世界と非常によく似た、けれど科学ではなく魔法文明の発達した鏡の世界を支配するため、悪しき魔法使いは魔法に対抗できないこちらの世界に目をつけたのです。彼らの手によってこちらの世界を奪われれば、それは鏡の世界にも影響する――と。そう説明を受けたわたくしたちは、二つの世界のために戦いました。
凶暴な魔法生物、鏡に映しだされて心の変貌した近しい人たちの影、魔力によって世界を歪められた迷宮の罠、そして諸悪の根源である魔法使い『ソウルシャドウ』――。
辛いこともありましたが、わたくしが転校してきた初日から仲良くしてくださったエミリさんが一緒なら、なにも怖くはありませんでした。
そうして共に戦う中で互いのことを深く知り、絆を硬くしてゆくうちに、わたくしは強く、彼女に心惹かれることとなったのです。彼女の温かな笑顔と心に応えたい――その一心で懸命に戦い、ついには二人の力で、ソウルシャドウを打ち滅ぼしました。

それが一ヶ月ほど前のこと――ようやくわたくしたちに、いつもの懐かしい日常が戻ってきたのです。

◇

「だぁーっ！　遅刻ちこくーっ！」
短い金髪を振り乱し、額に汗を浮かべ、月上エミリは通学路を駆け抜ける。昨夜は夜更かししすぎたとか、今朝は目覚ましが鳴らなかったとか。そんな自業自得の嘆きに、中性的で端正な顔が様々な表情を描く。勝気な、けれど見る者を惹きつける鋭い瞳は焦りでグルグルと回っており、凛々しく引き締まった唇は大口を開けて、ゼイゼイと荒い息を吐いていた。
遅刻やエスケープの多いエミリは、学校ではいわゆる不良のレッテルを張られているが、多数の友人からはそう思われていない。問題があれば腕ずくで解決してくれる、頼りがいある少女として大いに慕われていた。その人気は端正な顔立ちによる部分もあるのだが、彼女がマンガのように表情を崩す姿など、誰も見たこともない。
ただ一人の親友を除いては――。
「エミリっ、さんっ……ですからっ、もう少し、早くっ、寝ましょうって……はぁっ、はぁ……」
隣を走るのは、長くボリュームある黒髪を大きな三つ編みに束ねた少女――星見彩香。エミリより少し上背のある彼女は、エミリより遥かに大きく重そうな果実を胸元で跳ね躍らせ、苦しげな表情で息を荒くしている。

丸く大きな黒い瞳は、少し眠そうな半開きで可愛らしい。艶めかしく吐息をもらす唇はポッテリと肉厚で、淡く輝くリップを引いていた。
昨年の春に転校してきたばかりの少女ながら、学校一とも言われるほど男子から人気があるのも納得の美少女ぶり、そして肉感的スタイルである。
それでいて彼氏がいないのは、国内で知らない者はいないというくらい、幅広い分野で業績を伸ばす星見コンツェルンのご令嬢という、やんごとない身分のためか。とはいえ、今年から受験生という彼女も、異性との付き合いなど考えてはいないそうだが。
「そんなこと、言ってさっ……彩香も寝坊したじゃん！　昨夜のネット通話してたの、お互い様だもんね！　ははっ、あははっ！」
「わらっ、てるっ……場合、ですかぁ……んもうっ……ふぅっ……」
そんな風に親友と軽口を叩き合いながら、エミリは自分よりも走るのが遅い彼女に合わせ、速度を緩める。
こんなことを言うが、彼女には心から感謝しているのだ。最近の遅くまでの通話で、勉強の苦手な自分に基礎から叩きこんで、進学できる学力まで引き上げようとしてくれていること。
寝坊した自分にモーニングコールをくれて、二度寝まで予測し、彼女の家からは遠回りになるのもいとわず、迎えに来てくれたこと。
そして彩香自身も少し寝坊してしまったのに先に行ったりせず、いつもの待ち合わせ場所である大通りにお抱え運転手の乗るリムジンを待機させ、走るのはそこまでで済むように、しっかり手配してくれていることも。
（うぅ……ほんと、いつまで経っても彩香には、迷惑かけっぱなしだよ）
「そんなことっ、ありませんよっ……はぁっ、わたくしの、ほうこそ……エミリさんには、言葉で尽くせないくらい、感謝しているんですから……」
「っっ⁉　ナ、ナチュラルに心読まないでよ！」
「ふふふ、だってエミリさん、わかりやすいんですもの」
確かに、彼女は転校してきて以来ずっと、クラスの女子――どころか学校中の女生徒と折り合いが悪いようだった。そんな中で自分とだけは仲が良かったから、エミリは防波堤のようになってきた。もし自分がいなければ、彼女は孤立していたかもしれない。
（でもね、時々思うんだ……私がいなければ、彩香にはもっと多くの友達ができていたんじゃないかって）
「無理ですよ。だってほかの方たちは、エミリさんのように快活で、気持ちのいい性格ではありませんから」
「だから心読まないでってば！　ん……それにさ、話してみればわかるよ。みんなだって、彩香が思ってる以上にいいコたちなんだからさ」
「……はい、そうかもしれませんね。ごめんなさい」

でも――と彩香は続ける。
「わたくしが掛け値なしに大切だと思えるのは、エミリさんだけ……」
声が少し潜められたのを感じ、隣の少女に視線を向ける。すると彼女はなにかを思い返すような、柔らかい眼差しでこちらを見つめ返した。
「共に戦い、支え合った――ブレイズルナだけですよ？」
「っ……私だって、そう思ってるさ――フリーズスター！」
ひと月前に終焉した、長い戦いの日々に想いを馳せ、懐かしそうに瞳を細めて互いの名を呼び合う。
ブレイズルナとフリーズスター。
それは鏡の世界で永久に語り継がれるであろう、二つの世界を救った英雄である、魔法少女たちの名前だった。

◇

いつもの大通りまで行けば、あとは快適な車であっという間だった。
「ふわーっ、だけど休む間もなく授業ってのは辛いなぁ……」
「お疲れ、エミリちゃん！」
「ほーんと、ギリギリだったね」
一時間目の授業を終えた休み時間、そんな風に声をかけてくれる級友たち。だがその視線はすぐ、離れた席の彩香に冷たく向けられる。
「でもさぁ？　星見さんのせいで、余計なイヤミ言われちゃったよね」
「あのリムジン、目立つもんねぇ。先生もどこから見てたんだか『星見はお前と違って優秀なんだから、迷惑かけるなよ』だなんて」
「……寝坊したのは私のミス。彩香がいなかったら遅刻だったんだ、あのコはなにも悪くないよ。私のせいでそんな風に言われるのは不本意だな」
彩香が絡むと彼女たちはたまに、無神経な発言をする。ムッとしてエミリが反論すると謝罪はされたが、それは彩香ではなく自分に対してのみ。
（ごめんね、彩香……）
チラリと視線を向けると、ドキリとする。彼女もこちらを見ていて、気にしないでというように微笑んでいた。こうして見ると、彼女はやはり美少女なんだと改めて思う。清純な見た目だし、ガサツな自分とは違う、理想的な女の子の姿だと感じていた。
そんな彼女だから、エミリは彩香を転校初日から気にかけ、守っていたのかもしれない。最初は断ろうとした魔法少女になったのも、彼女がやると決め、あの子らしい控えめな口調で頼まれたからだ。心優しい彼女を守りたいと思い、同じ道を歩むことにした。
（……私、もしかしたら彩香のことが好きなのかも……って、なに考えてんのよっ!?）
とんでもない発想に赤面していると、友達が心配して熱を測ろうとしてきた。大丈夫だからとそれをかわし、頭を冷やすため廊下へ逃げだす。
「ふぅ……どうしよ、この顔……」
触らなくても熱いのがわかる、きっと耳まで赤くなっているのだろう。
（彩香か……好きなんだけど、なんだろ……憧れっていうのかな……）
魔法少女になってわかったことだが、彼女はただ守られるだけの存在ではなく、気丈で芯のある、心の強い女の子だった。自分が諦めかけたときでも彼女は挫けず、何度も立ち向かう勇気を与えてくれたのだ。
そうした面を知るうちに、彩香への憧れはどんどんと募り、彼女のようになりたいと強く願うようになった。だからこそ、彼女が悪く言われるのは、自分が貶されるより我慢ならない。
（そうだよ、私があの子を守るんだっ……誰からも、絶対にね！）
彼女の笑顔を脳裏に思い浮かべ、思わず頬が緩む。と、そのとき――。
「考え事はお済みですか、エミリさん？　そろそろ授業が始まりますよ」
「うわぁおっっ!?　あ、彩香っ……脅かさないでよっ！」
肩を叩かれ振り返ると、いつの間に追ってきたのか、穏やかな笑顔を向ける彩香がそこにいた。憧れの少女の不意打ちに、またも頬が熱く火照る。
「どうかされました？」
「う、ううん！　別になにもっ……それより、さっきはごめん！　私のせいで、あんなこと……」
訝しむ親友を誤魔化しながら頭を下げると、彼女は小首を傾げつつも、ニコリと微笑んだ。
「エミリさんは庇ってくださったじゃないですか。だから、平気ですよ」
これだから、彩香には敵わない。
そのやり取りで話は済んだとばかりに、彩香は教室へ戻ろうとする。それを追って、エミリも教室に戻ろうとした――その矢先だった。
「彩香っ、この感じ……っ！」
不意に重苦しく変わった学園の空気となにかの気配を感じ、二人は同時に表情を変える。
「はい、間違いありません……ミラージュの気配です！」

◇

ミラージュとは、ソウルシャドウの魔力によって生みだされた生物や異形の総称だった。それがこちらの世界に存在すると鏡の世界が歪み、両方に影響を及ぼす、悪しき幻影である。
「どういうことさっ……確かにソウルシャドウはっ……」
「ええ、わたくしたちの魔法で討ち滅ぼしましたっ……おそらく、彼が死に際に残した残党が、その遺志に突き動かされて暴れているのかと……」
気配を感じるのは屋上、そこから学校中に、なにがしかの魔法で影響を与えているはずだ。現に、廊下を駆けて屋上に向かっているいま、校舎内は静まり返っている。教室にはまだ、多くの生徒や教師がいるはずなのに。
「ともかく急ごう、スター！」
声をかけたエミリは、すでに制服姿ではない。フリルのついたミニスカートに、肩や臍を露出させたレオタードのような大胆な胴衣と、外套に似たジ

著者近況　久しぶりにノベルズ的小説を書けまして、非常に楽しかったです。ひゃっほい。モバイルのほうにもノベルズ系で書かせていただきましたが、本誌読み切りはまた雰囲気が違っていいですね。

ャケット、そして腕を包むロンググローブ。肘などの要所を魔法金属で覆ったその衣装は、魔法少女ブレイズルナの戦闘装束だった。背こそ低いが引き締まった表情には凛々しさが浮かび、ゲームの女騎士のような出で立ちで、背には一振りの大剣を背負っている。

ピッタリと張りついた胴衣の胸元にはまるでボリュームを感じないが、ミニスカートから伸びる白い足は、ニーソックスとの間に魅惑的な絶対領域を生んでいる。ほどよい筋肉と思春期特有のムッチリとした柔肉がついた太ももは、女性らしい魅力をこれでもかというほど振り撒いていた。

「もちろんです、ルナ！」

答える少女、星見彩香も制服から衣装チェンジしている。こちらはゴスロリ衣装を魔女のようにアレンジさせた、少女らしさと妖艶さがマッチする服だった。スカートのデザインこそルナのものと同じだが、彼女の白基調にたいしてこちらは黒。袖や肩の膨らみはメイド服のようで可愛らしく、スカートの下で太ももを包む網タイツはなんとも妖艶だった。

「魔法の力、残っててよかったね」

「ええ、まったくです」

ソウルシャドウを倒したのは、魔法の力を得て一年くらいのこと。そのときには二人の身体に魔法が馴染んでいて、取り除けなくなっていたのである。とはいえ、行使するには変身の必要があるため、それはもしものことがあったときだけ、と決めていたのだ。

「まさか、ほんとに変身することがあるとは思ってなかったけど……よし、到着っと！　うりゃあっっ！」

「ちょっと待ってください、エミリさ――あぁっ、もう！」

屋上への扉に着くや否や、エミリはそれを思いきり蹴り開ける。

「グルゥッッ⁉　キシャァァッ！」

その豪快な音に反応し、そこにいた生物が叫びを放つ。威嚇するような大口には牙が生え揃い、ダラダラと唾液が滴って、瞳は狂気の赤色に染まっていた。毛皮に覆われた身体と大きな長耳はウサギのようだが、こちらに生息するウサギの何倍も大きく、何十倍も凶暴になった魔法生物だ。

「いたねっ！　覚悟しなよ、ミラージュ！　このブレイズルナと――」

「フリーズスターが、ソウルシャドウの野望を打ち砕きます！」

お決まりとなっていたセリフとともに、剣と杖を構えてポーズを決める。

「……ま、ソウルシャドウはもういないんだけどね」

「――だとしても、彼の野望の残りには違いありませんから……っっ！　ルナ、来たようです！」

背中を預け合うように立ち、大剣の刃先を下に向けて刀身に手を添えたルナは軽く膝を落とし、地を跳ねたウサギを油断なく観察する。

大きな身体をゴム毬のように丸め、二人の周囲に円を描いて跳ねながら、軌道を変えて距離を詰めてくる。しかしエミリは焦らない。こいつの速さはかなりのものだが、最後には自分たちに接近するしか攻撃手段はない。

背中合わせで互いの死角をカバーし――やがてそのときが来た。

「グルァァァァッッッ！」

身の毛のよだつ咆哮とともに、ウサギが側面から飛びかかってくる。向き直り、その牙を真正面から剣で受けると、巨大な落石を止めたような衝撃が腕を痺れさせた。足を踏ん張り、その場から退かぬようにバランスを保ちながら、エミリは思いきって剣を振り抜き、ウサギを地に叩きつける。

「っっ……だぁぁぁ――っっ‼」

大根切りのバッティングのように、ボール代わりとなったミラージュは大きくバウンドし、地面を転がってゆく。それが立つよりも早く、魔法少女は剣の柄に手を這わせ、唇を緩めた。

「いよしっ！　いくよっ、ソウルシャドウもぶった斬った、最終奥義！」

「ルナ、あまり無茶はしないほうが……相手の力も未知数なのに」

「大丈夫だって。あのウサギ、大した力はないみたいだからさ！」

彩香の不安を払拭するために笑いかけ、エミリは剣の柄に取りつけられた宝玉を光らせる。それは彼女の魔力が注がれ、剣に魔法が宿った証。

「喰らいなよっっ……ルナティック、バーンブレイドォォォ――ッッ！」

螺旋の炎がとぐろを巻く龍のように柄から噴き上がり、刀身に絡みついて燃え盛る。その巨大な炎が竜巻となって標的を狙うと同時、彼女が両腕に力を込めて空間を薙ぐと、剣撃が鋭い衝撃波となって敵に飛びかかった。

「アグッ……グォォォ――ンッ！」

唸りを上げた獣は地を蹴るが、広がった炎に退路は塞がれている。硬直したその胴を目がけ、斬撃は飛び――。

ザシュゥゥッッ……ゴォォォッ！

鋭い斬れ味に真っ二つにされたウサギは、業火の奥で瞬く間に影を小さくさせていった。それは燃えているのではなく、ミラージュを形成する魔力が吸いだされているからだ。酸素ではなく魔力を燃料とする、ブレイズルナの炎の魔法によって。

「ふふんっ、大楽勝！　また、つまらないものを斬っちゃったかな？」

「毎回言ってましたね、そのセリフ……本当に好きなんですから」

呆れたような、それでいて微笑ましそうな笑みを見せられ、エミリは照れながら頭をかく。だが次の瞬間、柔らかだった彩香の表情が急に強張り、悲壮な声で叫び上げた。

「っっ⁉　危ないっ、ルナ――」

そして叫ぶとほぼ同時に、彼女の細い腕が自分の胸を突き飛ばす。その場から遠ざかるエミリの耳に、ヒュッッと風を薙ぐような音が響き――。

「っっ……きゃぁぁぁっ！」

その直後、彩香の甲高い悲鳴が聞こえ、エミリは目を見開いた。

著者近刊　『神聖騎士オリアナ　淫魔の牢獄』『晒された痴漢捜査　牝偵Ｗ調教』『騎士隷奴エレノア　国従娼婦の悦印』『ツンな風紀委員長がデレるエロ指導！』『完璧クールな生徒会長はデレるとエロい俺の姉』『女幹部メル様のセカイ征服計画！』　好評発売中！

「えっ……ス、スタ――ッッ！」
なんとか体勢を立て直した炎の魔法少女が立ち上がって目にしたのは、得体の知れないなにかに絡みつかれる、パートナーの苦しげな顔だった。
「スター！　いま行くよっ……」
「だ、め……来ては、いけ……ま、せっ……ル、ナ……っ！」
首と四肢、そして腰に絡みつくのは表面をヌメり光らせた、気味の悪いミミズのような生き物だった。ツタ植物にも見えるが、それが生き物だとわかる理由はただ一つ。
「なんだよっ、これっ……」
自分の一撃で消滅したと思ったウサギの残骸から、それが生え伸びていたからだ。いままで見たことのない異形はウサギの内部を食い溶かし、魔力を吸い上げたらしく、残骸は見る間に干からびてゆく。それを見てエミリは、敵の性質を把握することができた。
（そういうっ……あいつは、生物に寄生するっていうのか！　ウサギが凶暴だったのは、やつに魔力を吸われて飢えていたからで……っっ！　だとしたら、このままじゃスターが！）
サァッと顔から血の気が引く。だが彩香はまだ絡みつかれただけで、ウサギのように寄生されているようには見えない。エミリは奥歯を噛み締めて剣を構え直し、強化された脚力で一気に触手に斬りかかる。
「うあぁぁぁ――っっ！　スターから……離れろぉぉっっ！」
先の大技で膨大な魔力を消費したが、剣に炎を乗せるくらいは造作もない。熱く灼けた刃が食い込み、ジュゥゥッと肉を焦がす音と臭いが漂って、触手が苦しげに蠢く。だが――。
「い……けませ、ん……ルナッ……」
――相手は蠢くだけだった。
「えっ？　なっっ……うわぁっ！」
断たれることなく、触手は彩香の四肢を完全に拘束し、粘液で肌をヌルつかせてゆく。さらに、新たな触手を伸ばして地を這うように走らせ、エミリの足首を高々と掴み上げた。
「あくっ、こっ……のぉぉっ……」
腰と両脚、そして片腕を触手に捕らえられ、自由が利くのは剣を握る右腕だけだった。逆さまに吊られ、フワリと靡いてめくれるスカートの下から、スラリと伸びる美脚が晒される。だが恥ずかしがる余裕もなく、エミリは懸命に、彩香に向けて手を伸ばした。
「スターッ、しっかりっ……」
「ル……ルナァッ！　くぁっ、あっ……うぅ、ぐっ……ひっっ⁉」
眼下で彩香が悲鳴を上げた。ウサギを食い尽くした触手の母体――大きな瞳のような球体が、その身に纏っていた粘液を大量に滴らせ、口を開くように裂けて、奥の空洞を露わにする。
「スター！　くっ……このぉっ！」
必死に拘束を断とうとするが、炎の魔力を込めた刃がまるで通らない。
「なんでっ、なんでだよっっ……うぐっ、あっ……あぁっ……」
その抵抗をも阻止しようと、触手は四肢を搦め捕り締め上げる。逆さまで大の字にされたエミリの目の前、彩香が触手の空洞に引き込まれ――。
「ひっ、や……いやっ、いやぁぁっっ！　ルナッ、たす、けっ……」
目を見開き、恐怖に唇を震わせて彩香が叫んだ。だが拘束された腕はこちらに伸ばすこともままならず、彼女は身を捩って涙をこぼし、エミリに訴えかけてくる。その想いに応えたい、報いたい、救いだしたい――なのに。
「スタァァ――ッッッ！」
絶叫も虚しく、彼女は飲み込まれ、その口がぴったりと閉ざされた。その直前、気丈な少女が覗かせた恐怖と悲しみの表情に胸が穿たれ、狂おしいほどの痛みとショックが込み上げる。
「い……やだっ、やめてよ、ねぇっ……放せっ、放せ放せっっ！」
敵のボスを討ち取っていたことで油断し、目の前の相手を侮った――それで自分が危機に陥るならまだいい。だがそんな自分を庇って彼女が襲われ、捕らえられ、命が危険に晒される。そんなこと、許せるわけがない。
「放せよぉぉっっ！　スターをっ……彩香を放せぇぇっっ！」
斬れないなら引き千切ってやるとばかりに、両腕を寄せて触手を思いきり引き絞る。だがゴムのように柔軟に伸びたそれは、千切れるどころかきつく肌に食い込むだけだった。さらに枝分かれして伸びた細い触手が、耳元にベットリと触れてくる。と――。
『ふふ……抵抗をするな、小娘……』
「えっ……っっ⁉　いまの声っ、まさかコイツっっ……」
戦慄するエミリの耳――いや、頭の奥に再び、低い声音が響いた。
『いかにも、貴様の相棒を捕らえた、この俺の声だ……』
「なんのつもりだよっ！　いいから……早くスターを放せ！」
機械のような無機質な声は、魔力での念波のためだろう。この一年間触れ続けた魔法という概念は、ほとんどなんでもありだった。話すからといって、いまさら驚くことでもない。
それよりも、あのウサギみたいに溶かされないよう、早くパートナーを解放させなければと、エミリはひたすらに叫ぶ。すると耳元に密着する触手から、染み出るように声が届いた。
『威勢のいい小娘だ。だがこの女は放さんぞ、俺のエサとなるよい魔力を持っているからな。ただ……』
嗤うように蠢く触手が、気味の悪い感触を手首と足首に伝えてくる。
『どうしてもと言うなら、対価を寄こせ。見たところ貴様、この女に匹敵……いや、遥かに凌駕する魔力を秘めているようだ。その底なしの魔力を喰わせるなら、こいつは返すぞ？』
「なに、を……っ、スター⁉」
触手の口が開き、気を失ったようにぐったりとする彩香の姿が見えた。その身は触手に寄生されておらず、顔色

も悪くはない。だが相手の要求を飲まなければ、すぐにでも――。
『さぁ、どうするかな？』
「っっ……お、お前が彼女を放すのが先だ！　そうすればいくらでも――」
『条件を提示できる立場か』
一本の触手が勢いよく動き、彩香の唇をグニグニと揉みしだくように擦りながら、隙間を開かせようとする。
それを目にした瞬間、背筋が凍るほどの寒気が奔った。脳裏をよぎるのは、干からびたあのウサギの姿。
「待てっっ!!　わかった、わかったからっ……私の魔力なら渡すよ！　だから彼女には、手をださないでっ！」
魔法生物と違い、エミリたちは魔力を吸い尽くされても消滅したりはしない。だが魔力を失えばかなりの消耗を伴うし、五体満足でいられるかはわからなかった。それを思えば、自分を庇った彩香を危険には晒せない。
魔法少女の叫びを受け、触手が満足げに笑いながら蠢いた。
『いいだろう。これより貴様は、俺の宿主だ……だが安心しろ。あの獣は魔力の産物ゆえ飢えることになったが、貴様は死なせん……ゆっくりと魔力を糧にさせてもらう。ついでに種もつけさせてもらうがな』
「た、ね……だって？　んくっ、うぅ……な、なに、を……ひゃうっ!?」
ヌルつく感触が妙な部分に触れ、エミリはたまらず声を上擦らせる。けれど触手は気にもせず、太ももを這い回って脚の付け根に――ピンクのショーツで包まれた秘部に向かい、先端部でそこをグリグリと押し捏ねてきた。
「ふぁうぅんっっ！　んっ、あっ……なにっ、しているのよ！」
普段は使っていない女らしい語尾が急に飛びだし、それさえも恥ずかしくなって顔を赤らめる。そんなエミリの耳に、笑い声が響いてきた。
『女の魔力は粘膜から吸い上げるのが効率的だ。それにここならば、種をつけるのも容易い……さて、そろそろそのうるさい口も閉じておこうか』
「だから、種って……んぐぅぅっ!?」
生臭い臭気がツンと鼻腔を突き抜け、息苦しさを感じてからようやく、エミリは口内の違和感に気づいた。
（えぐっ、うっ……う、そ……なにこれっ、なんでっ……なんでぇぇっ！）
首に絡んでいた触手から分離して伸びた、繊毛のように細い触手がいつの間にか唇にへばりつき、隙間から口内に潜入していたらしい。それを鉤のようにして口を押し開くと同時に、本命であろう太い触手が口腔を抉り、ヌチョヌチョと汚泥のような粘液を塗り広げ、喉にまで先端を達させたのだ。
「おごぉぉっっ！　おぐっ、んぶっ……ぐっ……おぶっ、んぅぅぅ……」
喉奥をコリコリと擦られ、汚辱感と圧迫感でたまらず嘔吐く。それでも視線だけは鋭く尖らせ、触手の本体である瞳を睨み、胸中で叫ぶ。
（なんのつもりだよっ、こんなことをっっ！　んっ、んんぅぅぅっ!?）
おぞましさに背筋が震え、口を犯す異物を懸命に吐きだそうとした瞬間、その感覚は訪れた。
――ズチュルゥゥ……グリュッ！
「んふぅぅっ、んがっ、あがぁ……あぐっ、はふっ、んぁぁっ！」
触手から染みだしているのか、元々そこに絡みついていたものなのか、甘ったるい粘液が口内を満たす。刹那、痺れるような刺激が舌を駆け、頭の奥まで一気に貫いてきた。
全身がガクガクと震え、触手が肌に擦れるたび、鋭い痺れが奔る。
（ひょん、らっ……こぇ、は、毒……あぐっ、うっ……かぁら、ひ、ひびれ、へ……んふっ、ふぅぅっ……）
口を閉じるというのは触手を突っ込むだけでなく、身体をマヒさせて自由を奪おうという意図もあったのか。噛み千切ろうと歯を噛み締めていた動きもできなくなり、それを念入りに確かめるように、触手が内頬をつつき、舌や歯茎をベトベトと舐め回してゆく。
「んぐっ、おごぉぉ……おぇっ、あぇぇぇっ……んぶっ、ふぇぇ……」
気色悪い、ブヨブヨのチューブが口を這い回っているのに、粘液のせいで味覚には最高の甘みが伝わってくる。それが相手の罠で、寄生対象に自ら摂取させるための擬態だとわかっていても、本能が安全と認めてしまう感覚を否定できない。
（く、ほぉぉっ……こんら、はむっ、んちゅ……んぐっ、うぅぅっ……）
女の子らしいと唯一自覚できる、甘味が好きな性分はエミリにもある。友人たちと寄り道し、パフェやケーキを食べることなどもしょっちゅうだ。
それらよりも繊細で、けれど中毒性のある甘さが舌と口内、そして脳を徹底的に蕩かし、たまらずエミリは喉を鳴らして粘液を嚥下してしまう。
「んぐっ、んみゅぅぅ……んくっ、こくっ……んっ、んぅぅっ!?」
逆さになった状況で、その行動は愚かだった。重力に逆らった行動に喉の粘膜が反乱し、酸っぱい胃液の味とともに粘液が倍ほどの量になって口端から、そして鼻から噴きこぼれる。
「おごぇぇっっ！　げぇほっ、うぐっ……おほっ、ごほぉっっ！」
『おっと、逆さでは上手く飲めまい……胃まで運んでやるとするか』
（っ……だ、まれっ……この、ヘンタイ触手めっっ……）
胸中で毒づくも、それを聞いているのかいないのかもわからない、触手の笑い声が響くばかりだった。
相変わらず口はぴったりと満たされ、その先端部から新しく触手が伸びる。触手の内側にも大量の粘液が溢れているのか、二回りほど小さな新しい触手もドロドロの粘液に包まれ、それは喉に触れないよう、ゆっくりと身体の内側を這い下りてゆく。
（うっ、あぁぁっ、やっ……やめろっ、入ってくるなっっ！　んぐっ、あっ、

ひゃっ……あぁぁぁっ！）

なにかが食道を侵し、胃の中に粘液を垂れ流すのが、触れられずともわかった。ドプッ、ビュルルッと弾ける熱い蜂蜜のような液体が、体内で膜を張るように広がってゆく。けれどそれはお腹にしつこく溜まることはなく、すぐに粘膜から吸収されているのか、何度も何度も胃袋に注がれているのに、まるで膨満感がなかった。

（くふぅぅっっ……い、やだっ、こんなやつの、汚い汁がっ……）

身体の内側へ、触手の汚液が染み込む感覚に背筋がゾッとする。あまりの汚辱に吐き気が込み上げるも、口を塞がれているせいで唾液がダラダラと流れ、鼻水と混じった汁がみっともなく鼻から噴きだすばかりだった。

『そう邪険にするものではない。すぐに効いてくるはずだ』

（ふぐぐっ……んっ、ば、馬鹿に、してっっ……それに、効いてくるって、なに……っっ⁉）

ジュルリッと音を響かせて、脚に絡みついていた触手が再び秘部に迫ってくる。太ももがくまなく舐め擦られ、口や胃奥にまで染み込んだあのドロドロと同じ感触が広がるのを感じた。

それと同時に――その擦られた部分から奔るこそばゆい感覚に、拘束された腰が反射的に跳ね上がる。

「んぐぅぅ――っっ⁉　ふっ、はっ……あぁっ、んぐっ、あおぉぉ……」

くすぐったさに震えたのだと、最初は思った。けれど何度も擦られるうちに、そうではないことに気がつく。

（ひふっっ！　んっ、くふっ……ふぁっ、うっ……なん、だよっ、この……こいつ、なにをっ……くぅんっ！）

考えている間にもニュルリ、グチュゥ……と、大小多数の触手が蠢いて四肢に絡み、粘液を塗り込めてきた。

両脚とも太ももは隙間なく触手で包まれ、Vラインに触れるくらいの位置に先端部が当たったまま、ひたすらに柔肌を擦られている。両腕も腋から肘までを数本の細い触手に縛られて、舐めるような感触を送られていた。

複数の舌が単独で這っている、おぞましさと粘着感が腕を覆い、そのネットリとした粘つきは指先にまで広がる。口内に溢れるそれの数倍はある、甘い香り漂う粘液が指先から手の平までを瞬く間にコーティングする。指の間を往復する肉枝が、先端部で手の平をチロチロと舐め回してきた。

「んぐっっ、んぅぅっ……んひゅうぅっ！　おむっ、んぉぉぉ……」

細くしなやかな触手がリングのように巻きついて、粘液を潤滑油に指を扱いてくる。ヌルヌルの感触が関節を撫で、水かきを引っ掻くたびにゾクゾクと背中が痺れ、塞がれた唇から甘い吐息がもれてしまった。

（はぐっ、んふぅぅっ……んあっ、なん、れぇ……いひぅっ、はぁっ……声と、息ぃ……んっ、はっ……）

四肢を丁寧に触られ、それだけで何度も身体を跳ね躍らせてしまい、すでに呼吸が乱れ始めている。

（効いてくるって、この状態のことっ……魔力の防御が、薄まって……）

ニーソックスの内側に滑り込んだ触手が平たく伸び、ソックスの代わりに脚を包んでゆく。粘液に脚を漬け込んで、何十人ものマッサージ師の指で弄られているような心地だった。

「ふぅぅぅっ、あふっ、ふぁぁ……はぐぅぅっっ⁉」

（くっ、そぉぉっ……こんなの、でっ……んふっ、ひぅぅぅっ……）

爪先までがすぐに粘液に満たされ、手指と同じように扱かれ、吊り上げられた脚がガクガクとわななく。だがそれだけでなく、足裏やふくらはぎが優しく揉まれると、日頃酷使していた筋肉が解れてゆき、思わず瞳が蕩けるほどの快感を覚えてしまった。

その間も変わらず四肢は撫でられている、その感触までがマッサージの動きと呼応しているかのように背筋を痺れさせ、腰を揺すらずにはいられなくなる。触手に絡みつかれ、捕らえられたパートナーの近くでそんな無様を晒すのは、たまらない恥辱だった。

「はむぐぅぅっ！　んむっ、んもぉぉぉ……おごぉっ、ほふっ、んむちゅっ……んぐっ、ちゅぶぅ……」

最初のうちこそ必死に抵抗していたが、疲労のせいでもはや四肢は弛緩している。あごにも力は入らず、涙と涎と粘液でグチャグチャになった顔は、視線だけを尖らせていた。その頬や鼻をピチャピチャと触手に嬲られ、恥辱に耳まで真っ赤に染まる。

（っっ……だめだっ、落ち着いて……確かに魔力は削られてるけど、ほんの少しだけ……あいつが油断するまで耐えて、彩香を助けさえすれば……きっと打開できるっ……）

そうやってこれまでの戦いを、彼女と二人で乗り越えてきたのだ。鏡の世界を救い、二つの世界の平和を守れたのに、こんなところで正体不明のバケモノに食われるわけにはいかない。

（そうだよっ、彩香のためにも……私は諦めないで、チャンスを待つんだ……んひゅっ！　まひゅ、んぁ……）

そう心で強く叫んだ瞬間、口内を満たす触手の一本が舌に吸いついてきたことに驚いて、瞳を大きく見開く。

おそらく先端部が割れ、口のように開いたのだろうけど、そんなことはどうでもいい。問題は、その触手が舌を噛み千切るのではなく、優しくしゃぶり立ててきたことだ。

「あひゅっ、はぐっ、んぁっ、はっ……はえぇぇ、んぇっ、は、はら、へぇぇ……んぶっ、はぁぁっ！」

唇の裏側を擦りながら長い触手が引き抜かれると、舌が伸ばされ、みっともなく突きだす格好になる。それを手伝うように、唇に張りついた繊毛触手が口を上下に割り開いた。大口を開いて舌を吐く、情けない表情を晒したエミリは、それを触手に吸われる汚辱に

苛まれ、心の奥で絶叫する。
（ふぐぅぅぅぅっっ!! こひょっ、ふらけっ……ふらけるなぁっっ！ くひゅっ、ふっ……くひょっ、おぉ……）
生温かい粘膜に舌が包まれ、先端から奥深くまでがジュルジュルと舐められ、吸われ、指と同じように扱かれる。唾液と混じり合った粘液がこぼれ、鼻から額にかけて濡れ汚していくも、それを拭うことすら許されず、全身を這う触手に肌という肌、顔のすべて、さらには唇の奥から舌全体を、ベチャベチャと舐め回されてゆく。
「んぶぅぅっ！ あふぇっ、ふぇぇ……えぐっ、んぁぁっ、はぉっ……」
（こん、ら……あぐっ、うしょ、れひょ……なんれっ、どうひれぇっ!?）
ズリュリッ、グチュッと舌が扱かれるたびに、脳奥に鋭い痺れが流れてしまう。経験はないが、舌と舌を絡め合うディープキスとかいうやつを、大好きな相手にでもされているような、想像したくもない屈辱的な快感だった。
（おち、ちゅけぇ……あぐっ、んぅぅっ！ 落ち着け、意識するな！）
感じたくない、感じるわけがない。こんなのは気持ちよくない――そう心を奮い立たせて、懸命に身体を突っ張らせて感覚を遮断しようともがいていると、触手が新たな動きを見せた。
「へぇはぁぁ……はひゅっっ!? んひっ、ひあぁぁっ！」
めくり返ったスカートの下で、最後の砦を保護していたショーツ――それも魔力で編まれた丈夫な下着が、なんの前触れもなく溶けるように消え失せた。剥きだしになって、プリンッと瑞々しい肉感を弾ませた尻房が、触手の洗礼を浴びせられ、瞬く間に半透明の粘液に濡れ染まってしまう。
さらに、腰に絡みついていた触手から枝分かれした新たな魔手が、臍をなぞりながら脇腹を擦り、衣装を潜って胸元へと這い伸びてきた。
（んっくぅぅぅっっ!? なっ、んで……こんなっ、パンツがすぐっ……そうか、そういえば……）
触手の主食が魔力だとすれば、魔力で編まれた衣装などすぐに食べられてもおかしくはない。ふとそんなことに意識を向けていると、こっちに集中しろとばかりに触手にお尻を突かれ、乳房の小さな山の麓がニュルリと、搾るように絡みつかれてゆく。
「んぇぇぇっっ、へぁぁっ！ あぐっ、んむぅぅっ……んひゅぅぅっ!?」
玉のような肌が粘液を弾き、伝い流すせいで身体中が濡れ光り、触手が滑らかに這うのを助けてしまう。お腹を撫で、胸元にまでヌルつく感触を広げられると、胃臓から染み込んだ汚液とともに身体を内外から擦られるようで、たまらない不快感が込み上げた。
触手は太ももの付け根からさらに這い上がり、可愛らしく膨らんだ柔肉をフニフニと押し込みながら揉み捏ね、尾てい骨のくぼみを、その硬さを確かめるように叩いてくる。
（うくっっ……うぅぅっ！ なん、なの……なんだよっ、さっきからこんなっ！ 恥ずかしいことばっかり……魔力を吸うなら、さっさとすればいいじゃない！ 衣装だって……それを、わざわざこんなマネしてっ……）
恥ずかしい場所や口に触れられるたび、魔力が削られる感覚を覚えるのは、先ほど言っていた粘膜からなら吸いやすいということなのだろう。けれど時間をかけて吸い、わざわざ辱めようとする相手の意図に怒りを抑えきれず、胸中で言い放つ。すると触手はまたも嗤うようにうねり、返してきた。
『こんな布切れで、糧の足しになるものか。俺が欲しいのは貴様の魔力の根幹……胎内から生みだされる、魔力の源泉だ。この腹の奥にはそれがある……いままでのは、そのための下拵えといったところだ』
それは聞いたこともない事実だった。魔力が身体の奥から溢れてくるという感覚は、確かに何度も経験している。それはなにかを守ろうとして、心が熱くなるからだろうと、彩香と話したときに結論付けていた。だが魔力を探知するこの生物は、その源はお腹にあると――エミリの下腹部を撫でながら言ったのだ。
（――っっ!? ま、さか……下腹部、それにお腹って……）
不意に、恐ろしい想像が頭をかすめた。そんな馬鹿なと、その考えを振り払おうとする、けれど――。
『ふん、察しがいいな、その通りだ。そして種をつけるということは、すなわち――こういうことになるな』
――ニュクッ、チュプゥゥゥ……グチュルッ、チュグゥゥゥ……
「んぃぃぃ――っっっ!? あぃっ、ひっ……ひゃめっ、りょぉぉっ……」
とっさに膝を閉じ、太ももを締めて拒絶しようとするが、拘束する触手群がそれを許してくれない。無防備に開かれた淫裂、その中心に走る細いクレヴァスをこじ開けるように、ヌルついた肉管が無情に押しつけられる。
（ひぐぅぅっ！ いっ、や……やだっ、絶対いやっ！ そんなのっ……）
怖気が奔る、けれど臆さぬように瞳を尖らせて、エミリは自身の下腹部に視線を向ける。だがそこに広がるのは、すぐさま目を覆いたくなるような、はしたない惨状だった。
（〜〜〜〜〜っっ!? う、そ……うそだよっ、こんな、なんでっ……）
想像もしない光景に息が詰まる。
お風呂で洗うときや、用を足した後で拭くときくらいしか見ないその部分は、生えかけの恥毛でかなり薄く覆われた、一筋の線が走ったような肉裂だったはずだ。それがいまははしたなく緩み、食事中の唇のように開いて粘っこい糸を引いて、その奥に鮮やかなピンク色の秘貝を覗かせている。
その部分もまた、これまで見たことないくらい卑猥に、艶めかしくテラテラと濡れ光っていた。白い肌に薄茶色

勇者VS魔王の最終決戦！結果は―
神戦記
リード&ブレイヴ
～決着！大魔王陥落～
漫画COMIC／ぱふぇ
俺は絶対負けない！
これまで犠牲になった仲間のためにも
勝っ！
唸れ聖剣!!
いくぞ！究極奥義
ファイナルソニック
ド―
―ッン!!

オォォ
オォォ
バカめ！その技は見切った
ハハハハハハハハ
死ねィ！勇者ぁ!!
ぐッ
うぅ
フ…フフフ
にゃるる
にゃるる

前魔王の子と侮ったな
おめでとうございます魔王様
ついに宿敵勇者を倒しましたな
ああ だがこの勇者殺すには惜しい逸材
復活の呪文で生き返るしな
我と手を組まぬか？
世界の半分をくれてやるぞ
な…!?
大魔王ヴォハールの力 思い知ったか!!
我も別に人を絶滅させようとは思わぬ
賢く治めてやるだけよ
……
ああ 分かった

なっ!?
ああ ちょっと!
痛っ
何…を
何?
く…っ 何のつもりよ 放しなさい!
魔王にこんなことをしてただですむと思って!?
許さないわよ!!
魔王様ガ世界ヲ支配したラ
半分ハ我ラの物デスヨね?

俺に半分くれたら
どうやって部下に褒美を与える気だ
ツマリお前ハ今ヤ何も支配してイナイ
ただの小娘ってことサ
正気!?
そいつは勇者で私が魔王なのよ!?
見ろよあの胸本当に小娘だな
魔王の娘ってだけで威張りやがってヨォ
や…あぁっ
やっ
ウルせぇンだヨ!
貴様ぁ!勇者のくせに魔族と手を結んだのか!?
黙れ!発展途上胸のクソガキが!!
むぐ

ごぷっ
お前…ら
は…あぁ
ケケケ
落チ着イテ
頂ケマシタナ
今ならまだ
許して…ン
あげるわよ
は…ぁ
謝り…グ
なさ…ぃ
オヤおや
なラ本格的ニ
参リマスか
ん…ふ
ん…っ
ゴクゴク

ひゃ♥
ふ…ぁ
くッ
ぐ…
んン♥
感度ダケハ一人前ダナ
あ…ぁ
はう♥
くう〜〜……ッ
ッ…
平らナ胸ニ乳首ガソソリ立ッテいヤラシい眺めダぞ
くうっ♥
やめっ
はな…せえぇ
さすガハ魔族だ幼くトモ淫乱ヨ
でももう少し揉みごたえが欲しいな
うっうるさい触るな！
ソウイウことナラ

ぐ…
うっ
や…ぁ
あぁぁ
ああぁぁ
ああぁぁ
やめ…て
えええッ
痛ぁぁっ
刺さってる！
胸に何か!!
痛…
痒…い!?
吸…う
なぁぁ
キッ…
やぁぁッ
痛ぁぁい
ムズムズ…
するぅっ
人の…胸で
何してるの
よぉっ!?

ポーン
はう♥
あ…ぁ
ッ!!
ぷるるんっ
な何よ
これぇ!?
ぷるん
うそ…ぉ
私の体が…
こん…
な…ぁ
ひあっ!
あはぁ♥
魔力ヲ搾り
取レルヨウニ
したラ
見事ニ実った
ではなイカ
や…め
揉むっ
なぁぁ
もにゅ
ぁぁ
ぎゅう
サスガハ
魔王様
搾りガイガ
アリマスナ
ぎゅっ
むにむに
にゅ

選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説！
少女勇者ルトラ
恥獄の淫堕調教
粘液まみれの触手に嬲られる
少女勇者を待ち受けるのは……？
小説／NOVEL 大熊狸喜（おおくまたぬき）
挿絵／ILLUSTRATION sian
ご注意
この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1～7の番号がふられているので、シーンの小説本文末尾にある指示に従って、指定された番号のシーンをお読みください。

シーン1

暗雲と雷鳴に護られた暗黒の魔王城を見上げる崖に、二人の少女はいた。
「ようやくたどり着いたな、ルトラ」
「はい、長い道のりでした」
緩やかなカーブの豊かな金髪を風に靡かせる、ルトラと呼ばれた少女。
優しい垂れ目が愛らしい乙女は、起伏に恵まれた白い肢体を、聖なるビキニ鎧に包んでいた。
無垢な童顔を背徳的にすら見せてしまうような、丸くて上を向いた巨乳。
滑らかなカーブのウェストや細い背中、縦長のおへソは露出しており、発達した丸いヒップは小さなボトム鎧だけで護られていた。
巨乳や巨尻は鎧をムッチリと食い込ませていて、若さ溢れる皮下脂肪の柔らかさを見せつけている。
両腕や両脚もアーマーに飾られていて、背中でひらめくマントが捲れるたびに、実った媚尻とパツパツの腿がチラリと覗けた。
頭部には勇者の証である髪飾りが乗せられていて、華奢な首には代々伝わる緑色の宝玉を装着している。
腰に携えた聖剣がキラリと輝く。
大陸最大の王国「聖フレイム王国」を怪異が襲ったのは、二年前。
ある帝国の魔導師が、二百年に封印された魔王を解放してしまったのだ。
蘇った淫らなる魔王は、帝国を滅ぼし、男性たちを餌食にし女性たちを陵辱し、魔力を増大させてゆく。
遂には、かつて自身を封印した勇者の末裔が住む王国を崩壊させるべく、魔の軍勢を進軍させたのだ。
魔王を倒し、平和を取り戻す為に旅立ったのが、勇者の末裔である少女。
名は、ルトラ・クリストファー。
王家に次ぐ資産家で第一貴族の家系に生まれた、現在唯一の少女だ。
王室が女児に恵まれなかったこともあり、優しい言葉と慈しみ深い行いは、国中の人々から姫と愛されている。
「皆さん…あと少しの辛抱です！」
決意する少女勇者を傍らで優しく見つめる騎士、アイリル・アリオネア。
濃紺色の髪は短くサッパリとしていて、ルトラよりも頭一つ分ほど長身。
鋭く美しい切れ長の眼差しは、数多いる王国騎士の中でも大陸一と謳われた実力を、視線だけで確信させる。
勇者の聖なる鎧に比して、二つ年上の麗騎士は軽装だった。
両の腕や脚は鎧で飾られているものの、黒系のマントを纏ったボディ部分は、極薄いハイレグレオタードのみ。
ルトラ以上の爆乳は、薄い生地を破らんばかりに詰め込まれている。
蜂のように括れたウェストと、左右と後ろに大きく発達した巨尻は、肌に隙間なく薄生地を張りつけていた。
少しだけ日焼けした艶やかな肌がハイレグを食い込ませていて、まるでボディペイントのように挑発的。
左右の腰に携える二振り剣が、魅惑的な女腰を扇情的に引き立てていた。
「魔王を討ち、平和を取り戻そう！」
幼い頃から王室で可愛がられていたルトラと、子供の頃から才能を見いだされて王宮騎士団で剣の指導を受けていたアイリル。
本当の姉妹のように仲がいい二人だから、ルトラが魔王討伐を命じられた時、アイリルは自らお供を申し出た。
「はい、アイリル。皆さんの為に！」
勇者少女の艶やかな唇から、堅い決意が表される。二人は魔王の待つ暗黒の城へと向かった。

翼が生えた上位魔物や、数種の生物が混ざり合ったような下位の魔物群。
押し寄せる怪異たちを切り伏せ魔法攻撃で撃退しながら、二人は遂に漆黒の王室へとたどり着く。
美剣士たちが並び立つ先には、闇の玉座へと座した、暗黒の淫魔王。
「現れおったか。勇者の子孫よ」
輝く剣を差し向ける勇者少女と麗騎士の登場に、魔王はニヤリと笑う。
強い魔力を帯びる視線は、並の騎士ならば一睨みされただけで、心底から恐怖に搦め捕られてしまうだろう。
しかし少女たちは、強い意志と討伐の決意を以て、対峙していた。
勇者少女が美しい金髪を靡かせながら、凛々しく告げる。
「覚悟をなさい、ギルバオウっ！」
供を務める女性騎士が、裂帛の気合で闘志を見せる。
「今こそっ、貴様が滅びの時ぞっ！」
勇者たちの挑戦に、玉座より立つギルバオウ。立ち上がった魔王は、三メートルに届く巨人だった。
闇の如く黒い巨体は、盛り上がる筋肉で力と邪な魔力を周囲に発散。
全身鎧は重盾のように分厚く、闇に包まれた顔からは、邪眼の輝きと裂けた牙の口しか見えない。
背には血の色の大きなマントが重くはためき、頭部から伸びる曲がった角は、少女たちの身長ほどもあった。
自身の体躯にも均しい巨大なバトルアックスを軽々と手にして、魔王はズシンっと地響きを立てて迫ってくる。
「処女の匂いがするわ…打ちのめし犯し、我の牝肉へと躾けてやろうぞ！」
「討ってみせますっ、イヤアァっ！」
勇者の血を引く少女剣士が、大陸一の麗騎士が、暗黒の魔王と激突した。

勇者と魔王の戦いは、極限の鍔迫り合いの如し。
「暗黒魔法デス・ド――――ンッ！」
居城の床を破壊しながら、少女二人を呑み込むほどの眩い雷撃魔法を放つ。
対して勇者は、素早く防御魔法。
「我らを護れっ！　光の聖盾、ホーリー・サンシャインっ！」
暖かな光の盾で自身たちを護ると、麗騎士が二刀で魔王に斬撃を加えた。
剣より魔法に秀でるルトラと、魔法は使えなくとも剣術で勝るアイリル。
二振りの剣を避けきれなかった巨人

の腕に、勇者少女の一撃が決まる。
――っザシュウっ！
「ッングムゥンッ、小娘どもがっ！」
二人の姉妹美剣士による完璧なコンビネーションに、暗黒魔王が確実に押されてゆく。
とはいえ少女たちも無傷ではない。
魔王の戦斧は、見た目からは想像できないほどの素早さで振り下ろされる。
必死に直撃を避けても、無数に砕かれた床の大きな破片が二人に激突。
さらに、強大な魔法攻撃を防ぐルトラも、魔力を大量に消耗させられる。
「な、なんという強大な悪の力…！」
「しかしルトラっ、私たちは、屈するわけにはゆかないっ！」
勇者の魔力と体力、麗騎士の体力が、限界へと追い詰められてゆく。
対する魔王も魔力と体力を消耗し、肉体の負傷は限界へと迫りつつある。
魔法も、お互いにあと一度、使えるかどうかだ。
「我がここまで苦戦か…グッククク」
全身から赤黒い血を流す巨人。
自身を他者のように笑った魔王は、新たな一手を打ってきた。
「ッ――ッグオオォォォオオオッ！」
ギルバオウの身体から、強い邪悪なオーラが吹き出す。
思わず防御で構える二人の美剣士。
「見せてやろうっ、我の真なる姿！」
暗黒巨人の胸鎧が、腹部の鎧が、腿の鎧が、バ――ンッと弾け飛ぶ。
露わになった黒い筋肉からは、淫媚な肉色で蠢く無数の触手が出現した。
「なっ――!?」
その姿に、穢れを知らない勇者と麗騎士は本能的な嫌悪と恐怖を覚える。
太いヘビのような触手は、滴る粘液を纏って力強く蠢いていた。
――ブちュる、ぬリゅルぷリゅる！
先の部分は、乙女たちが見たことすらない男性器の形を見せていて、先端はクチクチと淫らに開閉している。
四方に伸びる触手群は、筋肉の逞しさと淫猥な柔らかさでうねっていた。
肉色の表皮には、無数の血管がドクドクと脈打つ。
数メートルと距離を開けている処女の二人でも、本能的に解ってしまうほど、男性液の強い匂いを発している。
「んぅっ……！」
「大丈夫か、ルトラ…くっ！」
初めて嗅がされた精臭に、二人は思わず美眉を歪めた。
そんな初々しい乙女たちを、淫らなる魔王が邪に喜ぶ。
「処女には恐ろしいか、グァッハッハッハアアアァァァッ！」
罵り笑いながら、魔王はアイリルに向かって必勝の攻撃魔法を放った。
「絶対破壊、カオス・ドゥ――ム！」
突き出された両腕から、光る闇が爆炎のように放たれる。
肉弾戦を続けて体力を消耗している麗騎士に、魔法攻撃をかわせるだけの瞬発力は、もうない。
身動きできない姉騎士を護る為、ルトラは最大の防御魔法を放った。
「邪より護らんっ。女神の慈愛っ、ゴッドネス・ヴェ――――ルっ！」
勇者少女から発せられた光の波動がアイリルを包み、魔王の攻撃を遮断。
この瞬間、巨人も少女勇者も、すべての魔力を使い果たした。
そしてアイリルが、トドメを狙う。
「ギルバオウっ、覚悟っ！」
剣を構えた刹那、触手群が一斉に、ルトラだけに向かって放たれた。
「もはや魔法は使えまいぃっ！」
「あぁっ――っ！」
迫り来る無数の淫ら触手に、乙女の少女が思わず気圧される。
「ルトラぁっ――っ！」
遅れた妹を護ろうと駆けた麗騎士。
この瞬間こそ、魔王の狙いだった。
隙が生まれたアイリルの足が、這いずる触手に搦め捕られる。
「っ――くあっ！」
吸盤触手の奇襲で転倒させられ、さらに両腕や首を触手捲きにされて吊るし上げられてゆく、麗しの騎士。
抵抗しながらも混乱するアイリルは、さらに掌を触手のムチで叩かれ、二振りの剣を叩き落とされてしまった。
武器のすべてを奪われるとまるで十字架に張りつけられるように、タコ足触手で拘束されてしまう。
「アっ、アイリルぅぅっ！」
姉を人質にされた勇者少女は、暗黒魔王を強く見据えながらも、手を出すことができなかった。
吊るした女体に触手を這わせ、魔王はルトラを笑って見下ろす。
「勇者よ、魔力を使い果たした今こそが、我を討つ唯一絶対の瞬間ぞ」
「うぅ……ひ、卑怯な…っ！」
剣を構えながらも、姉騎士を盾にされる少女は、魔王に打ち込めない。
人質にされた王宮騎士も、頭部まで触手捲きにされて動けない十字架拘束のまま、背後の巨人を睨み付ける。
「おのれギルバオっ――ぅあぁっ！」
女騎士が、触手に嬲られ始めた。
極薄い生地に包まれた爆乳を揉み上げられて、張りのある巨尻やムチムチの内腿が濡れ弄ばれてゆく。
「ぁくっ――っけ、汚らわ、しぃ…！」
触手から滴る粘液が生地に染みこみ、密着する肌色を透けさせる。
敵に弄ばれる悔しさと、肢体を舐られる強烈な恥ずかしさとで、アイリルの凛々しい美顔が染まってゆく。
「アイリルをっ、ぉお放しなさい！」
語気を強める勇者だけど、その声が小さく震えている。初めて目にする女体の恥辱姿に、無垢な少女は知らない羞恥と恐怖を感じていた。
そんな乙女たちを、邪王は一蹴。
「グっククク…所詮は処女。これしきの嬲りに、二人揃って震えておるわ」
吸盤触手で吸い付かれたアイリルの衣装が、ビリリっと大胆に破られた。
「あぁっ――っ！」
右胸部の生地が奪われると、頭よりも大きな丸い爆乳が露わにされる。

「騎士のクセに、イヤらしい乳房よ」
細いタコ足触手によって、白くて滑らかなタップリの片乳が、根元から三重もの触手捲きで持ち上げられる。
先端の桃色媚突も紐のように細い触手で捲き絞られて、乳輪も乳首先端も極小吸盤で強く吸われた。
――ぬりゅルったプっ、チゅるぷ！
「んぁふっ――っこ、この…っ！」
溢れ出された大きな乳房は、触手の粘液で艶濡れて、柔らかい揉み変形をイヤらしく見せ付けさせられる。
催淫粘液を塗り込められる処女騎士の肌は、触手の愛撫で強く確実な官能へと、目覚めさせられてゆくようだ。
「は、放せっ――不埒っ、な…っ！」
吐息が乱れて言葉が震え、まぶたが重そうに蕩けてゆく。頬が羞恥で上気し、肌は霧の性汗で覆われていった。
辱められる姉騎士の姿を見上げながらも、性に無垢な勇者少女の手は、剣を構えたまま震えてしまう。
「ア、アイリル…っ！」
人質女体を弄ぶ魔王が、身動きできない処女勇者に対し、降伏を迫る。
「勇者ルトラよ、貴様の負けだ。我に従い、服従の奉仕を命ずる！」
「服従の、奉仕…!?」
自慰すら知らないルトラにだって、性的奉仕だと想像がつく。
（こ、こんな触手でも…見ただけで背筋がゾっとしますのに…！）
「だ、誰が、あなたなどに…っ！」
凛々しく拒絶したつもりだけど、魔王から見れば「処女が精いっぱい強がっている」愛らしい抵抗でしかない。
「そうか……では我に勝ち目なし。せいぜいこの女を道連れに、勇者殿に討ち果たされるとしようぞ」
触手の魔王は騎士の片乳を嬲りながら、細い首を触手で絞め上げた。
「ぅぐぐ……っ！」
触手十字架に張りつけられたアイリルの美顔が、見る見るうちに紅潮してゆく。
魔王は、剣で討たれると同時に騎士を絞め殺すつもりのようだ。
姉のような麗騎士の、命の危機。
直視できない状況に、魔力の尽きたルトラの剣が震え、そして。
「まっ――待って…ください…！」
少女は魔王に対し、思わず懇願の意志を見せていた。
（今のわたくしの実力では…魔王を討ちながらアイリルを助けることなど……）
少女勇者の剣が、弱々しく下がる。
嬲る騎士の快楽脳波を吸収する魔王は、魔力を回復させつつあった。
アイリルへの首絞めを緩めながら、余裕の笑いでギルバオウが問う。
「勇者よ。我に服従するか？」
「だっ、だめだルトラっ……私に構わず、魔王をっ――ぅぐぐっ！」
姉騎士の首が再び絞められると、もう少女には、選択肢などなかった。
「い、言う通りに……します…っ！」
視線を落とし、構えを完全に解く。
――カラン……。
降伏の証として、ルトラ自身の意志で、宝剣が滑り落とされた。
無防備となった勇者少女の肢体に、吸盤触手とペニス触手が絡んでくる。
細い腹部にヌルリュルと捲きつかれると、知らない性熱がジンと熱い。
「ぅくく……こ、こんな…っ！」
背中や腿へとしなやかに捲きつく濡れ触手たちは、薄い表皮のすぐ下に、ガチガチの筋肉を感じさせる。
ペニス触手の先端はヘビの頭のように盛り上がっていて、口の如き先端の割れ目が、粘液を垂らせていた。
「うぅっ……なんと、醜怪な…！」
しかも濡れる本体や粘液からは、一度も嗅いだことのない汚臭が強く漂う。
処女の勇者が知らない、男性器特有の熱い精臭。清潔な理性が嫌悪して、身体の奥深くが未知の熱を帯びた。
触手を腿に捲かれると、土下座にも似た立ちヒザ姿勢にされる。
「勇者殿の身体、見せて貰おうか」
ギルバオウがイヤらしく笑うと、ビキニ鎧のカップが吸盤触手に吸い付かれて、一気に奪われ握り潰された。
真っ白でプルプルな巨乳が露出させられて、淫魔王の視姦に晒される。
「あぁっ――っ！」
思わず隠そうとした両腕は、姉騎士への絞首でどけさせられた。
「そのまま自分の掌で、捧げ見せろ」
「なっ…は、はぃ……」
屈服の立ちヒザ姿勢で、自ら乳房を持ち上げて、淫魔王に捧げる。
討つべき淫敵へと肉体を献上するような格好に、屈辱と恥ずかしさで金髪が震え、全身がカァっと熱くなった。
魔王の視線でタプタプの双乳を舐め回されて、明るい桃色の艶めく乳首が凝視される。
と、不意に少女は、首輪の魔法石が魔力に反応していることに気がついた。
小さく、ゆっくりと、新緑色の点滅を繰り返している魔力の源。
（魔法石が、魔力を回復させて…！）
勇者は気づいた。
魔法石は肌触れる触手を通じ、少しずつ魔王の魔力を吸収しているのだ。
願ってもなかった、逆転の予兆。しかし宝玉は、ゆっくりとだけど点滅もしている。
（……魔王に、気づかれなければ……）
今となっては、唯一の機会。これを逃すことはできない。
（このまま…奉仕に甘んじながらでも魔力を完全回復させるしか……）
淫王にバレたらすべてがおしまいだ。
「まず手淫を覚えて貰おう」
魔王の宣言した、調教が始まる。
「ひっ――っ！」
目の前に突き出されたペニス触手たちは、処女勇者には恐ろしかった。
ルトラは――？

⬇シーン2へ
⬇シーン3へ

著者近刊
『ダークエンパイア 反逆の流星たち』『姦落の巫女姉妹 参』『白翼の姫騎士ナイトスワニィ』『武闘少女姫 桜輝』『双子づくり！』『キリMっ！』『オトミコ！ 僕は男の巫女娘』『わたしが倒してあげるんだから！』
好評発売中！

シーン2

（とにかく今は、魔力の回復を…！）
そう決意したルトラは、周囲で蠢くペニス触手に、震える指を伸ばした。
「うぅ……ん…熱ぃ、です…」
力と欲望を隠さない弾力が感じられて、思わず心臓がドクンっと跳ねる。
「……ぁ……」
鼓動が早まると、目の前と頭がボ～っとしてくる。嘔吐感さえ覚える勃起から、指が離せなくなっていた。
「優しく本体を撫でるのだ」
魔王の命令は、勇者少女の内側を見透かしているようにも感じられる。
（こ、これは魔力の、為です…！）
自らに言い聞かせると、ルトラは人生初の手淫奉仕を始めた。
恐る恐るの愛撫は、微妙なタッチ。
繊細に撫でろ。と命令をされる。
――すりすり…しゅりゅりゅ……。
少女のフワフワな掌の愛撫で、ガッチガチの筋肉触手が歓喜して力む。
数十センチの濡れ本体を掌往復するたびに、太さと熱がドクンっと増した。
（っ――っ！　臭いです……でも…）
嗚咽するほどの牡臭なのに、抵抗感を奪われて、脳まで熱灼けさせられる。
思考が停滞させられると、熱と弾力と脈動に、慈愛の奉仕を施していた。
（わ、わたくし……は…回復を…奉仕を……）
催淫液が掌から染みこんでくると、早く充たしてあげたい、とまで思う。
愛撫を捧げる処女勇者の両手が、無意識にも摩擦の速度を上げていた。
――しュるシゅ、ヌるすりュるっ！
ペニスはさらに力を増して、ヌルヌル亀頭部分は破裂せんばかりに赤熱化。
ルトラの意識も白く灼かれてゆく。
蕩ける眼差しの手淫処女に、淫魔王がさらに命令を下した。
「我の液はその愛らしい顔で受けろ」
素直に頷いてしまったと同時に、掌の中の勃起が、ビクンっと蠢動。
真っ赤に張り詰めた亀頭の先端から、白濁な粘液が大量に放出された。
――っッビゅクびュるルるッ！
「っ――っあぁあんっ！」
見せられた射精に、自慰未経験な脳裏も初体験な快感白光をさせられる。
全身が硬直してフワりとした浮遊感の後、優しい気怠さに包まれた。
ウットリ蕩けた勇者の愛顔に、魔王の精液がポタペチャと降りかかる。
緩やかな金髪や勇者の髪飾り、細い鼻筋やプックリとした唇、剥き出し巨乳が、牡臭い白濁を垂れさせていた。
「ぁふ……こ、こんな……」
女性の尊厳を穢されたショックと、初めて教えられた女の肉快感。
惚けて肉棒を掴んだままの半裸勇者は、思わぬ言葉を浴びせられた。
「魔法石が点滅しておるぞ…グクク」
「は……ぁ…こ、これは…っ！」
言われて、宝玉を晒してしまっていることに気づく。しかも魔力は、微弱。
ギルバオウは、気づいていたのだ。
「ならばもっと魔力をくれてやろう」
両腕まで触手に搦め捕られると、ルトラは大の字姿勢で拘束される。
「なっ、何をっ――ひっ！」
淫魔王の目の前に捧げられると、鎧のボトムを奪われて、穢れなき処女溝を触手拡げで晒されてしまった。
「ついっ、いやあああぁぁぁっ！」
濡れた肉芽も桃色花弁も膣孔も、後孔までもが、自らの蜜で濡れている。
淫敵の強い視線が、処女膜から肛門から、胎内にまで深く突き刺さる。
もがく肉体はしかし、催淫と女体興奮で力がまったく入らなかった。
「このまま犯し淫力漬けにしてやる」
もがく勇者の処女割れ目に、淫魔王のペニスが充てられる。
「っきゃひぃっ――っ！」
鉄の如き熱さと堅さと、子供の手首ほどもある太くて長い勃起。
淫水灼けで艶黒く、傘の開いた肉カリ部分が蠢動。本体は、無数の血管といくつもの肉傘部分で覆われていた。
こんな怪異物で犯されると想像すると、恐怖で気がおかしくなりそうだ。
そして。
「や、やめてくっ――ぃ痛いぃっ！」
――っぷつっ！
勇者少女は遂に、淫魔王の太い牡肉で犯されてしまった。
胎内への圧迫と痛みで呼吸が止まりそうなのに、女体は未知の存在感を教えられて、卑猥にくねってしなる。
破瓜の鮮血が溢れるヒップを掴まれてストロークされ始めると、身体は知らない肉快感に染められ始めた。
「ひぃぃっ――っはひぃっ…ぃやあぁぁぁぁぁあああああはぁっ！」
肉反りに合わせ、力任せに上下動。
剥き出し乳房が大きく弾み、先端媚突が赤みを増してキュっと硬化する。
抱かれる裸尻が、男性の力強さに歓喜して脱力。吐息が濡れて心臓が鼓動を高め、初めての勃起絶頂へと、容赦なく上げられてしまう。
隣では麗騎士も、魔王の男性器による処女強姦に晒されていた。
「絶対服従精液だ。そうら！」
宣言と同時に、魔王による強い絶頂肉突きが、ズンンッッと与えられる。
「いっ――ぃやあああぁぁっっ!!」
「っくあぁぁっ――ィくぅっっっ!!」
――ッドビュリュリュリュリュッ！
二人の胎内が魔精液で充たされると、子宮と脳裏が、絶対服従へと染められてゆく。
勇者ルトラは、魔王に敗北した。

数日後、暗い玉座で服従奉仕をする、半裸姿の蕩けた二人。
「んっんっ……ギルバオウ様ぁ♥」
「ペロ、ペロ…ぁん、お逞しい…♥」
堕ちた眼差しで魔王に肉体を捧げ続ける勇者と騎士が、性の絶対服従から抜け出すことなど、不可能だった――。

BAD　END

シーン3

奉仕してでも――。
との決意も、ペニスを見せられると一瞬で萎縮してしまった。
「だ、誰がっ――汚らわしい…っ！」
処女の抵抗を笑う魔王の勃起に、アイリルの開脚股間が狙われる。
割れ目を護る極薄ハイレグ部分が破られると、桃色粘膜が露わにされた。
数本の細い触手でチュクリと拡げられた処女の秘処は、舐られた影響で既にタップリと蜜を含んでいる。
強姦の怯えを隠せない騎士を見ながら、処女孔に勃起を押しつける魔王。
抵抗するならアイリルを犯す。という無言の脅迫だった。
「っ――まっ、待ってください！」
剥き出しの巨乳をタプンと揺らして、思わず叫ぶ少女勇者。
「い…今……」
「ルトラ、だめっ――っんぐぅ…！」
騎士の口が掌触手で塞がれると、半裸ビキニ鎧の少女はヒザ立ち姿勢のまま、勃起触手に震える掌を伸ばした。
指先が触れると、原初的な肉弾力と強く臭う牡性熱で、ゾワりと怖ける。
（で、でも今は…！）
アイリルを護るだけではなく、魔王を倒すだけの魔力を溜める為にも、恥辱に耐えなくてはならない。
首輪の魔法石も、まだ微々たる量の魔力しか回復できていないのだ。
蠢く勃起触手を恐る恐る手にすると、掌全体が穢されるような錯覚。
「優しく触れながら、愛撫をしろ」
命令に従い、触れるか触れないかの優しいタッチで愛撫を捧げる。
太い触手の表皮はミッチリと張り詰めて、無数の血管が脈動していた。
柔らかい掌の愛撫を受ける、赤黒い濡れ男性器触手。その姿は、まるで喉を撫でられ喜ぶ邪淫ヘビを思わせる。
「な、何と醜怪っ――きゃあっ！」
奉仕の嫌悪感に捕らわれているルトラの剥き出し巨乳が、背後からのタコ足触手に搦め捕られた。
右の乳房は根元から先端まで触手捲きにされて揉み遊ばれて、左の乳房は掌で持ち上げられるように細い六本の触手で揉み愛撫される。
――もミゆリ、タぷルゅモみゅル。
「んんん…ふ、不埒な…ぁくん…！」
両脇を抱かれるように、タップリ乳房を揉み遊ばれる。肉体が知らない熱で、内側からカァっと炙られてゆく。
（な、何か……身体が…っ！）
心臓が鼓動を早め、肌が霧状の汗を纏う。柔らか脂肪を優しく愛撫されると吐息が湿り、不意に強く揉まれると鋭い性甘激で息が止まる。
身体を好き勝手に舐られているのに、両手は勃起熱に馴らされてゆく。
（こんな…汚らわしい、ですのに…）
男性器の発する強い性欲を押しつけられると、女体は本能的な服従と奉仕を、一方的に目覚めさせられてゆく。
そして胎内で、切なく強い肉欲求。
（わたくしの、身体が……）
魔王の思惑。無垢な肢体が男性に性奉仕する女体へと、躾けられてゆく。
「いいえっ……こ、これは…！」
清潔な意識が、思わず口を突いて出た。馴らされてゆく女体に、必死の抵抗をする勇者少女。
触手揉みされる巨乳の谷間に、さらに勃起触手が二本も押し入ってきた。
「ぁあぁっ――っぁ、ぁつぃ…！」
ペニス触手は、まるで自分たちの巣であるかのように、堅くて熱い脈動本体をくねらせて、柔谷を堪能。
揉み触手で双乳を寄せられ、谷間の触手へと締め付け奉仕をさせられる。
――ぬルちュつプ、るチゅタぷル。
「っひゃぁぁっ……はぁ…んぅ」
二つの巨乳を嬲られながら、さらに上下に揺すられての、強制愛撫。されるがままで屈辱な筈の、自分の乳房。
それなのに。
（こんな……わたくしの…むね……）
少女の脳には、女性にしかできない官能的な姿としか、映らなかった。
いつしか両手の奉仕も、柔らかな愛撫の速度をスリスリと上げている。
蕩け始めた視線も、周囲で蠢く触手たちに飢餓の眼差しを向けていた。
「む…むねが、溶けそぅです…んく」
そんな吐息さえ溢れてしまう処女勇者に、魔王の新たな命令が下される。
「両手と乳房を覚えたら、次は唇だ」
無意識に頷いてから、ハっと気づく。
ギルバオウは、穢れた男性器を唇に含めと言っているのだ。
「なっ――ぁぁっ、アイリルっ！」
抵抗しようとしたルトラは、姉騎士の姿に驚かされた。
拘束されたまま、剥き出し爆乳を揉まれて谷間を勃起占領されて、さらに口内深くペニス触手を含んでいたのだ。
「んちゅ…ペロペロ、ちゅぷんんっ」
魔力に抵抗力のあるアイリルだけど、淫液に対する抵抗力は、勇者の末裔であるルトラに比べ、ないに均しい。
淫液まみれの女体は勇者以上に性興奮をさせられていて、両腕は十字架磔のまま、両脚は限界までM字に開脚。
剥き出し粘膜は数本の勃起触手に強く突かれコネられて、処女の蜜を溢れさせている。
勃起を含まされた唇は自ら締めて、堅さや太さ、熱や匂いや舌触りや味までを、甘受していた。
「アイリル……そ、そんな…」
凛々しい瞳は官能に蕩け、肉体は淫堕される寸前だろう。
しかし宝玉の魔力は、まだギルバオウを倒せるに十分とは思えない。
魔王は淫笑しながらも、勇者少女を注視している。
ルトラは――。

⁂それでも必勝を狙う ⬇シーン4へ
⁂アイリルを信じて、奉仕を続ける ⬇シーン5へ

ここは某県にある龍奉神社…
〝触手マイスター〟空木次葉が送る巫女少女陵辱絵巻！
この巫女少女…
見習い巫女神の水玉こと「水玉姫命」は日夜常世の「厄」を祓う為に戦っている
スッ
やッ
わわっ
〜ミズノタマヒメノミコト〜
水玉姫命
異伝・厄纏いの少女
漫画COMIC／空木次葉
その敵である「厄」とは——
ウウ！
ロウ！
万物に取り憑き災いをもたらす穢れの権化である
フロス！
オヤス！
どこか抜けていて頼りないが水玉姫命は様々な失敗をしながらも神社の神様に師事し厄祓いを続けているのである

ドクッ…
ジュクッ…
——厄払い完了です！
ホッ
ふぅ…
良くやったな水玉 この調子で精進するのだぞ
あっ 神様！
はい——
ぱあっ
不肖水玉！神様の名に恥じぬようがんばります！
今回もなんとかなりました
…フム 今宵はまだ大きな厄が居るようだ
ちょっとホメすぎたかな
水玉 頼むぞ
はい!!

——って
これさっきより厄が多いですッ
ニンゲン…？
オォ…ッ
ソウマエル…
しかもッ
今までこんなに多い事なかったのに
オンナ…
オカス…ッ
ヒヒヒ…！
しまったッこ…この厄は今までのとはちがいますッ
何か明らかに厄の敵意が強いですッ
どうして突然こんなに強く…ッ

痛ッ…こんな格好でつかまえるなんて…ッ
辱めにはくっしませんッ
ガバッ
厄共が沢山狩られると思うてどの神かと思えば…若い神よの
!?
ずるり…
や…厄から人が…!?
おやおや～…
…ちがう人じゃない！
あなたは…一体…何者？
ぬるぬる…
ぬり

巫女神…そんな事気にしてるヒマがあるのかえ？

妾はのう…厄を祓うそちが邪魔なのじゃ…ちと灸をすえさせてもらうぞ

な…ッ!?

水玉!! それは黄泉醜女(ヨモツシコメ)…ッ

神様!!

厄の生み出される黄泉の国の遣いだ

強力な厄をまとっている…ッ助けに行くから時間を稼げ！

はッはい!!

ちっ…

…ほうこれは久しい

…余計な事を

ククク…その声…黒龍(こくりゅう)おぬしこんな所で神社の神をやっておるのかのこの巫女神…秘蔵っ子というわけか…おもしろい

何!?

黄泉醜女が何故わが正体を…!?

あなどるな…この死体はこちらに顔を出す時に使うだけの物よ

忘れたか？妾の声を…

ま…まさか黄泉神の…！

……？

神…さま？

ぐ…ッまってろ水玉!!

まあここで派手にやらかす気は無いのでな…後はこの死体にまかせるとするよ

ニチャア…

助けが来るまで一刻程かの…

それまでこの死人と遊んでいるがいい

また会おう若い巫女神

厄の力が弱くなった

捕縛が外せる！チャンスです!!

きて!! 厄祓いの刀!!

パアアアイ!!!

ゴゥ

あ～っ

あ～ぁ…

やった!?

…生者…？妬ましい…ッ

ツカマエル

ザシュッ

イヤ…!?

きゃあッ 効いてないの!?
そ…そうか 死んでるから 痛みを感じないんだッ
やだッまた つかまっちゃうッ
ウジュル
ジュルルル…
ギチッ
ガリ
ゲッ
またこんな格好でッッ
もう逃がさない…

生命…あたたかい身体…
羨ましい…
妬ましい…
欲しい…
こんな熱くなれるなんてずるい…
ぷにゃっ
ぷにゃっ
ピクッ
ヒッ
ずるいずるいずるい触るともっとあたたかい…
やッやめてッ
な…なにこれ…ッきもちわるい…この厄から出てくる粘液で服が透けちゃうよ…ッ
ヒ…
ヒ…
ニチャッ
この布邪魔だよ…直接身体からぬくもりをちょうだい…ッ
ぶるんっ
がばッ
ひゃあぁッ
動けないからって好きにして…ッくやしい…ッ

ピエロ（アルカナ）が演出する淫獄の宴が幕を開ける!!

魔術師とアルカナの化身

漫画（COMIC） 高浜太郎（たかはまたろう）

原作：水坂早希

さぁて みんなで 楓（かえで）ちゃんを 虐めマショウカ

残念ながら ご主人様の命令で オ■ン■ンは 挿入できマセン ですが

セックスより 面白い遊びを 考えちゃい マシタ

そこの お兄さん

オ■ン■ンを 出して しごいて みてクダサイ

お… おう

小説1、2巻好評発売中！
電子書籍版も好評配信中！

そうやって オナニーすると 触手が作れマス

想い通りに動かせマスシ 五感もついてマスカラ 性贅のお肉を 思う存分味わえマスヨー

ずにゅる
ずず
ミンナー まずは上半身から 虐メテ
たっぷり 前戯をして あげマショウ
ひッ
プルン♡
たぷん
たぷっ
にゅる
ぷく♡
んんッ
もう触手は やだあッ
くちゅ
ぎゅ
ぴくん
うわ すごく奇麗な 色と形だ
ぐぱぁ
ひッ 気持ち悪いッ
乳首すっごく 固くなってるじゃん くー チ■ポでこねまわしてぇー
ズズズ!!
ぬろ
さあ 女の子たちも 恥ずかしがらずニ どんどん触手を 作るノダー
ひくん
ジュッ
ズブ
どろぉ~
ぬぢゅ
今の楓ちゃんは 性贄が熟成され 感じると特濃の母乳が 溜まるように なってマス
おっぱいを グチュグチュ 搾って あげマショウ
がくがく
にゅるぅ~
ゾク ゾク
ひあ あ!!
ひゃん!? もう… 胸が膨れて…
んッ
あっ
ぢゅうう…
ヌチャ
ヌリュ
ぎり ぎり
胸の中…乳腺まで 掻き回されッ
ぬりゅ
おっぱいなんて 出ないからッ
搾らないでッ いやあぁッ
楓さんの胸 前よりずっと 大きくなってる… どんないやらしい事 されたら こうなるのかしら…
ぴくん
ぴく

乳首イクぅぅーッ
ふぁ
んっ♡
ビュッ
ビュルルッ
ああぁぁ止ま…らないぃ
ひっ
かは
あ…
こんな駄目ぇこれ以上搾らないれぇ
もう前戯はいいんデスカ?
もっとおっぱい虐めてあげてもいいんデスガ…
ぷりんっ♡
スル
や…もう胸でイクのやらぁ…
はあ
はあ
ドキ
ドキ
もう…お■んこもお尻もどろどれすぅ
だから…おっぱいだけはおっぱいは搾らないれぇ
キュッ♡
とろーー

対魔忍
ユキカゼ
TAIMANIN YUKIKAZE
対魔忍魔調教に堕つ
最終話 宴の果てに
小説 NOVEL 蒼井村正
挿絵 ILLUSTRATION 竜胆
原作 ORIGINAL Lilith
悦楽に濡れる瞳に映るのは
想い人と求め人の影―

ゾクトによって剥ぎ取られた猿ぐつわ付きマスクの下から現れたのは、ゆきかぜが恋い慕い、心の支えとしてきた達郎のものであった。

「……ウソ……こんなことって……あるわけ、ない……」

ゆきかぜは、涙をたたえた大きな目で、磔状態になった恋人を見つめながら、呆然とつぶやく。

「ギャハハハッ！　なんだぁ、そのシケた面は？　最愛の男と会えたんだから、もっと嬉しそうな顔しろよ、淫乱メス豚のゆきかぜちゃん♪」

奴隷商人が、あざけりの声をかけてくるが、ゆきかぜにはそれに言い返す気力もない。

「教えてやるよ。このガキは、おめえらとの連絡係として、オレと一緒にヨミハラまで来たのさ」

ゾクトが自慢げに説明を始める。

「……で、油断したところを捕まえて、奴隷娼婦お披露目パーティーを、最初から最後まで見学させてやったんだぜ」

下卑た声が、ゆきかぜの鼓膜を不快に震わせる。

（私、達郎の見てる前で、男たちに犯されてよがり狂っちゃった。達郎だとわからずに、フェラして射精させちゃった……）

羞恥と後悔に苛まれた少女の中で、最後の希望が崩れ落ちてゆく。恥辱と肉悦に呑み込まれそうになる彼女の心を陥落の瀬戸際で支えていた唯一の存在を、自分の手で辱め、汚してしまったのだ。

ステージ上に投げ捨てられた猿ぐつわ付きマスクを、少女は涙に濡れた目で見つめて放心している。

「私は……弟のペニスに欲情して……浅ましく貪ってしまったのか……フフフッ……クククッ……あははははぁぁぁ～ッ！」

悲嘆に暮れるゆきかぜの隣で、虚ろな声でつぶやいていた凛子が、唐突に笑い始めた。

「おいおい、爆乳メス豚の凛子ちゃんは、ショックが大きすぎてブッ壊れちまったかァ？」

ゾクトのあざけりを受けながらも、冷静沈着をもって知られたクールな対魔忍は、切れ長の目から涙の滴を振り飛ばし、たわわなバストを揺れ弾ませて哄笑し続ける。

やがて、狂気の笑い声も、炎が燃え尽きるように弱まり、静寂が場を支配した。

「ハァハァハァハァ……今、悟ったぞ……」

肩を喘がせ、狂気じみた表情を浮かべた凛子は、引きつった笑みを浮かべてかすれ声を搾り出す。

「今の私は淫らなメス豚、根っからの奴隷娼婦……実の弟のモノでも、チ■ポを見ただけで浅ましく欲情してしまう、最低の淫乱なのだ！」

独白する凛子の声が、猥雑な臭気に満たされ澱んだヨミハラの一角に響き渡る。

「ならば、もう迷うことはない……。ご主人様、弟の童貞、私が奪ってやりたく思います！」

磔にされた達郎の股間にもの欲しげな視線を送りながら、凛子が申し出た。

「……!?」

放心状態に陥っていたゆきかぜは、聞き捨てならぬ先輩対魔忍の提案に、ビクッ！　と身を震わせたが、虚ろな視線を投げかけただけで、何も言葉を発しようとしない。

「ふむ、俺は別に構わないが、ゆきかぜが嫉妬するのではないかな、達郎君と恋仲なのだろう？」

リーアルの問いに、凛子は無言で頷いた。

「ええ、その通りです。ですが、ゆきかぜは、ご覧の通りの腑抜けた有様、それに、女体としての格は、私の方が遥かに上！」

喪心状態のゆきかぜを横目で睨みながら、凛子はこれ見よがしに爆乳を揺れ弾ませるが、後輩対魔忍は、やはり何のリアクションも見せなかった。

「この腑抜けが途中で正気づいたら、また、二人がかりで犯してやります。……あはぁ……チンポに飢えた淫乱オ■ンコが疼いて堪りません」

甘い喘ぎを漏らした爆乳奴隷娼婦は、たわわなバストを片手で揉みこね、クチュクチュと卑猥な粘音を立てて秘裂で指を屈伸させながら、人目をはばからぬ自慰を開始してしまう。

「うほ……こいつはすげえ、あのクソ生意気な女が、オナニーまで披露してくれるとはなぁ」

ゾクトが嬉しげな声を上げた。

「ごっ、ご主人様ぁ、お願いです。達郎と……弟とセックスさせてください！」

生々しい蜜鳴りの音を立てて秘裂を弄りながら、凛子は娼館の主に禁忌のセックスを哀願する。

「う……りっ……凛子ねぇ……ダメ……だ……」

グッタリとうなだれたまま、それまで一言も発しなかった達郎が、蚊の鳴くような声を搾り出す。十字架にかけられた少年の股間では、連続射精を強いられたペニスが力なく萎え下がっていた。

「ダメなものか！　お前の童貞は、わっ、私がもらうぞッ！」

拘束された弟に歩み寄った凛子は、程良く鍛えられた若者の胸板にボリューム過剰なバストを押し当

登場人物紹介

水城ゆきかぜ

電撃の対魔忍の異名を持つ若き対魔忍。勝気で負けず嫌いな性格。幼馴染みの秋山達郎のことを気にかけている。

秋山凛子

ゆきかぜの通う学園の先輩対魔忍で達郎の姉。ゆきかぜと行動を共にし、先走りがちな彼女をサポートする。

秋山達郎

対魔忍として成長中の少年。ゆきかぜとは幼馴染みであり、長い間互いを思っているが友達以上恋人未満の関係。

前号までのあらすじ　任務中に行方不明となったゆきかぜの母・不知火を探すため、魔界都市ヨミハラへ潜入した二人の対魔忍。存在をカモフラージュするため、奴隷娼婦としての調教の日々を受ける彼女達が相手にした男、それはゆきかぜが会いたいと切望していた相手だった――。

て、萎えたペニスに肉感的な太腿を擦りつけながら、クールな美貌を淫蕩に歪ませる。
姉の唇に乳首をついばまれ、脇腹周辺を撫で回された達郎の身体が、ビクッ、ビクビクッ、と、敏感に反応した。
「姉が弟を逆レイプするか。……面白い、許可してやろう。存分に貪るがいい」
脂ぎった頬に邪悪な笑みを浮かべた中年男は、ほんの一瞬、何かを考え込み、再び口を開く。
「だが、達郎君の拘束を解くことは許さん。そのままの状態でも問題ないだろう？」
「しっ、しかし、このままでは体位が限られてしまいますし、達郎も腰が使えません。どうか、この縛めを解いてください……」
革ベルトで手足の自由を奪われた弟の裸身を愛撫しながら、凜子は哀願する。
「オ■ンコが疼いているんだろう？　早く弟のチンポを呑み込んで、俺が教え込んでやった奴隷娼婦の技巧で楽しませてやれ！」
凜子を見つめるリーアルの三白眼には、有無を言わせぬ迫力があった。
「う……く……わかりました。達郎……はっ、早くチ■ポを勃起させないか！　……おい、ゆきかぜ、お前の手コキで勃たせてやれ！」
「えっ⁉　あんッ！」
虚脱状態のままへたり込んでいた後輩対魔忍の手を掴んで引き寄せた凜子は、弟のペニスを強引に握らせながら、耳元に口を寄せる。
『ゆきかぜ……ここは退くぞ……私の忍法で、達郎を連れて脱出する……』
対魔忍以外には聞こえぬ特殊な波長の声が、ゆきかぜの鼓膜を震わせた。
「え？　せ……先輩……何を⁉」
焦点を失って見開かれていたゆきかぜの瞳に、わずかに理性の光が戻る。
（逃げる？　ここから……達郎と……⁉）
言葉の意味を脳内で反芻してみるが、まだ意識が朦朧としていて、具体的には何をすればいいのかまったくわからない。
『……お前は精神的に消耗しすぎている。ともかく、黙って私に従え。側を離れるな！』
さらに強くゆきかぜの身体を引き寄せて命じた先輩対魔忍は、達郎に視線を転じる。
「あはぁぁ、早く……チンポを勃起させろ、お姉ちゃんが犯してやるぞ」
周囲の様子を盗み見ながら、淫らな笑みを浮かべた凜子は、弟の身体を愛撫する振りをしつつ、拘束を解きにかかる。
『わかった……凜子ねぇ……』
愛撫の最中に、脱出計画を告げられた達郎も、特殊発声法で了解の意思を伝えてきた。
（……この命燃やし尽くしてでも、私の忍法で、ゆきかぜと達郎だけは、何としても逃がす！）
弟の裸身に艶めかしく身を擦り寄せながら、凜子は決死の覚悟を抱いて意識を集中してゆく。
彼女が得意としているのは、空間を跳躍して移動することのできる『空遁の術』。
奇襲や緊急離脱にはもってこいの忍法なのだ。
（今の体力で跳躍できる距離は、せいぜい数百メートル……だが、それで十分だ！）
凜子たちが空間跳躍しようとしている目的地は、娼館の主であるリーアルの書斎。凜子とゆきかぜが、奴隷娼婦の契約を結ばされた因縁の場所だ。
（あの部屋なら、外部との通信手段もあるはず。それに、この身体を縛めているナノ寄生体を解除する薬も置いてある可能性が高い……）
凜子とゆきかぜの身体に寄生させられているナノ寄生体は、奴隷娼婦の刻印を舌に浮き出させるだけではなく、裏切りと逃亡を封じる強力な枷にもなっているのだ。
ヨミハラから逃げ出そうとしたり、リーアルたちに危害を加えようとすれば、体内のナノ寄生体は生体爆薬に変貌して、手足を内部から吹き飛ばしてしまう。脱出するためには、寄生体を何とかして排除、あるいは無効化する必要があった。
凜子は、全力を賭した忍法発動に備えて精神を集中させながら、弟の身体を縛めている革ベルトを少しずつ緩めてゆく。
（よし、あと少し……達郎の身体を自由にすると同時に、ゆきかぜを連れて『跳ぶ』ッ！）
空遁の術が成功してしまえば、どこに跳躍したのか、リーアルたちにはすぐにはわからないはずだ。
「やっと……勃起したか……さあ、お姉ちゃんのオマ■コにおいで……」
術の発動準備が整った凜子は、身体を伸び上がらせて弟の身体に密着すると、彼の両手首を縛めている革ベルトに指をかけた。
「……凜子ちゃん、小賢(こざか)しい真似は止めなさい」
あと少しというタイミングで、闇に包まれた路地の奥から、甘い響きの中にゾクリとするような殺気を含んだ女の声が投げかけられた。
「えっ⁉　そっ、その声は……まさか……⁉」
悦楽に蕩けた演技を続けていた凜子の顔が、ギクリ！　と強ばる。
「ククク、サプライズゲストは達郎君だけではないぞ。もっと驚くような人物も、お前たちの奴隷娼婦デビューを祝うために呼んでおいたのだ。おい！　そろそろ出てこい！」
楽しげな含み笑いを漏らしたリーアルが、背後の闇に向かって呼びかけた。
コッ……コツコツコツ……。

著者近況　四回にわたって連載させていただきました「対魔忍ユキカゼ」も今回が最終話。読者の皆様からの感想のお便りが執筆の励みとなりました。今後も感想、ご意見どんどんいただきたく思います。

暗い路地の奥から、硬質な足音が近づいてくる。
今にも消えてしまいそうに明滅しながら、路地の出口を照らしている街灯の光が、過剰なまでに肉感的な女性のシルエットを浮かび上がらせた。
大胆なスリットの入った白いコスチュームの裾がフワリ、と翻り、過剰なサイズの爆乳が、歩みに合わせてたゆたゆと揺れ弾む。
「あ……あぁぁ……」
「おかあ……さん……お母さんなの⁉　やっぱり、ここに居たんだ……」
呆然と見つめる凜子と、虚ろな声を上げるゆきかぜを、冷たい光を宿した切れ長の目が映す。
二人の視線の先にたたずんでいるのは、任務中に消息を絶った対魔忍、不知火に間違いなかった。
彼女は、白を基調とした対魔忍装束に身を包み、アルミのアタッシュケースを右手に提げている。
「凜子よ、お前の演技、なかなか真に迫っていたぞ。逃亡を阻止しろ、不知火！」
「承知いたしました……」
リーアルの命令に頷いた不知火の姿が掻き消え、次の瞬間、凜子の背後に出現する。
「何ッ⁉　んくぅぅッ！」
愕然と振り向いた凜子の髪を掴んだ不知火は、逃亡を企てた奴隷娼婦の身体を荒っぽく引きずって達郎から引き離す。
「不知火殿、何故、リーアルなどに従うのです⁉」
「お黙り、ご主人様に逆らう愚かなメス豚ッ！」
「ぐはぁぁう……ッ‼」
冷淡な口調で吐き捨てた不知火のピンヒールの踵がみぞおちにめり込む。
（こ、こんな……バカな…）
痛みに屈し、そのまま凜子は失神した。
「……やっぱり、臍下丹田に気を溜めていたわね。空遁の術……破れたり」
「お母さん、やめて……おねがい……やめてよぉ！私たち、お母さんを助けに来たんだよぉ」
幼子のような声を上げたゆきかぜは、意識を失った凜子をなおも踏みにじっている母親の美脚にすがりついて泣きじゃくった。
「ゆきかぜ……」
娘の顔を見下ろした不知火の顔に、慈愛に満ちた笑みが浮かぶ。
「お母さん……助けに来たんだよ。一緒に……帰ろう……ね？　みんなで帰ろうよぉ」
褐色肌の少女は、感極まった声を上げ、親猫に甘える子猫のような表情で、母の顔を見上げる。
「……邪魔ッ！」
優しい微笑みを一変させ、鬱陶しげに眉をひそめた不知火は、彼女を助けるために、奴隷娼婦にまで身を堕とした愛娘の腹を容赦なく蹴り飛ばす。
「ぐほぁぁぁ！」
大量に飲まされた精液混じりの吐瀉物を散らしながら宙を舞ったゆきかぜの身体が、石畳に叩きつけられてバウンドした。
「ご主人様、逃亡阻止、完了いたしました」
不知火は、忠実な猟犬のように、リーアルの所に歩み寄ると、中年男のでっぷりと太った身体に身を擦り寄せて甘える。
「よくやったぞ、不知火」
娼館の主は、満足げな笑みを浮かべ、メリハリの利いた熟女対魔忍の肢体を抱き寄せた。
「お母……さん……どう……して？」
蹴られた腹を押さえてうずくまったまま、ゆきかぜは苦悶と哀しみの混じった声を搾り出す。
「私は身も心も、リーアル様の忠実な下僕……」
男にしなだれかかった不知火は、妖艶に笑み歪ませた朱唇の間から、ヌロリ、と舌を突き出した。
唾液に濡れ光る深紅の舌には、奴隷娼婦の証である幾何学紋様がくっきりと浮き出ている。
「お母さんまで……奴隷娼婦に……うぐゥゥゥ」
ある程度予想できていたこととはいえ、中年男の腕の中に抱かれる母の姿を見せつけられたゆきかぜは、クリッと大きな目を見開き、身を震わせて嗚咽を漏らしてしまう。
「ご覧の通りだ。不知火は俺が仕込んだ中でも最高傑作の奴隷娼婦なのだよ」
不知火のたわわな乳房に指をめり込ませてこね上げながら、リーアルは自慢げに告げた。
「あはぁん……ご主人様、お戯れが過ぎますわ……ご褒美は、後ほど……ンッ、くぅぅん……」
着衣越しに乳首を摘み揉まれた熟女は、心地良さげに鼻を鳴らし、豊満な肢体をくねらせる。
「さらに付け加えておくと、今回の対魔忍捕獲作戦を提案したのは、他ならぬ不知火なのだ」
心身ともに痛めつけられたゆきかぜに対して、リーアルが追い打ちの言葉をかける。
「ウソ……そんなの……ウソに決まってる！　お母さんは……絶対にそんなこと、しない……」
「嘘じゃないわ。娘のあなたにも、奴隷娼婦になった者にしか味わえない極上の悦楽を教えてあげたくて、私からご主人様にお願いしたのよ」
不知火は、罪悪感の欠片もない口調で言い放つ。
「私自身を餌にして情報を流せば、必ずゆきかぜちゃんがヨミハラにやってくる。凜子ちゃんと達郎君まで捕まえることができたのは、収穫だったわね。大漁、大漁……ウフフッ」
「な……そん……な……ひどい……こんなの酷すぎる……うぐ……うっ……うぅぅぅ……ッ！」
精神的なショックを立て続けに受けたゆきかぜの目から、大粒の涙がこぼれ落ち、路面に飛沫を散らした。

著者近刊
『呪詛喰らい師』計3巻、『超昂閃忍ハルカ スパル虜囚魔辱編』『暁の護衛 プリンシパル護衛日記』『もののふガールズ2 姉妹剣士がお相手します』『てとてトライオン！ 夏休み活動日誌』『もののふガールズ' 剣も恋も免許皆伝』
好評発売中！

（何もかも……裏切られて……壊されて……もう、ダメだ……私、もう、ダメだよ……）
母や凛子、達郎たちと過ごした、楽しい過去の思い出が、走馬燈のように少女の脳裏を駆け抜け、全てを失った少女の心が、絶望の奈落へと堕ちてゆく。
「状況が理解できたかな？　元対魔忍のメス豚どもよ。お前たちは、俺の掌の上で、間抜けで淫らなダンスを踊り続けていただけなのだよ」
悪魔のごとき邪悪な笑みが、娼館の主の脂ぎった顔に浮かぶ。
「さて、それでは、スペシャルゲストを交えた宴の第二幕を始めようではないか！　おい、アレを達郎君に注入してやれ……」
全ての希望を打ち砕かれて意気消沈するゆきかぜと、失神状態の凛子を三白眼に映したリーアルは、不知火に命じる。
「かしこまりました。……達郎君、しばらく見ないうちに、随分立派になったわね」
磔にされたままの達郎に歩み寄った不知火は、しなやかに鍛え上げられた若者の裸身に指を這わせ、連続射精を強要されて萎えたペニスに指を絡ませると、熟練の指使いで扱き上げた。
生硬い海綿体に巻きついた白い指が、根本から先端までゆっくりと扱き上げ、亀頭を摘んで弄ぶ。
「う……くぅぅ……おっ、おばさん……ッ！」
汗まみれの顔を歪めて呻く達郎の股間で、手コキの技巧を駆使して愛撫されたペニスがぐんぐんそそり勃ってゆく。
「た、たつろぉ……嫌……嫌だよぉ」
悲痛な声を搾り出すゆきかぜであったが、蹴りのダメージで痺れた身体が動かせず、母にペニスを嬲られている恋人の姿を、ただ見つめることしかできない。
「若い子のチ■ポは元気ね。あんなにたくさん射精したのに、もうこんなに硬くなって……」
白い手袋に包まれた指先が、すっかり元気を取り戻した十代のペニスを撫で回し、先走りの露をきらめかせる亀頭を磨き上げるように撫でくすぐって、さらなる充血を強いる。
「くぅぁ、やっ……やめ……あふぅぅぅ！」
敏感な先端のワレメを執拗に擦り上げられたペニスは、達郎の意思を裏切ってビクビクと嬉しげにしゃくり上げ、下腹を打たんばかりに屹立した。
「ほおら、完全勃起。……でも、リーアル様や、お客様方の巨根と比べると見劣りするわね。もっともっと、大きなチ■ポにしてあげる」
指先に付着した少年の愛液をペロリと舐め取った不知火は、達郎の足元にひざまずき、アタッシュケースを開いた。ケース内には、薬液を充填された数本の注射器が整然と並んで収納されている。
「な……何するの？　お母さん、やめて……達郎に酷いことしないでぇ！」
死にかけた虫のように這いつくばったまま、ゆきかぜは母に呼びかける。
「酷いことはしないわ。もっと気持ちよくなれるように、達郎君のチ■ポを改造してあげるのよ」
ケースから取り出した注射器を手に、不知火は艶然と微笑む。
「その注射器に入っているのは、男性向けに開発した新型ナノ寄生体の試作品だ。生殖器の機能を大幅に活性化させ、何度射精しても萎えない超絶倫のチ■ポに変貌させるのだよ」
リーアルが自慢げに解説する。
「そんなの……ダメぇ！　お母さん、達郎にそんなの注射しちゃ、ダメぇぇ！」
悲痛な声を上げるゆきかぜを無視して、裏切った対魔忍は、銀色にきらめく注射針を少年のペニスに近づけてゆく。
「う……く……うぅぅ……」
恐怖と緊張に顔を強ばらせた達郎は、拘束されたままの裸身をわななかせ、勃起に接近してくる針先を食い入るように見つめている。
「そんなに怖がらなくっていいのよ。このお注射で、達郎君のチ■ポ、最高の絶倫巨根になるんだから……少し痛いけれど、ガマンしなさいね」
サディスティックな笑みを浮かべた不知火は、若い血潮をみなぎらせてそそり勃ったペニスの胴部分に、注射針を無造作に突き立てた。
薄い表皮をプツリと貫いた針が、充血した海綿体の中に潜り込む。
「く……うあぁぁぁ……ッ！」
敏感な牡器官に注射針を突き立てられた達郎は、磔にされた身体を強ばらせ、苦悶の声を搾り出して痙攣する。
「あんっ、暴れてはダメよ。針が折れてしまうわ。ほら、どんどん入っていく……」
ビクビクと暴れ狂う勃起を握り締めて固定した熟女対魔忍は、ピストンをゆっくりと押し込んで、ナノ寄生体入りの薬液を注入した。
「一本目……注入完了。二本目は、チ■ポの中に注ぎ込んであげるわ」
空になった注射器を慎重に引き抜いた不知火は、二本目の注射器にカテーテルを取りつけ、プックリと膨れあがった亀頭のワレメに突き挿れた。
「ひぎぃぃぃッ！」
白目を剥いて仰け反った達郎の股間で、細管を尿道に挿入された勃起がビクビクとしゃくり上げ、先走りとも尿失禁ともつかぬ体液が、鈴口から断続的に噴出する。
「あらあら、お漏らしはいけないわよぉ」
幼児にかけるような猫なで声を出しながら、堕ちた対魔忍は、射精経路の奥深くまでカテーテルを送

り込んでゆく。
「前立腺に届いたわね……注入開始。フフッ、もう効いているみたいね……チ■ポが熱くなって脈打ってるわ。今度はこっちよ……」
楽しげな笑みを浮かべた熟女の手によって、左右の睾丸にも、試作型ナノ寄生体が注射された。
「ぐ……うぅ……ひぐ……うぅぅ……」
男の急所に何本もの注射針を突き立てられ、勃起の奥にまで薬液を注入された若者は、悶絶状態で呻くことしかできない。
「ご主人様、注入、完了いたしました……」
注射器をアタッシュケースに戻した不知火は、リーアルに一礼する。
「ご苦労。さて……どのくらいの成長を見せてくれるかな？」
興味深げに少年のペニスを見つめるリーアルたちの前で、魔性の薬液は早くも効果を現した。
ビクッ、ビクンッ、ビクビクンッ！　ぎちっ、ぎしっ、ギシギシギシンッ！
力強くしゃくり上げたペニスは、海綿体の鳴り軋む音を立てながら、急激に長さと体積を増してそそり勃ってゆく。
「うぐわぁぁぁ！　はぁぁぅ！　あ……あはぁぁぁ！　くはあぁぁぁぁ！」
苦悶とも、喜悦ともつかぬ呻きを上げる達郎の股間で、急成長を遂げた性器は、へその窪みを越える威容を見せつけて、再びしゃくり上げた。
「ほぉ、これは思った以上の効果だな。なかなか立派なチ■ポになったではないか」
リーアルが感嘆の声を上げる。
太さも、長さも倍以上に膨張し、赤銅色に充血した男根表面には、太い蔦のような血管が浮き出てドクドクと脈動し、先走りにぬめ光る亀頭は握り拳ほどのサイズにまで肥大して、毒蛇の頭部のような亀頭冠を左右に張り出させている。
剛直の根本に付随する陰嚢も、片手では握り込めぬサイズにまで充実し、有り余る精力を見せつけるかのように重々しく垂れ下がっていた。
「あぁ……あぁぁ……達郎のチ■ポ、あんなに大きく……んぅぅ……ッ！」
恋人のペニスが凶暴な肉凶器に変貌してゆく一部始終を呆然と見つめていたゆきかぜの身体が、言いようのない昂りに打ち震える。
ヴァギナが無意識のうちに卑猥な収縮を繰り返し、口の中にも大量の生唾が湧き出して、健康的に日焼けしたスレンダーボディが、あからさまな発情状態に突入してしまう。
（こんなの、酷いことなのに……身体が……欲情しちゃう。奴隷娼婦だから？　ダメ……ダメなのに……!?）
そそり勃つ巨根に淫情を煽られているのは、ゆきかぜだけではなかった。
「あぁ、なんて立派な……。リーアル様、最初の味見は、私にやらせてくださいませんか？」
巨根化した達郎のペニスをウットリと見つめていた不知火が、色っぽい声で筆下ろしを申し出る。
「やぁぁぁ！　お母さん、お願いだから、達郎を犯さないでぇ！」
母に向かって這い寄ってゆくゆきかぜを、ゾクトが背後から抱き抱えて動きを封じた。
「おおっとぉ！　邪魔はさせないぜ、おめえは、愛する達郎君の目の前で、オレがたーっぷりと嬲ってやるよ！」
「んぁぁぁ！　放せぇ！　やだぁぁ！　やっ、やぁぁぁ～ンッ!!」
幼児の排泄スタイルで抱え上げられて泣き叫ぶ少女の身体が、達郎の傍らまで運ばれた。
「ククククッ、若い恋人同士、互いの痴態を見せ合いながら犯されるのも一興。不知火よ、娘に見せつけながら、達郎君の童貞を奪ってやれ」
心底楽しげな表情で、リーアルが命じる。
「かしこまりました。達郎君、おばさんが、女の身体を教えてあげるわ」
拘束を外され、仰向けに寝かされた達郎に、不知火が騎乗位の体勢でまたがった。
「う……あぁ……ハァハァハァハァ……」
巨根化を強要された少年は、引き締まった裸身を汗まみれにして喘ぐばかりで、なすがままになっている。
「本当に、立派なチ■ポになったわね。最高に気持ちのいい筆下ろしにしてあげる」
淫情に蕩けた声を上げた熟女対魔忍は、忍び装束の胸元と股間をはだけ、過剰勃起した巨根に、熟れきった女陰を押しつけて豊臀をくねらせた。
ぷちゅ……ぬりゅっ……ぬちゅ……ぬちゅ……ぬちゃっ……ぶちゅ、ぬちゅ、くちゅっ……。
既に潤んでいた肉厚な陰唇が、巨根に変貌した少年のペニスをパックリと挟み込み、生々しい蜜鳴りの音を立てて前後に滑る。
「くふぅぅぅ！　うぁ……あぁぁぁ！」
灼熱した男性器を、これまで体験したことのない壮絶な快感に包まれた達郎は、若々しく引き締まった裸身を強ばらせて喘ぐ。
（達郎のチ■ポ……お母さんのオ■ンコに……擦られてる……あんなに濡れて……欲情してる）
母の愛撫に喘ぐ恋人を見守る少女の中に、狂おしい欲情が溜め込まれてゆく。
「んふふっ、ちょっと擦ってあげただけなのに、敏感なのね、達郎君。オナニーなんかよりもずっと気持ちいいでしょう？」
妖艶な笑みを浮かべた不知火は、熱く濡れた切れ長の目で娘の恋人を見下ろしながら、性器同士の睦

み合う速度を増してゆく。
淫らな尻振りのたびに、娘のゆきかぜとは対照的な爆乳が重々しく揺れ弾み、小指の先ほどに勃起した乳頭が天を仰いでそそり勃つ。
「んぁ……はぁぅ！　く……おっ、おばさんっ！　だっ、ダメ……ですっ！　あぁぁ……ッ！」
引きつった声を上げた少年の股間で、巨大化した剛直がビクビクと痙攣し、濃厚な先走りを大量に吐き出して、引き締まった腹筋をぬめらせた。
「ダメじゃないでしょ？　本当は気持ちいいくせに……んはぁ……凄く熱くなってビクビク震えてる。オ■ンコが火傷しちゃいそうよ」
素股快感に呻く少年を見下ろしながら、卑猥な感想を口にした不知火は成熟しきった肢体をくねらせ、肉厚な陰唇で挟み込んだ男根を擦り嬲る。
濡れ肉が擦れ合うヌチュヌチュという淫音が高まり、腹筋の凹凸を浮かばせた少年の腹部を、先走りと愛液の混合液が濡れ光らせた。
「童貞小僧のくせに随分耐えるじゃねえか。さっき、キンタマが空っぽになるまでメス豚どもに吸い尽くされちまったか？　グヘヘッ！」
淫蜜と先汁に濡れ光る勃起から目が離せない少女の耳元で、奴隷商人のだみ声が響く。
「うぁぁ……たつろぉ……おかあさん……」
うわごとのようにつぶやくゆきかぜの身体は、甘い淫臭を放つ汗にしっとりと濡れ光って火照り疼いていた。
（私……すっごい欲情してる……欲しい……達郎のチ■ポ……欲しいよぉ！）
ゾクトの腕の中で、小柄なスレンダーボディが悩ましげにうねり、悶える。
奴隷娼婦の淫蕩な本能だけが、全てを失って空っぽになった少女の心を満たしていた。
「おめえも欲情してきたようだな。よいこらしょっと、おい小僧、こっちを見ろよ。愛するゆきかぜちゃんのオ■ンコ、ご開帳だぜ！」
全身を強ばらせ、勃起が蕩けてしまいそうな魔悦に抗う少年のすぐ側までゆきかぜを運んでしゃがみ込んだ奴隷商人は、汗と淫蜜に湿った少女の大陰唇に指を添えて大きく割り開く。
くちゅ……と、蜜のなる音を立てながら、奴隷娼婦に堕ちた少女対魔忍のヴァギナが、恋人の眼前で開花させられた。
「んやぁぁ！　ひっ、開いちゃやだぁぁぁ！」
急に湧き起こってきた羞恥の感情に泣き叫び、男の腕の中で身を捩るゆきかぜであったが、輪姦と心身両方のショックで体力を使い果たした身体は、恥ずかしい体勢のまま晒し者になってしまう。
「ゆきか……ぜ……」
少女の泣き声に反応して目を閉じようとした若者の顔を、不知火の手が押さえて動きを封じる。
「目を逸らしちゃダメよ、ちゃんと見てあげなさい。ほら、あんなに濡れて、チ■ポを欲しがっていやらしく蠢いているわ」
「う……くうぅぅ……」
蠱惑的な口調で促された達郎は、目の前で割り開かれた恋人の秘裂を、熱く潤んだ目で凝視した。
「ふわぁぁぁ……達郎が……見てるぅ……お願い、見ないでぇ！　私のオ■ンコ、そんなに見つめないでぇぇ！」
全身の血が沸騰してしまいそうな羞恥に震える少女のヴァギナは、恋人の熱い視線に炙られ、浅ましいまでの欲情反応を見せつけてしまう。
くちゅ、くちゅ、ぷちゅ、じゅぷっ……。
はしたない蜜鳴りの音を立てて膣口が収縮し、中出しザーメンの混じった愛液がドロリと溢れ出して、床へと滴り落ちた。
（あぁぁぁ……達郎が見てる……処女じゃなくなっちゃって、いっぱいいっぱいチ■ポ咥え込んじゃった私のオ■ンコ……奥まで見られてる！）
後悔と羞恥の感情を上回る妖しい愉悦が、ヴァギナの奥底からこみ上げてきて、女の愉悦に目覚めさせられた膣粘膜が淫靡に捩れ蠢く。
ちゅく……ちゅく……ちゅくっ……。
鮮やかなピンク色の媚粘膜を寄せ合った膣口が蜜鳴りの音を立ててもの欲しげな開閉を繰り返し、白濁した淫蜜を涎のように滴らせて、熱く猛った牡器官の挿入をねだる。
「んっ……う……くふぅぅンッ！」
生々しい女性器の蠢きを至近距離で見せられ、むせ返りそうな淫臭を嗅いだ達郎の巨根が、淫熱を強めてビクッ、ビクンッ、と打ち震えた。
少年の肉体も、注入されたナノ寄生体によって激しく欲情し、性欲のブレーキが利かない状態になっているのだ。
「フフッ、チ■ポが、また硬くなった……。ゆきかぜ、悦びなさい。達郎君は、あなたのオマンコを見て凄く興奮しているわよ」
卑猥に蠢く秘裂から目が離せなくなっている少年を淫蕩な目で眺めながら、不知火が煽る。
「達郎君も、本当は、ゆきかぜのオ■ンコに挿れたかったのよね？　でも、おばさんのオ■ンコの方が、気持ちいいかもしれないわよ」
「んやぁぁぁん……そんなこと言わないでぇ、もう、もう、やだぁぁぁ～！」
精神的ショックのせいで幼児退行を起こしているゆきかぜは、母に対する牝としての本能的な嫉妬や、ペニスに対する欲情を脳内で処理しきれず、幼子のような声を上げて泣きじゃくることしかできない。
「そろそろ挿れさせてあげる……達郎君の童貞、私が奪ってあげるわ」
ムッチリと肉付きのいい尻を浮かせた母親は、愛

液と先走りに濡れ光る巨根に指を添え、膣口へといざなってゆく。
ちゅぷ……くちゅ……。
まだ幼さの残るゆきかぜの性器と比べると鮮やかな紅色を際立たせた熟女の濡れ穴が、凶暴なサイズに膨れあがった亀頭の先端をパクリ、と咥え込んだ。
「んっ！　くふうぅぅ……だっ、ダメ……ですっ！　はぁぁぁ……ッ！」
先端部をネットリと包み込んでくる熱い粘膜の感触に、達郎は声を震わせる。
「ほおら、どんどん入っていく……達郎君、ゆきかぜちゃん、ちゃんと見ているのよ」
若い二人に挑発的な視線を送りながら、不知火は、若い巨根をゆっくりと膣内に収めてゆく。
「あぁぁ……食べられちゃう……お母さんのオ■ンコに、達郎のチ■ポが……食べられちゃう」
うわごとのように漏らすゆきかぜの眼前で、恋人のペニスが母のヴァギナに挿入された。
「くぁ……ああぁぁ……あふうぅぅ……はぁぁぁうぅう……ッ！」
艶めかしい薄紅色の粘膜穴に、はち切れそうに膨れあがった肉茎が完全に埋没すると、達郎は、あからさまに心地良さげな声を上げ、筋肉質に引き締まった裸身を仰け反らせる。
「あはぁ、大きい……達郎君のチ■ポ、凄く気持ちいいわよ……ゆきかぜ、見てる？」
恍惚の表情を浮かべた熟女対魔忍は、しばらくの間動きを止めて、膣内を満たす巨根の感触を堪能する。
「あぁぁ……あぁぁぁ～」
挿入の一部始終を見守っていたゆきかぜの口から、悲嘆のため息が漏れ、見開かれた目から新たな涙がこぼれ落ちて、褐色に日焼けした頬を伝う。
「何泣いてやがる？　おめえだって、他の男のチ■ポをさんざん咥え込んでアヘアヘ悦んでたじゃねえか」
ゾクトが煽りの声をかけてくるが、今のゆきかぜには反論する気力もない。
「達郎君、奴隷娼婦のオ■ンコ、たっぷり楽しませてあげるわね。……ンッ、動くわよ」
妖艶な美貌を上気させた不知火は、豊満な肢体をうねらせ、童貞喪失したばかりの敏感な巨根を、成熟しきったヴァギナで扱き嬲る。
「んぁ！　くうぅ、しっ、不知火おばさんっ！　あぁ、はぁぁぁ……ッ！」
強烈な快感に襲われた少年は、声を上ずらせ、全身を強ばらせて呻く。
即座に射精してしまってもおかしくないのに、過剰に膨れあがった海綿体組織が射精経路を塞ぎ、出せそうで出せない寸止め絶頂の状態に留め置かれた身体が、喜悦の汗に濡れて痙攣する。
「おばさんのオ■ンコ、気持ちいいでしょう？　ゆきかぜちゃんも、この奥から出てきたのよ。ほら、ここ、子宮口……チ■ポの先に、コリコリ当たってるでしょう？」
乳房を自ら揉みこねながら、奴隷娼婦に堕ちた熟女対魔忍は、卑猥な解説混じりの尻振りで娘の恋人を犯す。
「あぁぁ……お母さん、そんなにいやらしい動き、しちゃダメぇぇ……やめてぇぇ……」
達郎を犯す不知火の腰使いを見せられたゆきかぜは、強烈な嫉妬と欲情に声を震わせる。
（達郎のチ■ポで、お母さんが気持ちよくなってる……やだぁ、やだよぉ……）
奴隷娼婦の訓練で、卑猥な腰使いを徹底的に教え込まれたゆきかぜには、母が味わっているヴァギナ快感が容易に想像できてしまうのだ。
勃起を根本まで咥え込んだまま、時折、前後の揺れを混ぜ込みつつ尻を回す腰使いは、張り詰めた亀頭の先端に子宮口を擦りつけているのだろう。
熱く疼く子宮口を、生硬い亀頭に掻き弾かれる、腹腔の奥に染み通るような狂おしい愉悦を、母は達郎のペニスによって感じているはずだ。
「はぁぁん、いっ、いいわよ。達郎君のチ■ポ、凄く熱くて。硬くて……オ■ンコが蕩けてしまいそう……あっ、ンッ、はっ、あんッ……あふうぅぅうぅう～ンッ」
恍惚に美貌を歪ませ、喜悦の声を上げた不知火は、ムッチリと脂の乗りきった尻を弾ませて、過剰サイズの肉茎を貪欲に扱き上げる。
ストロークのたびに、鮮やかなサーモンピンクの膣粘膜が勃起の胴にまとわりついてヌルリ、と引き出され、沈み込む尻の動きによって再びヴァギナの奥に押し込まれてゆく。
じゅぷっ、じゅぷっ、ぐちゅっ、くちゅるっ……聞いているだけで淫情が沸騰してしまいそうな蜜鳴りの音に、熟女対魔忍の上げる悩ましげな喘ぎが混じり、淫らなハーモニーとなって響き渡る。
「くはぁ……んうぅ……うぅぅッ、はうっ……あ……はふうぅ……くふうぅぅう……ッ！」
不知火の尻が上下に弾み、勃起を扱き立てるたびに、達郎の口からも、あからさまな快感の呻きが漏れていた。
（あぁぁ……達郎のチ■ポも、お母さんのオ■ンコ掻き回しながら、気持ちよくなってる……！）
もはや声も出せなくなったゆきかぜは、瞬きするのも忘れ、眼前で行われている淫辱行為に鼻息も荒く魅入ってしまう。
「んふうぅぅ、んはぁぁぁ……達郎君のチ■ポ、どんどん硬くなってる。亀頭も張り詰めてきたわ。もうすぐ射精するのかしら？」
「くはぁぁぁ、あぁぁ、不知火おばさんッ！　もっ、

もう……あぁぁぁぁぁうぅぅッ！」
対魔忍の組織ばかりか、家族の絆さえも裏切った母親は、巨根化を強いられた娘の恋人を、熟練の技巧で射精へと導いてゆく。
「ハァハァハァハァ……んぁ……あぁぁ、らめぇぇぇ……ンッ……くふうぅぅん……ッ」
母のヴァギナに扱き嬲られる恋人の剛直を、熱く潤んだ目で見据えたまま、ゆきかぜは舌を突き出して喘いでしまう。
淫らな悪夢としか表現しようのない、最低、最悪の光景でありながら、奴隷娼婦として仕込まれた少女は激しく興奮し、秘裂から大量の愛液を滴らせて、極度の発情状態に突入していた。
「いい感じになってきたじゃねえか。それじゃ、こっちもそろそろおっぱじめるとするかな？」
ゆきかぜの身体を押さえつけていたゾクトが、既に勃起させていた太く長いペニスを、少女の秘裂に背後から擦りつけてくる。
「ひゃふうぅぅ！　やっ、やらぁぁ！　やっ、あひ……んあぁぁぁぁンッ！」
淫熱を帯びてジンジンと疼いていた柔肉のワレメを熱い肉塊にズルリ、と擦り上げられたゆきかぜは、スレンダーな肢体をビクンッ！　と仰け反らせて反応してしまう。
「この前は、訓練中で最後までやれなかったからな。今日はオレ様のチ■ポ汁をたーっぷりと注ぎ込んでやるよ！」
生臭い息で少女のうなじをくすぐりながら囁きかけたゾクトは、硬く反り返った肉凶器で秘裂を擦り嬲る。
ぬちゅ、くちゅ、くちゅくちゅくちゅ、じゅぷっ、ぐちゅっ、ぷちゅるっ……。
奴隷商人の巨根が充血した陰唇を割り開き、愛液に濡れまみれた亀頭が勃起クリトリスを逆撫でして、鋭く痺れるような悦波を発生させた。
「んは！　あ……アッ……あんッ……やぁぁぁ……擦るの、やめれぇぇ……ひぃぃ……ンンッ！」
切れ切れの声を上げて反応してしまいながらも、ゆきかぜは、母と達郎の結合部から目が離せない。
（あぁぁ、お母さんのオ■ンコ、いっぱい愛液が出てる……達郎のチ■ポ、ドロドロになっちゃってるよぉ……）
不知火の尻振りに連動して収縮した娘のヴァギナが、ゾクトの勃起にプチュプチュと音を立てて、淫らなキスの雨を降らせる。
「うひょっ！　淫乱オ■ンコが、吸盤みたいにチンポに吸いついてくるぜ。このトロトロに濡れた牝穴の中に、オレのデカチ■ポをブチ込んで欲しいだろう？」
心地良さげな声を上げた奴隷商人は、膣口に亀頭をあてがい、浅瀬を掻き回してくる。
「んぁ、やっ……やぁぁ……あひっ！　ひっ、アッ、あぁぁンッ！　挿れちゃ、ダメぇぇぇ！」
スリムに引き締まった下半身を、ビクッ、ビクンッ、と敏感に跳ねさせてしまいながらも、挿入に抗うゆきかぜ。
（ダメぇ、達郎の目の前で、他の男のチ■ポ挿れられるの、絶対に嫌なのに、オ■ンコが、チ■ポ欲しがってるッ⁉）
ペニスを渇望する奴隷娼婦の本能と、恋人の目の前でこれ以上乱れまいと抗う少女の羞恥心が、男に抱え込まれた小柄な身体の中でせめぎ合う。
「ゆきかぜ、ガマンは身体に毒よ。私たちはもう、奴隷娼婦なんですから、本能に逆らっちゃダメ。オ■ンコの要求に素直に従いなさい」
達郎の上で淫らに尻をくねらせながら、不知火が甘く蠱惑的な声をかけてくる。
「ど……奴隷……娼婦……ンッ……！」
声を引きつらせてつぶやくゆきかぜの脳裏に、これまで演じてきた幾多の痴態が走馬燈のように駆け抜けた。
「そうよ。あなたが淫らになればなるほど、達郎君を幸せにできるのよ」
「たつろぉが、幸せに？」
「ええ。奴隷娼婦の技巧で、あなたも達郎君も気持ちよく、幸せに……一つになりなさい」
艶めかしい響きを帯びた母の声は、少女の鼓膜だけでなく、子宮を甘く震わせて心の内側まで浸透してくる。
「淫らになると……幸せになれる……一つに」
ゆきかぜの中で、ヌラヌラと蠢く淫欲の炎が、理性やモラルの残骸を焼き尽くしてゆく。
「おめえの母ちゃんの言う通りだぜ、今更純情ぶっても無駄ってことさ。ほら、言えよ、何百回も言ってたおねだりのセリフを、言っちまえ！」
抱え上げた少女の身体を小刻みに上下させたゾクトは、毒蛇の頭部のように発達した亀頭を膣口に抜き挿ししながら追い打ちをかける。
じゅぽっ、じゅぽっ、じゅぽっ、じゅぷんっ！
卑猥な音を立てて、少女の入り口が責め立てられ、掻き出された愛液が糸を引いて滴り落ちた。
「あひいいいぃ～ッ⁉」
ぷしいっ！　ぷしゅっ、ぷちゅるっ！
甲高い声を上げ、スレンダーボディを仰け反らせたゆきかぜの股間から熱い愛液のシャワーが噴出して、達郎の顔にまで降りかかる。
「もう……もう……ガマン、できないッ！　チ■ポ欲しいチ■ポ欲しいっ！　達郎、ゴメンね……ほっ……欲しいのぉぉ！　チ■ポォ、チ■ポブチ込まれないと、狂っひゃうぅぅぅ！」
奴隷娼婦の本能に屈した少女の叫びが、ヨミハラの一角に響き渡った。

「誰のチンポをどこにブチ込んで欲しいのか、あのガキにもはっきりわかるように言うんだ！」

調子に乗ったゾクトは、隻眼を淫欲にぎらつかせ、さらなる屈服のセリフを強要する。

「ゾクトのぉ！　ゾクトのチ■ポ、ゾクトのぶっといチ■ポを、オ■ンコにブチこんでぇぇ！」

達郎の視線を感じながら、ゆきかぜは自暴自棄な声を上げ、異様な昂りに全身をわななかせた。

「ヒャハハッ！　言いやがったぜこのメス豚！　おい、ボウズ、オレのデカチ■ポが恋人のオ■ンコにブチ込まれるところをよく見ておけよ、さあ、イクぜぇ！」

ゾクトは、軽々と抱え上げたゆきかぜのヴァギナを、後座位の体位で貫いた。

じゅぷ……ずぷぅぅぅッ！

「くあぁぁぁ～ンッ!!」

達郎の目の前で、悲痛な声を上げて身悶えるゆきかぜのヴァギナをめいっぱい拡張して、浅黒い巨根がめり込んでゆく。

（あぁ、入ってくる……達郎のチ■ポじゃないのに……気持ち……イイイッ！）

根本まで挿入された肉凶器の先端が、子宮を突き上げた瞬間、ズーン、と重い悦波が少女の身体を貫いた。

「はひいぃぃぃ～ンンンンッ!!」

幼児の排泄スタイルで貫かれたスレンダーボディがアクメの痙攣に包まれ、新たな恥液が噴き出して、達郎の顔を汚す。

「おやぁ？　奥までブチ込んだだけでイッちまったか？　だけど、こんなもんじゃねえぞ、どんどんハードにイクぜぇ！」

ゾクトは、抱え込んだ少女の身体を上下させ、腰を突き上げて、本格的なストロークを開始する。

「あひいッ！　イッ、ひっ、ふわぁぁ～ンッ!!」

ゆきかぜは乱れ狂ってしまう自分の肉体を疎ましく思うと同時に、怒濤の勢いで送り込まれる肉悦にのめり込んでしまう。

（達郎に見られてる！　私……ゾクトのチ■ポに……オ■ンコ……ゾリゾリって……子宮、ズンズンされて、達郎の目の前でよがってるッ!?）

奴隷娼婦の技巧を刻み込まれた女陰は、陵辱者の肉柱を包み込み、淫靡にうねりながら締めつけて、最上級の快感でもてなした。

「オッパイはド貧乳だが、オ■ンコはなかなかの上物じゃねえか。この締めつけと、膣壁のダイナミックな動きは、さすがは元対魔忍だぜ、よく鍛えられてやがる」

聞こえよがしに感想を漏らした奴隷商人は、緩急交えた腰使いでゆきかぜのヴァギナを責める。

「んぁ！　アッひっふぁぁぁあ！　あっあっアッやはぁぁぁ～ンッ！」

激しい注挿に連動して、少女の口から悩ましげな喘ぎが絶え間なく紡ぎ出され、甘酸っぱい愛液の媚香がムンムンと匂い立つ。

「どうだい、恋人の目の前で犯されるのも、なかなか乙なもんだろう？」

「嫌あぁ……ゾクトの……ゾクトのチ■ポでオマンコグッチュグチュに掻き回されるの、ダメなのに……きっ、ヒッ！　きもひいぃのぉぉ～！」

男の卑猥な問いにも、条件反射的に答えてしまいながら、少女は肉体に刻み込まれた奴隷娼婦の本能のままに快楽を貪った。

「その調子だ、あのガキに、もっとエロエロなセリフ聞かせてやれよ！」

極上の反応を返してくるヴァギナを突き嬲りながら、ゾクトはさらにけしかける。

「見てぇぇ！　たつろぉ、私がいっぱい淫らになるの、見られるの……きもひいぃのぉ！　もっと見てぇぇ～！」

「ゆき……かぜ……うぁ、あぁぁ、溶けるッ！　オレの……おばさんの中で、溶けてしまうッ！」

「んぁ、あひんっ！　やっ、ひっ、イッ、うあぁぁぁうんっ！　奥ッ、らめぇぇ～ッ！　狂っちゃうッ！　オ■ンコ狂っちゃうぅぅ～！」

ささやかなキスしか交わしたことのなかった恋人たちは、互いが犯される痴態を見せつけ合いながら、快感の底なし沼へと呑み込まれてゆく。

「ゆきかぜ、あんなに悦んで……フフフッ、もう一人前の奴隷娼婦ね。ほらぁ、こっちも見せつけてやりましょう」

ダイナミックな尻振りで若い巨根を嬲りながら、不知火は剥き出しにした爆乳の先端で尖り勃った乳首を自ら摘み、捻り上げ、きつく摘んで扱き立てる。

「んふぅぅぅ……出るッ……出るわぁ！」

感極まった声を上げた熟女の爆乳が、ブルンッ！とひときわ大きく揺れ弾む。

ぷしっ！　ぷしゅぅぅぅぅ～ッ！

指先に摘まれて圧迫された勃起乳頭の先端から、純白の乳汁が噴出して、注挿快感に喘ぐ少年の顔に降り注いだ。

「んぁ……あ、これ……は？」

甘い匂いのする母乳のシャワーを浴びた達郎は、ペニスの快感も一瞬忘れて、搾乳を続けている不知火の痴態を呆然と見上げる。

「凄いでしょう？　リーアル様にお願いして、いつでも母乳が出せるようにしていただいたのよ。ほら、もっと浴びせてあげる」

身体を前のめりにした熟女対魔忍は、たわわな肉果を自らの手で搾り上げ、噴出した乳汁を少年の身体に塗り込んだ。筋肉質に引き締まった裸身は、オイルを塗ったようにヌラヌラと濡れ光り、摘み揉まれた少年の乳首も、痛いほどに尖り勃つ。

囚われのアリシア…
果たして姫騎士と王女は
魔女に打ち勝つことができるのか？
PRINCESS KNIGHT ALICIA
アリシア
淫獄の姫騎士
最終話 爛辱の舞台
小説／NOVEL 斐芝嘉和（いしばよしかず）
挿絵／ILLUSTRATION 桐島サトシ（きりしま）
著者近刊作品
二次元ドリーム文庫
トリプルとらぶる
プリンセス
好評
発売中!!

登場人物紹介

アリシア・リデル

ペルセフォフ近衛騎士団を率いる騎士姫。ラーマの罠により国を追われ、慰み者に堕とされてしまう。

イミス・セフォフ

アリシアを慕う姫。彼女を国から逃がそうとするが囚われ、隣国の男たちにアリシアとともども嬲られることに。

ラーマ

ペルセフォフ王に取り入り、国の乗っ取りを狙う魔女。アリシアに淫術をかけ、その地位を奪う。

前号までのあらすじ

魔王軍の攻勢から王都を守る騎士団長アリシア。だが魔女ラーマの奸計で淫術をかけられたアリシアは、王や部下たちに囚われ犯されてしまう。王女イミスの機転により国を脱する二人。だがなおもラーマの罠により、二人は隣国で家畜のごとく辱められるのだった。

イミス姫の策によって城を抜け出したものの、男たちに裏切られて新たな泥沼にはまり込んでから、十日経ったのか、二十日経ったのか――。

薄暗く獣臭い、畜舎の中だ。

軽装鎧を剥ぎ取られ、火照った乳房を薄闇にしっとり輝かせている女騎士は、土間に敷かれた藁屑の上で犬のような姿勢になっていた。

「ふぅ……は、うぅ……」

足首に巻かれた黒革製の枷は長い棒の両端に繋ぎ止められ、ほどよく引き締まった太腿は肩幅以下には狭められない。首と両の手首は金属製の枷によって左右に一直線に拘束されているから――獣の匂いが染みついた藁屑に頬と乳房を擦りつけるようにしながら、下着まで奪い取られた美尻をうしろへ高く突き上げている。

その背後にはニヤついた男が膝をつき――女騎士の尻穴に武骨な指を挿し込み、ときどき捻りを加えながら、注意深く執拗に抜き差し。

「く、う……うぅ……」

頬を赤らめたアリシアが美しい眉を歪めて小さく呻くが、それは苦悶や憤慨ではない。

（し、尻が……ああ、熱い、溶ける……！）

じわじわと水位を増す肛悦に酔い痴れて、理性や羞恥を失いかけているのだ。

そして――。

「も……もう、らめぇえっ！」

尻穴を穿られている女騎士の傍で、舌っ足らずな甘え声で鳴くイミス姫。

絹のドレスを無惨に引き裂かれ、白く華奢な裸体をほとんど露わにした幼姫は、アリシアと同じような姿勢で小振りな美尻を突き上げながら、頬をくすぐる藁屑に大粒の涙をこぼしつつ、薄い背を狂ったようにくねらせていた。

「うるさい姫さんだな。なにがダメなんだ？」

「お、お……お尻ぃいっ！　イミスの尻マ■コ、らめなの、らめなの、らめなのぉおっ！」

「なに言ってるんだ？　ああ？　今日はまだ弄ってないだろう？」

「ら、らから……らから、らめなのぉおっ！　あ、あ、アリシア様ばかり……狡いッ！　イミスにも、して……し、し、尻マ■コ……してぇえっ！」

駄々っ子のように泣きじゃくる幼姫は、うしろへ突き上げた小振りな尻を上下左右に打ち振った。

震えるほど緊張した瑞々しい太腿の付け根、マシュマロのようにプニプニとした肉畝が、艶めかしい桜色に火照っている。ほとんど波打っていない幼気な淫唇が、こらえがたい肉欲を溜めて厚みを増し、内側から割れ目を押し開いて、紅く潤んだ縁をほんの少しだけ覗かせている。

「ったく、姫さんはワガママだな。騎士様をイかせたあとに弄ってやるから、ちょっと我慢してろ」

苦笑した男が言うと、姫はますます哀しげな顔になり、さらに多くの涙をこぼした。

「や、や……やなのぉおっ！　尻マ■コして！　して……してよぉおっ！」

昼夜の感覚すら曖昧になるほど絶え間なく、散々犯しまくられたイミス姫は、あどけない外見のまま浅ましい淫獣に堕ち果てていた。肛悦を教え込まれた尻穴は膣以上の淫穴と化し、四六時中なにかを挿し込んでいないと哀しくなってしまうのだ。

（ああ、姫……済みません……）

淫らなおねだりをする■姫に胸中で謝るアリシアも、声こそ立てていないが実情は大差なかった。

男の指に穿られている尻穴が心地よく、甘やかな痺れが蟻の門渡りを伝って秘裂にまで流れ込んでくる。瑞々しい肉畝は艶やかな桃色に火照り、厚みを増した淫唇が割れ目を押し退けて――波打つ襞の真っ赤な縁が、ねっとりとした牝蜜を滲ませながらヒクンヒクンと蠢いている。排泄孔を弄っている硬い指先がほんの少しだけ矛先を変え、淫華を弄り始めたなら――姫に負けじと声を張り上げ、騎士としてのプライドも使命感もたちまち忘れて、サカリのついた牝猫のように叫んでしまうだろう――と。

「畜生めっ！　だれも信じてくれやしねぇ！」

悪態を吐きながら破落戸のひとりが戻ってきた。媚笑を浮かべたイミス姫がいっそう激しく尻を振ると、そのうしろに回り込み――。

「ケツ振るんじゃねえ、バカ姫！」

「はぅンッ!?」

瑞々しく小振りな美尻を平手で打つ。

「おいおい、大事な商品だぞ」

「ふん、構うもんか！　買い手がつかねぇんだから、商品じゃねぇよ！」

――運よく入手した血統書つきの姫と姫騎士を性奴隷として売り飛ばすつもりだったのだが、どうやら躾けすぎたらしい。ペルセフォフ王国の内情を知っている者たちですら、あまりにも淫らなイミス姫とアリシアの姿に眉を顰め、姫であるはずがない、騎士であるはずがない、と商談に応じないのだ。

「しょうがねぇなあ。肩書きを外して、単なる便女

として売るか」
「……まあ、無料で手に入れたモンだしな。どんだけ安値で売っても、損はしねぇが……」
なおも不満そうにぼやいていた男が、ふと、目の前で揺れる姫の美尻に視線を落とした。
「おうおう、どうした？　そんなにケツ振って。またおあずけ喰らってんのか？　オ■ンコからいやらしい涎が垂れまくりじゃねぇか」
叱られても打たれても必死に媚笑し、懸命に尻を振りまくっている幼気な美姫に、たちまち相好を崩して猫撫で声を発する。
「してぇ……お願い、してぇ……イミスの尻マ■コ、ウズウズ、してるのぉ……太いの、挿入れて……グポグポ、してぇっ！」
「しょうがねぇ姫さんだ。そら、挿入てやるよ」
「ふ……あ、あぁあっ！」
猛々しく怒張した淫棒に排泄器官を貫かれ、恍惚の鳴き声を上げるイミス姫。
（ひ、姫……な、なりません、いけません……そ、そんなに気持ちよさそうな、お顔……）
見守るアリシアの胸が強く強く締めつけられ、秘裂が燃えるように熱くなる。火照る乳房の尖端では肛悦に喘ぐイミス姫に共感したのか、赤みを増した乳首がたちまち勃起。土間に敷き詰められた藁屑に潜り、擦れて、淡い快感を発し始める。
「く……ふぅうっ！　やっぱ姫さんのケツの穴は最高だな！　よく締まるし、熱いし、ヌルヌルしてるし……お？　さっそくしゃぶり始めたぞ。そうか、そんなに俺のチ■ポが好きか？」
「しゅ……しゅきぃいっ！　太いの、硬いの……気持ちイイのぉおおっ！　ふっ⁉　あ、ああ……！」
法悦の涙をこぼしてあられもなく鳴き叫ぶイミス姫の薄い背に、獣のように笑う男が覆い被さった。
角度を変えた淫棒が、姫の尻穴を抉る。ゴツゴツした裏筋で直腸粘膜をしごき、揉み――滾る亀頭が結腸孔まで達して、幼い子宮を薄い肉膜越しに、力強く突き揺する。
「ふあ、あ、あぅう……堕ちる、飛ぶ……ふわふわ、しちゃうぅうっ！　らっこして、お願い、らっこ、らっこぉおっ！」
「分かってるって。これが好きなんだろう？」
「あ……ぁあンッ⁉」
背後に覆い被さった男のたくましい腕が、肛悦に悶え泣く幼姫の薄い胸を抱き締め、力任せに引き起こした。鋼のように硬い淫棒に深々と抉られた小振りな美尻が、胡座を掻いた男の太腿に落ちて――。
「ンぇあ……あ、あああ……」
さらに深く、さらにしっかりと貫かれて、白い喉を反らしながらビクン、ビクン、と痙攣する姫。
首の左右に拘束されている硝子細工のように華奢な手指が、感極まってキュウッと握り込まれた。長い棒によって大きく左右に開かれているほっそりとした脚は――いまだ藁屑に横顔を埋めて桃尻をうしろへ突き上げているアリシアに見せびらかすように、妖艶なM字開脚に。
（あ……あぁ……なんたる、こと……あんなにも無垢だった姫様の、あ、あ、アソコ、が……）
すっかり発情して、指を添えられているわけでもないのにぱっくりと開き、若々しく紅い粘膜花弁を艶やかに広げていた。小さな小さなクリトリスも弾けんばかりに勃起、襞の少ない淫唇は甘酸っぱい蜜に濡れて、喘ぐようにヒクついている。
さらに――こぽ、こぽっ！
尻穴を犯す淫棒に押し潰された膣洞から、細かく泡立った愛液が大きな塊となって噴き出してきた。
「ンぇあ、あぇ、あぅぁあ……ッ！」
太い腕に背後から抱かれて上下に跳ねる幼姫が、舌を縺れさせながら甘やかな声で鳴き悶える。
薄い胸に這う武骨な指が、申し訳程度に膨らんだ乳房を揉み込み、桃色に輝く可憐な乳首を軽く抓んでキュッ、キュッ、と抓れば――。
「はぅっ⁉　あひ……あぇぁあっ！」
涙と鼻水、涎を垂らしながら、絶頂へ向けて一気に舞い上がっていく。
（い、いけません、姫……そ、そんなに気持ちよさそうなお顔をされたら、そんなに気持ちよさそうなお声で鳴かれ、たら……わ、私まで、我慢……できなくなって、しまい、ま……すぅッ！）
肛悦に悶え泣くイミス姫に共感してしまったアリシアの身体が、背後の牡を誘って細い腰をくねらせる。快感を知る尻穴がキュウッと窄み、深々と挿し込まれている指に巻きつき、締めつけて――焼きつきそうなほど焦れている秘裂からねっとり香る愛液が、光る糸を引きつつ滴り落ちてしまう。
「どうした、騎士さん？　姫様が羨ましいのか？」
「ち、ちが……うぅ……」
「嘘を吐いても意味ねぇぞ。尻がこんなに揺れてるんだからな」
「はぅンッ⁉」
平手で力いっぱい打たれた美尻が、まるでさらなる打擲を求めるように震えながら跳ね上がった。輝くほどに白い尻肌に紅い手形がうっすらと浮き――そのぴりぴりとした表面的な痛みが、むっちりとした尻肉を伝うに連れて温かな悦びに変わる。
淡く微かな、倒錯した肉悦ではあるが――執拗に弄り回され、延々と焦らし続けられていた尻穴には、それだけでももう十二分な呼び水だった。
「うぅ、くぅ……うぅうっ！」
耳の先まで真っ赤になったアリシアは藁屑に頬を擦りつけ、火照る乳房を押しつけながら、疼く肛門が仰向くほどに高く高く桃尻を掲げる。
「い……れ、て……」

著者近況　金環日食、見えませんでした（泣）。雲の隙間から見えたところも結構あるらしいのに……。6月6日の金星の日面通過は見えるといいなあ……。

羞恥に掠れた声を絞り出し、限界を超えた淫欲に急かされるまま――クイックイッと腰を捻る。
「あ？　なんか言ったか？　聞こえんぞ？」
「い、い……挿入れて！　お願い、挿入れてぇえっ！」
わずかに残っていたプライドをかなぐり捨て、涙声で哀願する女騎士。
太く硬くたくましいペニスを求め、入り口から奥の奥まで尻穴が疼く。すっかり調教された括約筋が勝手に弛み、赤暗い肉穴をぽっかりと広げ――その奥には涎のような腸液をじゅわ、じゅわ、と滲ませた滑らかな排泄粘膜が、見えない男根をしゃぶっているように妖しく淫らに蠕動する。
「おいおい、浅ましい牝豚のクセに、俺に命令するのか？　そんな態度じゃあ……」
「挿入れてください、お願いしますッ！　ぶひぶひ、ぶひ、ぶひぃいいっ！」
みなまで言わせず哀願し、さらには豚真似までして、アリシアは必死に尻を振りまくった。
（く、うぅ……こんな卑劣な男たちの前で、こんなに浅ましい真似を……ああでも、でも……！）
もう耐えられない。
もう我慢できない。
早く、早く挿入れてもらわなければ――奥の奥まで突き込んでもらい、滅茶苦茶になるほど強く激しく抉ってもらわなければ――排泄器官に燃え盛る狂おしいほどのもどかしさのせいで、きっとおかしくなってしまうだろう。
「ハハッ！　ずいぶん賢いじゃないか。そうだ、お前は豚だ。どの穴にチ■コを突っ込まれても感じまくってしまう、浅ましい牝豚だ！」
嬉しそうに言いきった男が、おもむろにペニスを振り立てた。雄々しくエラを張り出した、太さよりも長さが目立つ、黒光りする男根だ。
その、燃えるように紅い亀頭が――。
「うッ!?　あ、ああ……」
アリシアの尻穴に触れ、綿のように柔らかな括約筋を易々と押し拡げて、腸液にぬめる排泄器官へゆっくりゆっくり潜り込んでいく。
「ふ、太い、硬い……あ、あ……熱、いぃ！」
徐々に胎内に存在感を増す、ゴツゴツとした重さ。
弾けんばかりに怒張した牡肉が奥へ、奥へ、と進むにつれ、薄い粘膜隔壁越しに膣洞が押し潰されて――熱い牝蜜を滲ませた細かな襞がぬちゅ、くちゅ、と擦れ合い、下腹に快感の火花が閃き始める。
「こら！　お前は牝豚だろ？　人語を喋るな！」
「あ……ぶ、ぶひっ！　ぶひ、ぶひぶひぃ！」
長い間おあずけされ、すぐ目の前でイミス姫に先を越されてしまったアリシアは、もはや男の言いなりだった。
肛悦に蕩けた頬を藁屑に擦りつけながら、ぶひ、ぶひ、と浅ましい豚の鳴き真似を繰り返す。大きな手に掴まれた腰をくねらせ、硬い男根に押し拡げられている直腸粘膜をしきりに蠢かせて、
「ふぁ……ぶ、ぶひぃい……ぁあっ!?　お尻が、蕩けて……ぶひぃ、ぶひぃいっ！」
淫らな獣に堕ちていく。
あとは、もう――。
「あ、あ……ありしあ、しゃまぁあっ！　いみしゅは、いみしゅは……もう、もう……もぉおッ！」
「わ……わたしもれしゅ、ひ、ひ……姫ぇえっ！　し、しりあにゃが、しりま■こが、ぁあっ！」
徐々に激しくなる突き込みに合わせ、蕩けた鳴き声を波打たせながら、競うように悶え、喘ぎ、恍惚の頂へ登り詰めていく姫と女騎士。
「あ、あ、あヒィいいいっ！　おしり、とけりゅ、とけちゃうとけちゃう、ああ、ああ……にゃひぃいい――ッ！」
「わ、わたしも……わたしもいっしょ、にぃ……ひめ、ひめ、ひめしゃまぁあ――――ッ！」
ほとんど同時に果て、反り返って――。
――ぷしゅっ！　ぴゅるるっ！
ぷっしゃぁあぁ――――ッ！
感極まって鋭く絞れたそれぞれの膣穴から、勢いよく噴出する本気汁。
藁屑の上に蹲っているアリシアの蜜は、ハの字に開いた己の太腿を濡らし、膝の間に降り注いだだけだったが――胡座を掻いた男の太腿に腰掛け、薄い胸をしっかり抱き締められている幼姫のそれは、恍惚に蕩けた女騎士の顔に髪に降り注ぎ、ねっとりと粘ついて、
「あ、あ、あああぁ……」
咽ぶほどに濃厚な甘酸っぱい香が、牝豚にまで堕ちたアリシアに新たな悦びを産みつけた。

＊　＊　＊

さらに数日が過ぎて――。
「ったく！　私は殺せと言ったはずよ？　どうして騎士様まで生きていらっしゃるのかしら？」
「う、あ……ら、ラーマ……」
憎き魔女の声を聞き、アリシアは気怠い恍惚の深みからノロノロと浮かび上がった。
――尻穴が、熱い。
ジンジン痺れて蕩けている。
つい先ほどまで、鋼のように強張った淫棒を激しく突き込まれていたのだ。
膣穴が奥までじんわり温かいのは、たくましい男根を入れ替わり立ち替わりねじ込まれ、何度も何度もイかされた証。うしろへ差し出された桃尻を覗き込めば、桜色に火照る割れ目が絶頂の余韻にいやらしく蕩け、パックリと口を開いて――ヒクン、ヒクン、と震える淫唇の縁から白濁液のつららを垂らしているのが見える。

著者近刊　『仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 1～3』『学園戦姫 巴　淫辱の下剋上』『魔戦姫 紗夜　淫辱の闘宴』『新・呪い屋零3　淫夢迷宮』『特捜姫兵アルテミス 2 黒翼のマリア』『トリプルとらぶるプリンセス』『暴れん坊メイドは甘えん坊』『うらはらツインズ』『ゆにゆに　ボクとお嬢様のぶらいべ～とれっすん』　好評発売中！

口が苦く、息が青臭い。
尻穴や膣だけでなく、口も喉も犯されて、濃厚な精液を腹が膨れるほど呑まされた――なのに悔しさも怒りも湧かず、あるのはただただ温かな蜂蜜の渦に引き込まれていくような、甘くドロリとした肉悦の記憶――。
だから、
（どこだっ⁉　どこにいる、ラーマ……！）
不意に甦った闘志もどこか鈍く、黒髪の魔女に対する怒りを懸命に掻き立てていなければフッと忘れてしまいそうだ。
気は急くのに、淫悦に疲れ果てた身体は鉛のように重く、ノロノロとしか動かない。薄闇の底、藁屑の上に両手両脚をついて、剥き出しの尻を左右に振りつつ無器用に這い回る半裸の美女。
「いやあの、こ、これは……ひ、姫様に、どうしてもとせがまれまして……」
「でも見てください、ラーマ様。あんなに生意気だったアリシア様も、いまではすっかり牝犬……いやもう、むしろ牝豚なんですよ」
必死に弁解しているのは、イミス姫を裏切った馬番たちだろうか？
声のするほうに目を向けてみるが、どうにも焦点が合わなかった。せっかく取り戻した闘志も、騎士としての誇りや使命感も――尻穴や秘裂の疼きに少しずつ削り取られ、もう消えかけている。火照る乳房のもどかしさに眩惑されて、立ち上がる気力さえ消えてしまいそうだ――と。
「さて、どうかしらね」
「――あぅっ⁉」
「ッ⁉　ひ、姫ッ⁉」
どこかから聞こえたイミス姫の短い悲鳴に弾かれ、跳ね起きるアリシア。
ぼやけていた視界が、いきなり明瞭になった。
薄暗い畜舎の中――顔を巡らせるまでもなく真正面に、冷ややかに微笑む黒髪の魔女。
その手はイミス姫の細いうなじを掴み、仔猫のように吊り上げている。
「き、貴様ぁ……ッ！」
消えかけていた怒りが焦点を得て、頭の中に立ちこめていた桃色の靄がたちまち晴れた。
手枷足枷などものともせず、牝豹のようにしなやかに跳ねて――。
しかし、気力で補える体力など、たかが知れている。ラーマに体当たりしようとしたのだがあっさりと身をかわされ、
「あぁ……ッ！」
藁屑の上に、不様に転げてしまった。
「なにが牝豚よ。まだまだ元気じゃない」
「い、いや、これは……見てください、ほら！」
焦った男たちが床にもがいている女騎士に飛びつき、両の足首を左右に押し拡げている棒を掴んで力任せに引っ張り上げた。
「くっ⁉　や、やめ……ろぉっ！」
必死に抗うアリシアだが、疲労の極みにある身体は思い通りに動かせず、呆気ないほど簡単にマングリ返しにされてしまう。
（な……なんたる、恥辱ッ！）
姫を助けなければならないのに、魔女を討たねばならぬのに――。
「ほら、こんなにグチョグチョなんですよぉ」
「尻穴だって、ユルユルなんで」
卑しい男たちにいいように扱われ、あられもなく晒されてしまう恥ずかしい場所。
「ふぅん？　まあ、確かにオ■ンコは熟れているみたいね……」
首を伸ばしたラーマにまじまじと見つめられれば、恥ずかしさと怒りが倍加する。
（く、そぉ……ッ！）
羞じらう女騎士の自覚以上に、そこは淫らに熟しきっていた。
甘酸っぱい牝蜜に濡れた淫唇はぽってりと厚く、波打つ縁を広げて左右の肉畝を内側から押し開いている。以前は米粒大だったクリトリスは茹だった小豆ほどの大きさに膨れ――薄闇の中、紅真珠のように、艶めかしいピンク色に輝いている。
それだけでも十二分に淫靡なのだが――肉畝や淫唇に愛液以上にねっとりと絡みついた大量の白濁液が、陵辱の激しさを物語り、アリシアの堕ち具合を仄めかせていた。
「問題は見た目ではなく、感度だけれど……」
「あ……さ、触る、なぁあっ！」
淫悦の余韻が熾火のように燻っている肉畝に、黒髪の魔女の細指がツツッと滑る。
途端、秘裂に湧き起こる淡い細波。
新たな快感を予感した淫唇に甘酸っぱい蜜が滲み、男根のたくましい硬さを欲した膣穴が鋭く絞れて、奥に残っていた精液がコポ、コポと溢れ出す。
さらに――。
「あはっ⁉　やだ、なにこれ！　オ■ンコを弄ってるだけなのに、ウ■チの穴まで開いちゃったわ！」
「……ッ！」
呆れ混じりの嘲笑を浴びて、騎士としてのプライドを深く深く斬り裂かれた。
だが、事実だ。
入れ替わり立ち替わり、夜も昼もなくたくさんの男たちに犯しまくられ、すっかり淫穴と化してしまった排泄孔は、秘裂の悦びに反応して勝手に弛んでしまう。覗き込む視線を誘うように菊蕾が解け、開き――腸液に濡れ光る滑らかな直腸粘膜を、恥ずかしげもなく晒してしまう。
と、そこへ――。

「あ……アリシア、様ぁ……」
「ッ!? い、いけません、姫……ふぁ、あッ!?」
女騎士の割れ目から立ち上る濃密な牝香に誘われたのか、イミス姫が四つん這いになり、蕩けた顔を近づけてきた。
(しっかりしてください、姫ッ! 敵が――ラーマが、目の前にいるのですよ!)
叫びたいのに、声は出せない。
アリシアと同じくらい――いや、もっと淫らに調教された■姫が、マングリ返しにされて仰向いた女騎士の顔を跨いでいるからだ。
外見こそまだ■気だが、マシュマロのようにプニプニとした肉畝は桜色に火照り、その内側から紅い肉襞が恥ずかしそうに顔を覗かせている。肉悦を溜めて健気に痼り勃ったクリトリスは薄い包皮を押し退け、肉色の宝石のように艶やかに輝いている。
(世界中のだれよりも清らかだったイミス姫の、恥ずかしい、場所が……こんなにもいやらしく、こんなにも蜜を滲ませ、て……)
アリシアの鼻息がかかるたび、弾けんばかりに勃起した淫核や真っ赤な淫唇の縁がひくん、ひくん、と蠢くのだから――声など出してより強く刺激したら、■気な姫はたちまち果ててしまうだろう。
「あらあら。前より仲良しになったのかしら?」
意地悪く微笑んだラーマが長い黒髪を揺らしながら首を傾け、姫の顔を覗き込んだが、答えはない。
■気な頬を桜色に火照らせ、円らな瞳を熱っぽく潤ませて――ただただ、女騎士の淫らな割れ目を、妖しく微笑みながら見つめるだけ。
アリシアよりも深く深く淫悦に溺れ、まともな思考力など欠片も残っていないようだ。円らな瞳を潤ませながら女騎士の秘処に鼻を近づけ、スンスン、スンスン、と犬のように匂いを嗅ぐ。
「あ……や、やめてください、姫……ッ!」

天井に向けて突き上げた格好の桃尻を右へ左へくねらせ、羞恥に掠れた声で叫ぶアリシア。
しかし――。
「素敵……アリシア様の、匂い……こんなにたくさん、殿方の汁を注がれて……」
女騎士の秘裂に粘つく白濁液の、咽ぶほど濃密な精臭に、すっかり酔ってしまったようだ。
うっとりと微笑んだイミス姫が薔薇の花びらのような朱唇を開き、紅くプリプリとした舌を伸ばして――れちょっ! ぴちょっ!
「はぅっ!? あ、ぅうっ!?」
仰向いた秘裂をクンニされた女騎士が、逆さに撓められた身体を跳ねさせ、鼻にかかった甘え声で小さく呻く。
途端、
「ぁンッ!? あ、うぅ……イミスのオ■ンコに、あ、アリシア様の、熱い息が……ッ!」
女騎士の顔を跨いだ幼姫がビクビクッと反り返り、蕩けた笑みをいっそう深める。
「お願いします、アリシア様……イミスも、イミスにも……気持ちイイこと、して、くだ、さい……」
「むぷ……ッ!? ン、ンむぅ……ッ!」
昂った■姫の熱い秘裂に口や鼻を塞がれて、苦しそうに呻くアリシア。
密着度が増しているから、喘ぐ唇や吐く息が、顔を跨いだ姫を直接悦ばせてしまう。形良い鼻の先が可憐な肛門に触れ、離れ、触れ――息を継ごうとして首を捻れば、淫熱を溜めてぽってりと厚みを増した下唇が姫のクリトリスを悦ばせてしまう。
「はぅ、あ……うぅっ! そ、そこです、そこ……あ、ぁあンッ! あ、アリシア様の、息……熱くて、気持ちよくて……イミスは、イミスは――」
頬を赤らめ、淫らな微笑みをさらに深めた姫が、
――ちゅっ! むちゅっ!

女騎士の割れ目に柔らかな唇を押しつけ、快感のお礼とばかりに強く強く吸いついた。持てる限りの口技舌技を駆使し、水飴のようにねっとりとした濃い愛蜜を美味しそうに舐めまくる。
女騎士の粘膜花弁にたっぷりと粘着している白濁液を、厭う様子は微塵もない。
むしろ、ザラザラした舌触りや鼻腔に絡みつく強烈な青臭さを悦び、一舐めするたび、一啜りするたび、淫らな微笑みを深めていく。
「ふぁっ!? う、ぁあ……な、なりません、姫……姫、姫ぇ……ッ!」
憎らしい魔女の目の前で、身を捨ててでも守らなければならない■姫に、いやらしく熟してしまった割れ目を辱められるとは――。
騎士としてのプライドを軋ませ、沸騰する羞恥に内側から焼き焙られて、逆さに撓められた身体を必死に悶えさせるアリシア。
「なるほどねえ……騎士様はまだ堕ちきっていないけど、姫様はちゃんと仕上がっているわね」
どこかからラーマの声が聞こえてくる。
が、当の女騎士はもう、それどころではなかった。
(か……感じる、感じて、しまうぅ……!)
イミス姫の柔らかな唇を押し当てられ、奥に溜まった精液をじゅるる、じゅるる、と吸い出されている膣穴が、燃え出しそうなくらい熱い。細かなヒダヒダが狂おしい淫欲を溜めて、焼きつきそうなほど焦れてしまう。
男根の硬さを欲しているのは、膣だけではない。
(尻穴が……し、尻マ■コが……挿入れて……挿入れて挿入れてッ! 奥まで突いて、滅茶苦茶にしてっ! でないと私、私……おかしく、な、るぅッ!)
わずかに残っていた理性の欠片が、熱せられたバターのように跡形もなく蕩けていく。口を塞ぐ熱いヌルヌルが気持ちよく、鼻腔をくすぐる瑞々しい牝

香に酔ってしまい――いつの間にかアリシアは自ら唇を押しつけ、姫のあどけない秘裂をじゅちゅ！ じゅちゅ！ と吸いまくっていた。
「あっ!? は、うぅ……ッ！ イイれしゅ、イイれしゅ……あ、アリシア、様ぁああっ！」
桃色の乳首が輝く薄い胸をしなやかに反らして、感極まったイミス姫が舌っ足らずな声で叫ぶ。
だがその声は、もはや女騎士の耳には届かない。
（挿入れて、お願い……早く挿入れてッ！）
姫の悲鳴に反応して一時は騎士としての自覚を取り戻したのだが、その若い牝の身体は、本人が思っていた以上に堕落していたのだ。
（オ■ンコでも、尻マ■コでもいいから……口マ■コだってするから……お願い、挿入れて……挿入れて挿入れて、挿入れてぇえっ！）
憎むべき黒髪の魔女の存在どころか、自分が舐めている相手の性別も分からないほど快感に酔い痴れ、■気な淫唇に滲む愛液を必死になって舐めまくる。
「ンぁ、ン……ちゅ……こ、ココを、お願い……ンぁ、ンちゅっ！ あ、穴を……中を舐めて、舐めて……あ、あぁそこ、そこ、そこぉおっ！」
「にゃふっ!? あ、うぅっ！ こ、ココれしゅ、ココ、ココ……ンちゅっ！ ぷはぁ……イイれしゅ、しゅごくイイれしゅうっ！」
悦びの声を交わしつつ互いの秘裂を夢中で舐め合う■姫と女騎士。
「――ふん、いいわ。二匹とも引き取るわ」
苦笑混じりに見下ろしていたラーマが、腕組みを解いて満足そうに肯いた。予定は狂ってしまったが、むしろこのほうがよかったかもしれない。二匹いれば保険になるし、アリシアほど丈夫なら使い道も増える――。
問題は、女騎士の中に残っているわずかな理性の欠片だが――イミス姫を使えばなんとかなるだろうと、ラーマは密かに目算した。

＊　＊　＊

「これは……酷い……」
久々に目にした王都の、あまりにも無惨な状況に、胸を痛めるアリシア。
王城の尖塔、見張り台のような広間から四方を見わたせば――魔王軍の侵攻にも傷つけられなかった町並が、半分くらい焼け落ちている。外郭があちこちで寸断されているのは、大規模魔法が使用された痕跡だ。
「貴女たちが城からいなくなった直後に叛乱が起きたのよ。姫を失った王様が逆上して、司法大臣を公開処刑してしまったのがまずかったわねえ」
呆然としているアリシアの背後で、安楽椅子に腰掛けたラーマが苦笑混じりに、他人事のような口調で言う。組んで伸ばした脚の先には絹のドレスを纏ったイミス姫が仔犬のようにおすわりして――うっとり目を細めながら魔女のブーツを舐めている。
「身の危険を覚えたほかの大臣たちが結束し、王様を闇討ちしたまではよかったんだけど……」
父が殺されたと聞いても、幼姫の表情は変わらない。いや、そもそも聞こえていないのか――。
一ヵ月もの間、ほとんど休む間もなく陵辱され続けていたあどけない姫は、いまやすっかり淫悦の虜だ。ラーマの魔法がもたらす恍惚に耽溺し、王族としての誇りを完全に忘れ――愛玩動物として扱われることに無上の喜びを覚えているらしい。
そんな姫を見たくないアリシアは、魔女の声にも振り向かず、変わり果てた王都を見続けた。
――いや、淫らに堕ちた姫を見たくないというのは、己の自尊心を守るための卑怯な言い訳だ。
本当は、共感してしまうのが恥ずかしいから――。
白銀の鎧を纏い、外見こそ凛々しい女騎士に戻っているが、その肉体はもはや、以前のアリシアとはまったくの別物になっていた。
身体の芯に四六時中、淫らな欲望が疼いている。肌は愛撫を求め、粘膜は硬い男根を欲し――黒い薄布の下で淫らに潤み、はしたなく火照る秘裂。こらえがたいもどかしさを溜め、白銀の鎧の下で疼く形良い乳房。勃起した乳首が胸部装甲の内張にめり込み、息を吸うたびに淡い快感が閃いては消える。唇や舌、喉までが、太く熱くどっしりとした淫棒を懐かしんで落ち着かない。
こんな状態で、魔女に奉仕しているイミス姫を見てしまえば――きっとアリシアも膝をつき、ラーマの寵愛を得るべく必死に媚を売ってしまうだろう。
だから、振り向けない。
（何人死んだ？ 私の部下は……クルツたちは、どこでなにをしている？）
身体のあちこちに疼く淫欲を必死に無視し、痛ましい王都の姿に意識を集中して、闘志を掻き立てようとするアリシア。
その背に向けて、
「逆賊を討つという名目で近衛兵団が暴走し、各大臣を襲って奥さんや娘さんを掠奪。さらには市民にまで手を出し始めたから、王都内部で大混乱よ。便宜上、市民側を暴徒って呼ぶけど、実情はまったくの逆よねえ」
ラーマの気怠げな声が続く。
「そんなところへ魔王軍追撃隊が戻ってきたものだから、ただの暴徒だった市民がそれなりに組織化された叛乱軍に化けて、ごらんのありさまってわけ。王様を誑かし、この王国を無傷のまま手に入れるっていう私の計画は、もう完全に頓挫しちゃったわ」
「……ならば、さっさと消えろ」
背を向けたまま声を絞り出すアリシアに、魔女は耳障りな笑い声を立てた。
「嫌よ。本当に面白いのはこれからなんだから」

「な……なんだとっ⁉」
「追撃隊の大将に人望がなかったのか、いまのところ叛乱軍の規律は緩い。私の魔物も加えた近衛兵団の十倍もいるのに、この膠着状態を維持するのが手一杯。ただ、向こうに諸侯軍がついたらもうダメね。数に頭脳が加わるから、私たちの勝ち目はなくなってしまう。だからその前に叛乱軍を手懐けて、城の守りを固めておきたいの」
「……なぜ、そんなことを？　貴様が欲していた王国は、もはや存在しないのだぞっ⁉」
思わず振り返ったアリシアは――魔女に背を向ける形でその太腿に跨がり、細い腰をしきりに揺らしているイミス姫に気づいて慌てて目を背けた。
魔法で生やした淫棒か、それともディルドだろうか――とにかく、太くて硬い物を尻穴か膣穴にねじ込まれているのだろう。
■気な頬は淫らに蕩け、薔薇の花びらのような唇は艶やかに開き、妖しくわなないて――あ、あ、と小さな鳴き声をこぼしている。潤んだ瞳はアリシアのほうを向いてはいるが、すっかり焦点を失い、ゆらゆらと揺れて――たぶんなにも映っていない。
「なぜって？　決まってるじゃない。この可愛い王女さまを玉座につけたいからよ」
くねる背のうしろから薄い胸に手を回した魔女が、絹地のドレス越しに可憐な乳首を軽く抓った。
「や……ぁうンッ⁉」
裏返った声を上げ、淫悦に輝く頬をはね上げて、ビクンビクンと痙攣するイミス姫。
「土地、金、人、権力――古来より、王は臣下にさまざまな物を与えることで忠誠を誓わせてきたけど、己の身を差し出すことで対価とする王様は、たぶんこの姫様が最初になるわね」
「き、貴様ぁ……ッ！」
「よく働いた者には御褒美として、そのオ■ン■ンをしゃぶったり、お尻の穴に受け容れたり――」
「無理だッ！　姫はそれほど丈夫ではない、そんなことをしていたらすぐに壊れてしまわれる……」
「だ・か・ら」
細指を一本立て、もったいつけて振りながら、アリシアの反論を遮る魔女。
「貴女の協力が必要なのよ。姫様のオ■ンコは大・大・大御褒美で、よほど目覚ましい成果を上げなければ得られない。ちょっとした御褒美の場合は可憐な姫様の代わりに凛々しく美しい女騎士様が、己の身体を提供するという――ね？　それなら姫様も長持ちするでしょう？」
考慮するに価しない、あまりにも巫山戯たアイデアだ。頭に血を上らせたアリシアは、思わず一歩足を踏み出し――愕然として背を強張らせる。イミス姫の乳首を弄っていた魔女の手が、いつの間にかナイフを握り、その刃を姫のうなじに添えていたのだ。
淫穴を犯されている幼姫はまるで気づかず、あどけない頬に艶めかしい媚笑を浮かべ、細い腰をゆるゆるとくねらせて――下手をしたら、自ら刃に首を擦りつけてしまいそうだ。
「ボロボロになってしまった王国だけれど、魔王軍を単独で退けたという実績はまだ曇っていない。いまならまだ立て直せるのよ。もちろん、私に任せてくれればだけれど。そのためには、諸侯軍が駆けつける前に叛乱軍を鎮圧し、できることなら手駒にしたい――協力してくれるわよね、アリシア様？」
訊かれるまでもない。大切な姫を人質に取られているのだから、選択肢はひとつだけだ。
（済みません、姫……）
胸中に詫びながら、アリシアは不承不承肯いた。

＊　＊　＊

王都の民と帰還した討伐軍から成る叛乱軍の主力は、大規模魔法によって地均しされた街の一角を拠点とし、瓦礫を積み上げて即席の砦を築いていた。最初のうちこそ数に物を言わせて王城にまで迫る勢いだったのだが、魔物たちの夜襲に神経を磨り減らし、食糧不足も加わって、いまは積極的な戦闘を避けて諸侯軍の到着を待っている状態。
王城の門が開いたことに気づいた見張りの兵も、寝不足と空腹に目をギラギラと光らせ、垢と埃にまみれた頬は骸骨のように痩せていた。
だから――門の奥からしずしずと迫り出してきたソレを、最初は幻だと思ってしまった。
小振りだが頑丈そうな櫓の足元に車輪をつけた、移動式の高舞台だ。高さも幅も三メートルほど、最上部に設えられた舞台は前後に長く、特に前方は船の舳先のように大きく迫り出している。
その突端に――艶やかなドレスを纏った小柄な少女が立っていた。
ティアラを飾る黒い髪、広く滑らかな瑞々しい額――微かな微笑みを浮かべて桜色に火照る、■気な頬。しっとり輝く黒目がちの瞳――。
「い……イミス、姫……？」
「ひ、姫様だッ！　姫が、戻られたのだ！」
厭戦の気配が立ちこめていた叛乱軍の砦に、久々に明るい声が響いた。だがもちろん、長続きはしない。いくら彼らがイミス姫を慕っていても、当の本人は敵の本拠地となった王城から出てきたのだ。
■気な姫は、すでに敵の手に陥ちている――人質か？　叛乱軍の士気を挫くため、公開処刑でもしようというのか――と。
「あ、アリシア様……？」
「魔女と一緒だ。あの噂は、本当だったのか……」
高舞台の上のイミス姫に視線を奪われていた男たちが、舞台脚部の前方にいる女騎士と黒髪の魔女に気づき、不快そうに顔を歪めた。
砦と高舞台の距離は、おおよそ十メートル。

自分を見つめる兵たちの猛々しい表情に気づいて、アリシアは眉を顰める。
（なぜだ？　姫様に気づいたときは、あんなに歓声を上げたのに……）
訝しんでいると、
「彼らはね、誤解しているのよ」
傍らの魔女が馴れ馴れしく身を寄せ、妖しく微笑みながら囁きかけてきた。
「貴女が姫様を奪って城から逃げ出した、そのせいで王が錯乱してしまった――まあ、私の部下たちが意図的に流した噂なのだけれど」
「き……貴様ぁ……！」
「シッ！　静かに！　姫様の演説が始まるわ」
意地悪く微笑んだ魔女が魔法を使い、アリシアの手足を封じた。喉にも細工をされたのか、息はできるのに声は出せない。
そして――。
「ご心配をおかけしました、みなさん」
高舞台の上から発せられる、イミス姫の言葉。
「ごらんの通り、私は無事です。私がいない間にいろいろなことが起きたようですが、だからといって、ペルセフォフの臣民同士が互いに刃を向け合い、殺し合うだなんて、愚かしいことです」
魔法によって増幅され、朗々と響く姫の言葉に、叛乱軍の兵たちが静かに耳を傾ける。
（ああ、姫……）
形だけ見れば、アリシアが想い描いていた通りの、理想的な光景だが――実態はもちろん違う。
「私がいない間に父王が天に召され、こうして戻ってきてみれば、臣民は二手に分かれて戦に明けくれている――私の悲嘆を理解してくれる人は、ひとりもいないのですか？　もしいれば、この身を喜んで差し出しますのに……」
哀しげに顔を伏せたイミス姫が、舟型の舞台の舳先で静かに跪き――見守る叛乱軍の兵たちが、不意にざわめき始めた。
姫が絹地のスカートを捲り、己の股間に手を差し入れて、いやらしいひとり遊びを始めたのだ。
「ふ、ぁ……うぅ……私は世界一不幸な女王です。信頼していた騎士には騙され、父王の死に目には会えず、臣民たちは互いにいがみ合うばかりで、非力な私になど見向きもしない……」
「い、いけません、姫ッ！　そんな、いやらしいことをされては……」
「貴様の仕業だろう、魔女ッ！　我らのイミス姫に、あんな淫らな術をかけやがって！」
しばらくの間静かになっていた砦が、急に騒がしくなった。だが、怒りや闘志は鈍い。
叛乱軍の砦に詰めている者の多くは、妻や娘を近衛兵団に奪われた民たちだ。戦場での興奮に加え、疲労の極みにあって判断力も鈍っている。
だから――。
「父王も失い、騎士にも軽んじられる私は、もうこうするしかないのです。どうかみなさん、ごらんになって。ここはもう、こんなにも熱く濡れて……」
細い腰をくねらせながら四つん這いになり、砦に向けて小さな尻を差し出す姫。
自らの手でスカートを捲り――現れた美尻や眩く白い太腿に、性欲の解消をずっとおあずけされていた男たちがオォッと獣のように唸る。
「見て……お願い、見て……」
滾る欲望を誘うように、クイックイッと小さな美尻を揺らす姫。伸びやかな太腿の付け根にムニュッと搾り出された肉畝は、遠目にも分かるほど艶やかな朱鷺色に火照り――腹の下を潜った小さな手が、硝子細工のように華奢な細指を添え、くぱぁっと開けば、燃え出しそうなくらい赤らんだ■気な淫唇が、糸引く蜜を滴らせながら妖しく咲きこぼれる。
「非力な女王である私は……ン、あ……た、たくましい殿方の助けがなければ、国を治められ、ません……だ、だから私のここは……オ■ンコは……私を助けてくれる勇者のために……ふ、はぁ……いまからもう、こんなにも、あ、熱、くぅ……ッ！」
あどけない頬を艶めかしく火照らせ、息を詰めて見守る民衆に悩ましい流し目を与えながら、淫らな声を響かせるイミス姫。伸縮する細指が甘蜜に濡れた■気な粘膜花弁をくちゅり、ぬちゅり、と掻き回し――紅く可憐な菊蕾が見る見るうちに解け、ぽっかりと開いて、紅暗い粘膜を衆目に晒した。
「ひ、姫ぇ……やめてください、そんな、そんな」
「そんなことしていただかなくても、お、俺たちは、姫様のために……」
叫ぶ男たちの声から怒気が消える。
ただ、ギラギラした瞳は怖いほどに血走り、こめかみに青筋を立て、鼻息も荒らげ――剣や槍を捨て、砦からふらふらと出てくる者さえ現れた。
（い、いけない……あんな状態の男たちを、姫に近づけては……）
騎士としての使命感を思い出し、蒼褪めるほど焦るアリシア。
その傍らに立つ魔女が、薄く微笑みながら一歩前に出て――。
「止まりなさい、無礼者ッ！」
夢遊病者のような足取りで寄ってきた男たちを鋭い声で制止する。
「イミス姫……いえ、イミス女王様が求めておられるのは、救国の勇者のみ！　貴様たちのような下郎は、お呼びではないわ！」
「な……なんだとっ⁉　浅ましい魔女の分際で、さ、差し出がましいことを……」
滾る欲望を邪魔された男たちは、当然腹を立てる。だれが敵なのかをいまさらながらに思い出し、傍に

あった大きな石を拾う者もいる。
一気に高まる不穏な気配に、ラーマは妖艶な笑みを見せて――。
「貴様らはつい先ほどまで、ペルセフォフの旗に刃を向けていたのだ。そんな不埒者を、大切な女王様の傍に近づけるわけにはいかぬ」
もっともらしいことを言った。
確かに、イミス姫が戻ってきたのだから形式的にはそういうことになる。出端を挫かれた男たちは一瞬互いに顔を見合わせ――その隙を突いて、魔女が妖しい言葉を重ねていく。
「敵となっていた貴様らがイミス女王様の玉体に触れたいのならば、最低でも忠誠の証を見せるのが筋であろう？」
「そ……それはそう、だろうけど……」
「しかし、どうやって？　剣はもう捨てたぞ？　ほかになにをすればいいんだ？」
まんまと口車に乗ってきた男たちに、スッと指を突きつける魔女。訝しむ視線を集めてから、おもむろに横へ滑らせ――動きや声を封じられ、狂おしく焦燥しながら成り行きを見守っていたアリシアを、まっすぐに指差す。
「この、女王様を拐かした奸賊を成敗せよ」
「……ッ!?」
「ただし、絶対に殺すでないぞ。お前たちのほかにも、忠誠の証を立てなければならぬ者は数多くいるのだからな」
魔女の言葉に乗せられて、血走った目を女騎士に向ける男たち。
（な……なんてことを……ッ！）
自由の利かぬ身体を懸命に捻り、なんとか身構えようとしたアリシアだったが――じゅくん！
「うっ!?」
黒い薄布が密着した秘裂の奥で、淫唇が不意に熱く潤んだ。膣と尻穴にはもどかしい疼きがたちまち充満、乳房も火照り、温かな汗を噴き出して――白銀の胸当ての下でしっとりと潤む。
鼻息を荒らげた牡たちの気配に、牝の本能が掻き立てられたのだ。恐怖や怒りより遥かに強烈な淫悦の予感が膨れ上がり――媚びるように潤んだ瞳が男たちの股間へ、どうしても吸い寄せられてしまう。
さらに――。
『こんなに殺気立ってる男たちを、そのまま姫様の傍に上げるわけにはいかないでしょう？　腐っても騎士なら、身を挺してお守りするわよねえ？』
アリシアの耳にだけ聞こえる、ラーマの声。
『大丈夫、どんなに猛っている男でも一回射精すれば落ち着くわ。気持ちよくなることで姫様をお守りできるなんて、いやらしい貴女にはうってつけの仕事でしょう？』
クスクス笑いを含んだ声が次第に小さくなって、消え――同時に手足の自由が戻った。
「く、うぅ……ッ！」
ジリジリと迫る男たちに対し、慌てて身構えたアリシアは――しかしすぐに膝を折り、地面に両手をついて四つん這いになる。
（か、身体が……手足に力が、入らない……）
狂おしく疼く尻穴、焦れったいもどかしさが燃え盛る膣洞――男根の甘辛い味やたくましい太さを知る口には涎が溢れ、舌や喉がムズムズする。
「な、なんだ？　あのアリシア様が、まるで犬のように……」
ギョッとして遠巻きにする男たちを憎らしいと思うが、それは辱められたからではない。
むしろ、その逆。
手が届きそうなほど傍にいるのに焦らすばかりで、ちっとも襲いかかってこないから。
こんなにたくさんいるのに、なにをグズグズしているのか。私はこんなに濡れているのに、こんなに待ち焦がれているのに、どうしてひとりもかかってこない？　だれもかれもが姫の痴態に目を奪われ、股間を熱く滾らせていたではないか――。
「ふ、は……はや……くぅ……」
赤らむ顔を俯け、四つん這いになった身体を微かに震わせながら、小さな声を絞り出すアリシア。
そうだ、ラーマの言う通りだ――こんなにも淫らになってしまった身体では、男たちの獣欲を引き受ける以外、姫様をお守りする方法はない――。
羞じらう理性に言い訳しつつ、火照った顔を上げる。うしろへ高く高く突き上げた美尻を無意識のうちにクイックイッと打ち振りながら、
「わ、私を討つのだろう……は、早く、しろっ！　遠慮など、するなっ！」
涙声で命令する。
あまりに激しい腰振りだから、尻から太腿にかけての垂れ布が捲れ返ってしまった。
「これは、いったい……」
凛々しい女騎士としての姿しか知らない男たちは、アリシアの必死の媚態を見ても、ただただ当惑するばかり。
その煮えきらない態度が、牡たちの気配に発情しきっている女騎士をさらに苛むのだから、ラーマとしては放っておいてもよいのだが――。
（まあ、姫様の鳴き声も早く聴きたいし）
邪な気持ちを隠し、躊躇っている男たちの背を軽く押してやることにした。
「魔王軍が残していった卑劣な呪いのせいで、淫女になってしまったのだ。いやらしい気持ちを我慢できなくなったこの浅ましい女は、イミス女王様を拐かし、女としての悦びを徹底的に植えつけて、己のペットにしようとした――無垢で可憐な姫様があんなことをしているのも、すべてはこの、淫らな牝豚

のせい。イミス女王に忠誠を誓う者ならば、この女騎士を徹底的に辱めよ！」
「そ、そういうことなら……」
魔女の甘言に唆された男たちが、それでもなお怯えながら、四つん這いになった女騎士に近づいた。
手を伸ばせば触れられる距離になり、おっかなびっくり膝をついて――気づく。
「……なんだ、この匂い？」
「ねっとりと甘ったるくて、ちょっと酸っぱいような……こりゃあ、アソコの匂いだ！」
驚いた男が思わず発した大きな声が、アリシアのプライドを激しく打ち、深く深く抉った。
なのに、秘裂はますます熱くなる。
（あ、あ……濡れる、濡れてしまう……！）
牡たちの興味が自分に向いたことを確信し、細胞のひとつひとつが発情して、割れ目の中にある淫唇が淫らな蜜をじゅわ、じゅわ、と滲ませてしまう。
「なんていやらしい匂いだ……本当にこれが、近衛騎士団を率いていたアリシア様なのか……」
「おい……アリシア様が、尻を振ってるぞ⁉」
「黒くてよく分からないが、見ろ。下着の股間が濡れている。まるでお漏らししたみたいだが……この匂い、小便じゃない。やはりいやらしい汁だ！」
犬のような格好をしている女騎士に群がった男たちが、昂る気持ちに任せて口々に言い始めた。
（や……やめろ、言うな……言うなッ！）
羞じらう気持ちとはうらはらに、黒い薄布にぴっちりと包まれたアリシアの美尻はさらにさらに持ち上がる。姿勢の変化が伸縮性に富んだインナーを歪め、肉畝を押さえつけた股布が前後に引っ張られて――ぬちゅ。
男たちの手はまだ触れていないのに、歪んで撚れた薄布が秘裂に喰い込み、蜜まみれの淫唇を押し潰して淫らな音を立てた。
「ふぁ……ぁあっ！」
弾ける羞恥と閃く快感に思わず顔をはね上げ、甘やかな吐息を漏らせば――。
「……うっ⁉　あ……うぅッ！　そ、そんな顔で、私を見るなッ！」
呆れ顔の男と目が合ってしまい、あまりの恥ずかしさに全身の血が沸騰する。
と同時に、胸先に生じる鮮烈な快感。
滾る血汐が乳首に流れ込み、敏感な肉豆が痛いほど痼り勃って、胸部装甲の内張に深く深く喰い込んでしまったのだ。
「く、う……うぅ……」
息をするたび火照った乳房がわずかに動き、柔らかなクッションに喰い込んだ乳首がクニ、クニ、と捏ねられる。稲光のような淫悦に打たれ、四つん這いになった背をくねらせれば――尻から太腿にかけて密着した黒い薄布が歪み、捩れて、とめどなく溢れ出る愛液に濡れた肉畝が揉み潰され、熱く潤んだ粘膜花弁が何度も何度もしごかれてしまう。
「なんだ、これ？　俺たちはまだ、なにもしていないのに……どうしてこんなに尻を振るんだ？」
「たぶん、動けば動くほどオ■ンコに下着が擦れて、気持ちイインだろう。見ろよ、布目から染み出て、太腿に垂れ始めてる」
「ッ⁉　み、見るな……見るなぁあっ！」
頬を赤らめ瞼を閉じて、イヤイヤと首を振りながら必死に叫ぶアリシア。
だが、黒い薄布に包まれた美尻はますます持ち上がり、男たちの視線を誘う。無数の眼差しを浴びた下着には瑞々しい肉畝の形がうっすらと浮き上がり――割れ目に喰い込んでいる部分から太腿にかけて甘酸っぱく香る愛液が染み抜け、水飴を塗られたようにヌラヌラといやらしく輝いている。
「見られただけで、こんなになるなんて……触れたらいったい、どうなるんだ？」
「ふ……ぁあっ⁉」
男の手が最初に触れたのは、疼く秘裂ではなく揺れる桃尻。
なのに、四つん這いになったアリシアの背筋には熱い電流が駆け抜け、頭の芯まで痺れてしまう。
跳ね上がる顔、蕩ける瞳――喘ぐ唇はぽってりと厚みを増し、淫らな微笑みを浮かべていやらしく弛んだ。赤らむ頬には法悦の涙が伝い、毛穴という毛穴が開いて――ねっとりと濃密な、甘酸っぱく香る牝汗が、火照る乳房の谷間にジワッと滲む。
「なんて気持ちよさそうな顔だ。そうか、アリシア様は尻を撫でられるのが好きなんだな」
「あっ⁉　あ、あぅぅ……ッ！」
いくつもの手が尻に群がり、傍若無人に這い始めた。撫で回され、揉み捏ねられ――抓られたり、打たれたり――。
（い、嫌だ……こんなのは、嫌……なのに、ああ、し、尻が……下着がズレ動いて、アソコが……お、お、オ■ンコがぁ……ッ！）
いくつもの手に弄り回された桃尻が蕩けるほど気持ちよくなり、羞恥心が溶け消える。喉を反らして仰向けた顔は恍惚に弛み、口端から涎まで垂らして、うっとりと微笑み始める女騎士。
「おいおい、これが本当にあの、近衛騎士団を率いていたアリシア様なのか？」
「いくら魔王軍の呪いをかけられているとはいえ、尻を揉まれただけでこんなに感じるなんて……」
凛々しかった女騎士の、別人のように淫らな姿に、男たちは顔を見合わせて苦笑した。
「男に混じって戦っていたはずなのに、肌は柔らかくてスベスベだし、髪もきらびやかでしなやかだし、顔はこんなにいやらしいし――騎士より遊女のほうが性にあってそうだよな」

漫画 COMIC おおたたけし
都へ至る
長坂峠に現れし
妖しき狼鬼
街道を塞ぎて
人を襲い食らふ
稀代と噂の
陰陽師
『葛ノ葉明泉』に
誅伐せんと
御宣旨下る
可憐な退魔巫女見参！
ああら
お食事中？
悪いけど
お箸置いて
もらうわよ！
舞葉斬!!
ひ
ひいいっ
!?
やんっ
最新単行本『エンジェリック・デザイア』好評発売中！
双像鳴伐鬼草紙

ちょ——っ
ふん
変なトコ嗅いでんじゃないわよっ
今スグ吹きとばすわよ…っ
…ってでっか!?
あっ!! しまっ…
ゴ
ド
ぴっ
ぴっ?
う…
うそっ
やっ やめ…っ
えっ…!?
グルル
ルル

明々のおそそ
裂けちゃう…っ!!
ああ…
葛ノ葉様さえも…!
もっ
もうダメだあっ
あっ
だめっ
おっきすぎる――っ!!
こんな奥まで
きちゃあっ
おへその
上まで
犯しゃれ
てるぅっ
ボコッ
おへそ
らめぇ
えーっ
犬ち
ぽで
ほじられ
てるーっ

トゲトゲ
こすれちゃう
う――っ

いやだあっ
太しゅぎる
うぁ――っ

らめっ

らめえっ

し…子宮
にぃ…っ♥

狼鬼の汚い精子
ぶちまけられ
ちゃったぁ…

あひ…♥
あひひ…♥

なかに
出しちゃ…

あがぁ

そ…
そんなっ…

尻尾が
触手にぃ…!?

まてっ！

そこまでだ
狼鬼！

遅かったか…
人の血肉で肥太せし淫欲の鬼よ！
穢れを祓いて無垢なる式神に戻れ！
ボクが来た以上…
好きにはさせないぞっ！
反閉（へんぱい）
発現!!
ねっ 姉さん！
い…泉（いずみ）…
しっかり！もう大丈夫…
!?
そんなっ
ボクの九字が効いてない!?

修道女
セラフィナ
淫虐の聖堂
禁欲を守る清き身体で祓魔を行うシスターが
妖魔の触手に搦め捕られ、快楽に堕ちる――!!
小説／NOVEL 小豆沢亜澄（あずさわあずみ）
挿絵／ILLUSTRATION 汰尾乃きのこ（たおのきのこ）

修道女セラフィナがその孤城にたどり着いたのは、すでにとっぷりと日も暮れ果てた時刻だった。

霧が深い。山深い辺境である。ねばつくような夜の空気の中、領主オルランド男爵の居城は、小高い丘の上で陰鬱にうずくまっているようだ。

無口な老従僕の案内で、セラフィナは城の奥へと導かれた。

城主オルランド男爵は、床に跪いてセラフィナを迎えた。辺地とはいえ広大な領地を治める貴人とは思えない、うやうやしい仕草だ。

「よくぞ、よくぞおいで下さいました。聖都に隠れもなき《断罪の聖天使》と称されるお方が、本当にこの草深い城までご来臨下さるとは……」

温和で端正な、壮年の貴族である。しかしその整った顔は深い焦燥に曇り、声は疲労と絶望にかれかけていた。

セラフィナは敬虔なカリテスの信徒らしく聖なる印を眼前で切ると、身を屈めてそっと男爵の手を取った。

「いけませんわ男爵さま。どうか顔をお上げ下さいませ。そのようなたいそうな呼び名は、この身には過ぎたもの。わたくしはただ、人に仇なす妖魔のあるところどこへでも赴き、苦しむ方々を救うお手伝いをするだけの、一介の尼僧でございます。どうかただ、セラフィナとお呼び下さい」

甘くくすぐるような声音。どちらかと言えばおっとりとした美貌は、見るものをほっと安心させるような暖かさをたたえている。

しかし、聖マリシュカ修道会のセラフィナと言えば、聖都では知らぬ者のない凄腕エクソシストである。初潮を機に初めての祓魔を成し遂げてから僅か数年。帝国各地で祓った魔神はすでに百をもって数えるという。

妖魔や邪教の跋扈に怯える民はいつしか、その修道女を《断罪の聖天使》と称えている。

だがその評判と、眼前の少女の柔和なたたずまいとの釣り合いがとれず、男爵は思わず困惑の表情を浮かべる。

幾多の魔神を制したとは思えない、たおやかな顔立ち。頭巾（ウィンプル）の縁からこぼれる金色の髪。僧衣をまとっていても一歩ごとにふるっ、ふるっと揺れるのがはっきりとわかる、今にもはちきれそうな乳房の膨らみ。僧衣の裾からチラチラとのぞく、ミルクのように白い太もも。

そのたたずまいは、聖職者というにはあまりに可憐で、そして悩ましい。

「それにしても、あなたは本当に……失礼ながら……もう少し……」

「若すぎるし、華奢すぎる？　古代の石像が歩きだしたような、いかつい大女と思ってらっしゃいましたかしら？」

にこりと微笑んで、セラフィナは言った。男爵は、幾分ばつが悪そうにうなずく。

「正直言うと……」

「皆様そうおっしゃいます。でも男爵さま、父なるカリテスの名にかけて、このセラフィナは必ず職務を全ういたしますわ」

その言葉に、男爵の愁眉が僅かに開かれる。

「それなら、本当にありがたい。どうか私の息子を助けて欲しい」

「さっそく始めましょう。息子さんは、どちらに？」

＊

「息子のファビアンがおかしくなり始めたのは、半月ほど前からです。狩りの帰り道、森の奥で、何やら魔物に憑かれてしまったらしい」

石造りの回廊を歩きながら、男爵は語った。

「毎日礼拝を欠かさない信心深い子だったのに、ある日突然卑猥な言葉を吐き散らし、罰当たりな行為を繰り返すようになりました」

「罰当たりな行為とはなんでしょう？」

セラフィナが尋ねる。

「その……犬や馬を嬲り殺したり、礼拝堂に汚物を撒き散らしたり、そういったことを……。ついには使用人の少女を拷問しようとしたので、たまりかねて今は地下室に監禁してあります」

地下室は、長い石段を下った先にあった。

小さな格子窓のついた、頑強な鉄の扉が、冷たく閉ざされていた。

扉の向こうから、「グルルルル……」という獣じみた唸り声が、かすかに響く。

男爵はもう一度、不安げにセラフィナを見つめた。

「本当に、あなた一人で行かれるつもりか……？」

修道女は、恐れげもなく目を細めた。

「ええ。男爵さまは、外からご覧になっていて下さい。さあ、鍵を」

扉の鍵が開いた。軋みを上げて、重い扉がじりじりと開く。

セラフィナは、妖魔憑きが待つ地下室へと足を踏み入れた。かちゃり。背後で、また鍵が閉じる。

かつては何かの蔵に使われていたらしい地下室は、がらんとして薄暗かった。壁の燭台にあるロウソクが、かろうじて室内をぼんやりと照らしている。

セラフィナは、まっすぐに部屋の一隅へと目を向けた。

青く光る二つの目が、ギラギラとこちらを見返していた。

「女だ……美味そうな女の匂いがしやがる……」

しわがれた声が呻いた。男爵の息子、ファビアンだろう。しかし、暗くてその姿ははっきりとは見えない。

感じられるのは、地下室にたちこめる獣じみた男の体臭。汚物と、それをも圧倒するような濃密な精液の異臭だ。それに、何か湿ったものがのたくるような音。

「あなたがファビアンですね。わたく

しは、聖マリシュカ修道会のセラフィナ。あなたを助けに来ました」
柔らかく諭すように、セラフィナが言う。闇の中から返ってきたのは、邪悪な含み笑いだった。
「ククククク。カリテス教団のメス犬か。お前、男とまぐわったことないんだろ」
「ええ。わたくしは神にお仕えし、生涯禁欲の誓いをたてています。殿方と肌を合わせたことはありません」
「そんなむちむちしたいやらしい身体してて、処女なのかよ。あ〜〜〜たまんねぇ。お前みたいな気取ったメス犬の処女マ■コに、俺様のビンビンになった逸物ぶち込んで、口から出てくるほど精液注ぎ込んでやるぜクククク」
セラフィナは、落ち着いていた。魔物の猥褻な挑発には慣れっこだ。むしろ気持ちが高ぶってくる。
ゆっくりと、手にした神聖なシンボルを上げる。長い鎖の先に付いた、聖マリシュカの護符。セラフィナ自身が祈りを込めて聖別した宝具だ。
「アミニオムス・ルミノルス！」
セラフィナが短い聖句を叫ぶ。シンボルがカッと青白く発光し、地下室全体を照らした。
ファビアンが、いた。いつの間にか、すぐ目の前に。
端正な美少年だったという領主の息子は、すでに半ば以上怪物に変容していた。
父親によく似たハンサムな顔はそのままだ。しかし、両腕は肘から先がうねうねと蠢く枝分かれした触手になり、裸の股間からは異様に巨大な男根が屹立している。
だがその呪わしい姿を見ても、セラフィナはなお沈着だった。むしろ微笑みさえ浮かべて、かつては無垢な少年だったものに語りかける。
「恐れないで。わたくしは、あなたを浄化し自由にするために参りました。さあ、わたくしとともに、神様にお祈りいたしましょう。あなたの内なる妖魔を、一緒に追い出すのです」
妖魔憑きから返ってきたのは、口汚い罵倒だった。
「クソでも喰らいやがれ。お前の神様も、祈りとやらもな！」
次の刹那。触手がムチのようにセラフィナの腕に絡みついていた。たちどころに両腕が封じられてしまう。
「ヒヒヒッ。ほうら、捕まえたぜメス犬。今からその僧衣を剥ぎとって、神様に捧げた聖なる肉体ってやつをたっぷり味わってやるからな」
ぬる、ぬるっ。触手がセラフィナの全身を這い回る。腐肉のような臭いの息が顔に吹きかかる。セラフィナは、うっと顔をそむけた。
「そのようなことを……お、お放しなさい！」
「ククククッ。こんな極上の女、ここいらあたりじゃついぞ見かけねぇ。こりゃあ犯し甲斐がありそうだぜ。三日三晩は寝ずにハメ狂えそうだぁ」
ねばつく触手がセラフィナの顔を撫で回す。別の触手は、その巨乳を僧衣の上から淫靡に揉みしだく。たゆたゆとメロンのように豊満な膨らみを、触手は持ち上げたかと思えば絞り上げ、思うさま弄ぶ。
「あ……い、いけません。修道女の身体に触れるなど、なんと罪深い……！これ以上の淫らな行為は、神様がお許しになりません！」
セラフィナの朱唇から、かすかな悲鳴がこぼれる。
「せいぜい神様にすがりな。これからこってりとお前のそのきれいな身体に種付けして、俺の眷属を産ませてやる。可愛い娘が生まれたら、そいつらも順番に犯してやる。ヒッヒッ、楽しくなりそうだぜ」
触手が、セラフィナの僧衣を乱す。豊かで形のいい乳房が片方こぼれ出る。かすかに充血した薄桃色の清らかな乳首が、妖魔憑きの前に露わになる。
セラフィナの美しい顔が、さっと恥じらいに染まる。
「ああっ、な、なんということを……！神様、どうかこの罪人をお許し下さい……」
「ほんとに美味そうな身体してやがるぜ。もう逸物が破裂しそうだぁ。ほら聖女様よ、その可愛い口で、こいつを慰めてくれや、クッククッ」
ぐうっ。強靭な触手が、セラフィナを力ずくで跪かせる。その眼前には、グロテスクに膨れあがった男根が、ピクピクと脈動していた。セラフィナの大きな目が、さらに見開かれる。
「ああ……なんておぞましい……」
「そのおぞましいモノで、じきにお前を天国にイカせてやるよ。ほれ、いいから口開けて、俺のザーメン袋が空になるまでしゃぶり倒すんだよ」
触手が、セラフィナの頭を無理矢理にペニスへと近づける。先端の割れ目から先走りをドクドクと溢れさせている亀頭が、セラフィナのすぐ鼻先までくる。
不意にセラフィナは、すべてを諦めたかのように、ふっとため息をついた。
「し、仕方ありませんね。これだけはしたくなかったのですが……」
修道女は目を閉じ、自分からペニスの先端に唇を寄せていく。ファビアンは、勝利に酔って甲高い声を上げた。
「グヒヒヒヒィ、案外ものわかりがいいじゃねえか。ああそうだ、とっととと俺の汚れきったチ■ポにキスしろ。舌でねぶりまくって、腹がパンパンになるまで俺の精液飲み続けるんだよ！」
「ん……」
亀頭の寸前まで近づいたセラフィナの唇から、とろりとした液体が滴り落ちた。
澄んだ唾液だ。暖かく透明なセラフィナの唾は、蜜のようにねっとりと、ファビアンのペニスを垂れ落ちた。
その瞬間だった。
「ギャアアアアアアアアアッ!!」
絶叫が、ファビアンの口から迸った。セラフィナの身体を突き放し、床をの

著者近況
はじめまして、小豆沢亜澄と申します。これがアダルト小説デビュー作になります。読者の皆様に気に入っていただけると嬉しいです。
これからも皆様のおにんにんがギュンギュンおっきするような作品を書ければいいなあと思っています。よろしくお願いします！

たうち回る。唾を垂らされた陰茎から、しゅうしゅうと煙が上がっていた。まるで濃硫酸でもかけられたかのようだ。

「こ、このメス犬がぁぁぁ！　俺の逸物に何をしやがったぁぁぁ！」

乱れた僧衣を直しながら、セラフィナは凛然と言い放った。

「このセラフィナの肉体は、髪の先から足の爪まで残らず守護聖女マリシュカの恩寵を受けた完全なる純血の砦。その身体から出るものは、涙も、唾液も、経血さえも、闇の生き物には毒となるのです、愚かな妖魔よ」

ファビアンは床に四つん這いになり、息を荒らげながら修道女を睨みつけた。

「ぶち殺してやるぶち殺してやる。絶対にぶち殺してやるぞメス犬！」

「お黙りなさい！」

セラフィナは、自由になった手で聖なる護符をファビアンに突きつける。

「不本意ながら、あなたには少し痛い思いをさせなくてはなりませんね。父なる神と守護聖女の名において命じる！　オルランドの息子ファビアンの肉体に住まいし邪教の妖魔よ、その場所よりただちに退け！　アノス・クラギト・アプタトロン！」

聖句の詠唱とともに、護符から雷撃が走り、ファビアンの体を貫く。

醜く変貌したファビアンの肉体は、ハンマーで殴られたかのように吹き飛び、壁に叩きつけられた。

「グォォォ……ヤメロ……」

しわがれた老人のような呻きが、ファビアンから洩れる。

セラフィナは静かに歩を進め、さらに唱える。

「神と聖女の力が汝を滅ぼす！　断罪の雷が汝を打ち払う！　アノス・クラギト・カタストロポス！」

先ほどよりさらに強烈な雷撃が、ファビアンを打ちのめした。

「ギィィィィィィィィィィィ！」

もはやファビアンの声は、人間のものとも思えない咆哮に変わっていた。立ち上がることもかなわず、虫のように床を這いずるのが精一杯だ。

「最後の浄化です」

セラフィナは、仰向けに倒れて、小さく引きつけを繰り返している妖魔憑きを跨ぐようにして立った。

ゆっくりと僧衣の裾をめくり上げる。

セラフィナは、この儀式のために、常に下着を着けていない。金色の和毛（にこげ）に飾られたセラフィナの処女の亀裂が、徐々に露わになっていく。

真っ白な太ももの間に、可憐なバラのようにかすかに開いたピンク色の秘唇。未発達な肉ビラの頂点には、小さな真珠のようなクリトリス。いまだ男を受け入れたことのない神聖な膣口は、戦いの興奮にうっすらと濡れていた。

しかしセラフィナが開こうとしているのは、膣口ではなかった。その上にある、さらに小さな尿道口である。

勇敢な修道女の頬に、かすかな恥じらいの紅が差す。

（何回やっても、やっぱり少し恥ずかしいわ、これ……）

もう何百回と繰り返してきた儀式だが、やはり年頃の乙女である。性器の内側まで妖魔の前に晒すことに羞恥がなくなるはずもない。

しかしセラフィナは、意を決して力強く聖句を唱える。

「オルランドの息子ファビアンよ、わたくしが持つ最も清らかな聖水をあなたに注ぎます。これをもって、妖魔の穢れはすべて祓われることでしょう。ユリヌム・サクリピアテカ！」

しょわぁぁぁぁぁ。

盛大な水音とともに、セラフィナの股間から、金色の液体が勢いよく吹き出す。

（ああ……出てる……いっぱい……）

「聖水」の放出は、セラフィナにも強烈な快感をもたらす。悪を滅ぼす達成感とともに、セラフィナは神秘的な恍惚状態に達するのだ。

夥しく飛沫を上げる放尿の悦楽に、セラフィナの処女肉は自然と赤く充血し、クリトリスまでが包皮からむくりと顔を出す。尿を噴出する泉のすぐ下では、熟れ始めたばかりの膣肉の隙間から、ねっとりした性の果汁までが滲み出していた。

法悦に顔を上気させ、セラフィナはうっとりと言う。

「さあ、わたくしの聖水をたっぷりとお浴びなさい。今日は、ひときわたくさん出そうですから。ほら……」

しゅわわっ。じょぼぼぼっ。

セラフィナの清楚な肉割れから、猥雑な音をたててなおも輝く液体がこぼれ出る。解放の悦楽に、膝がガクガクと震える。

「おおおお……おおおおうっ」

自分の股の下で、暖かな尿液を吹きかけられた妖魔憑きが、最後の煩悶をしている。

闇の力が溶けて、少年の肉体から消えていくのを感じる。

（ああ神様、わたくしも、天に昇る心地ですっ……あっ、あっ、だめ、魂が飛んでしまいそうっ……あああああ……イクぅッ！　イキますぅっ！）

ぎゅっと目を閉じ、セラフィナは頭上を仰ぎ見る。

指で触れてもいないのに、勃起した小さなクリトリスが疼き、痺れる。

びくっ。びくっ。短いエクスタシーに、全身が震える……。

「ふう……」

しばしの間をおいて、セラフィナは目を開けた。瞬間的な入神状態の火照りが、すうっと冷めていく。

股の下に倒れていた怪物は、いつしか元の美少年に戻っていた。醜怪な触手は消え、ペニスも正常な状態に戻っている。

たくし上げていた僧衣を戻すと、セラフィナは屈み込んで、ファビアンの息を確かめる。気を失いかけてはいるが、呼吸は正常だった。

セラフィナは笑みを浮かべ、少年の頬を優しく撫でた。

「よく頑張りましたね、ファビアン。とても立派でしたよ」
「れ……」
少年が、何か言おうとしていた。セラフィナは耳を近づける。
「なあに？　何か言いたいの？」
「れ……礼拝堂……」
かすれ声でそれだけつぶやくと、ファビアンはがくりと意識を失った。
鉄の扉が開いて、オルランド男爵が飛び込んでくる。
「ファビアン！　息子よ！」
セラフィナは立ち上がると、そっと男爵に告げた。
「大丈夫です。息子さんは、すっかり元通りです。すぐに体を清めて、暖かいベッドに運んであげて下さいませ」
「ありがとう。本当にありがとう。私の領地をすっかり差し上げてもお礼し足りない心地だ」
片腕で息子の体を抱いた男爵は、もう一方の手で、セラフィナの小さな手を押し頂いた。その目には、涙が浮かんでいた。
セラフィナは、ただ慈しみに満ちた微笑みを返しただけだった。
「いいえ、わたくしはただ、神様の使命を果たしただけのこと。そのようなお礼には及びません」

＊

セラフィナが、男爵から供された心づくしの夕食を一人で食べていると、やがて息子の手当を済ませたオルランド男爵がやってきた。
「せがれは、怪我もなくよく眠っております。すべてあなたのおかげですよ、セラフィナ。《断罪の聖天使》、やはり噂に違わぬお力でした」
「すべては神様の御心です、男爵さま」
「奥ゆかしい方だ。あなたもさだめしお疲れでしょう。部屋を用意いたしましたので、今宵はごゆるりとお休み下さい。いえ、一晩と言わず、何日だろうと何ヶ月だろうと、どうかお好きなだけ当地にお留まり下さい」
男爵の申し出に、セラフィナはふふっと愛らしい笑い声を上げる。
「ありがとうございます。でも、さっさと帰らないと教母様に叱られてしまいます。お気持ちだけ頂戴して、今宵一晩の宿をお貸しいただいたら、明日の夜明けには失礼いたします……あ、そうです。これから、礼拝堂にお邪魔してもよろしいでしょうか？」
「礼拝堂？」
男爵が、不審そうに片眉を上げる。セラフィナは、澄んだ笑顔を見せる。
「はい。そのう、こたびも無事に職務が果たせたことに、感謝のお祈りを捧げたいのです」
「なるほど。ええ、もちろんどうぞ」
セラフィナは男爵と別れ、城内にある礼拝堂へと赴いた。このくらいの領主の居城には、一族の者がカリテスの神に祈るための礼拝堂が敷地内に必ず設けてある。
先ほど、ファビアンが失神する寸前につぶやいた言葉が、妙に引っかかっていた。
（れ……礼拝堂……）
そこに、何かあるというのだろうか。
ファビアンに取り憑いていた妖魔は、邪神ウピシュトゥの低級眷属だ。個体ではさほど強い魔力はなく、神聖なカリテス神の礼拝堂に好んで近づくものはいない。この東方辺境においては、貧困に喘ぐ農民たちの間に、いまだ古代の妖神ウピシュトゥ崇拝は根強いが、領主の城内にある礼拝堂は、それに対抗する最も強固な砦のひとつである。
セラフィナは、ゆっくりと礼拝堂の扉を押し開ける。
これといって変哲のない、ごく平凡な地方領主の聖所という感じだ。
（何もなければそれでいい。でも……）
どうも気になる。体を張って対邪神の最前線で戦ってきた聖職者特有のカンが、ピリピリとセラフィナの乳房の奥を騒がせる。
セラフィナは、目を閉じた。かすかな違和感を感じる。セラフィナでなければ感じ取れないような、微細な闇の香り。本来なら、決してここにはあってはならないもの。
祭壇だ。セラフィナは、カリテス神の聖像が立てられた石造りの土台を子細に調べる。
土台の表面には、様々な神話のエピソードが浮き彫りにされている。そのうちのひとつ、聖女たちが魔神を打ち払っているカノルの奇跡を描いた部分で、セラフィナの目が止まった。
（ここに、何かあるわ）
指で、倒れている魔神の瞳を押してみる。
ゴゴゴ……。低い音とともに、祭壇の裏側に、小さな入口が開いた。隠し扉だ。
神聖な祭壇にこのようなからくりを仕込むとは。奥にあるのは、よほどの秘密だろう。そしてそれは、やっと理性を取り戻したファビアンが必死に伝えようとしたことに違いなかった。
調べないわけにはいくまい。
（神よ、守り給え）
ちゅっ、と愛用の護符に小さく口づけをすると、セラフィナは迷うことなく、隠し扉の奥へと踏み込んでいった。

＊

長く狭い石段を降りていくにつれ、セラフィナの嫌な予感は確信へと変わっていった。
まず感じられるのは、生暖かい湿った空気。それにむっと鼻をつく、腔液と精液が饐えたような淫らな匂い。
最後の扉を押し開ける。そこは、地下聖堂だった。
だがそれは、セラフィナが奉じる神の家ではなかった。中央に安置され、無数の松明に照らされた巨大な像は、邪神ウピシュトゥのものだった。
「おお、神よ！　な、なんということ

でしょう！」
セラフィナは、思わず叫んでいた。
聖都から遠く離れた辺境各地には、様々な邪神が跋扈している。
が、最も忌まわしく最も強力な邪神こそ、このウピシュトゥだ。
太古の時代、この東方の地で崇められた豊穣の女神の成れの果てだと言われている。その姿は、獣の角と、巨大な乳房と巨大な男根を併せ持つ奇怪な両性具有。
妖魔を操り、あさましい性の快楽を餌に人々を誘惑し堕落に導き、ついには人を人ならぬものに貶める邪神だ。人々に禁欲と貞潔を求めるカリテスとは、まさに対極にある神である。
その汚れた神像が、隠し祀られている。祭壇の前には、乾いた血や精液のあとが夥しくこびりついていた。ウピシュトゥに、ふしだらな性の儀式を捧げたのだ。
この状況から考えられることは、ただひとつだった。
「オルランド男爵が、邪神崇拝者だったなんて……」
あの温厚で紳士的な貴族が、このような淫祠に手を染めているとは。セラフィナは、唇を噛む。
「やはりここにやってきましたな、《断罪の聖天使》よ」
男爵の声がした。邪神像の陰から、オルランド男爵が悠然と姿を現した。ゆったりした黒いベルベットのローブをまとっている。
セラフィナは右手に護符を握りしめ、男爵をキッと睨み据えた。
「オルランド男爵！　城内にこのような邪教の偶像がある理由をどうぞご説明下さい」
悪びれるふうもなく、男爵は答える。
「説明することは何もないよ。君なぞが生まれるはるか前から、私はウピシュトゥの忠実な下僕なのだから」
「な、なら、ファビアンが妖魔憑きになったのも……」
「もちろん、森でなんかじゃない。ここで、私自身が儀式を執り行ったのさ」
クックックッ。淫猥に笑いながら、男爵が言う。セラフィナの表情が、悲しげに曇ってゆく。
「今のは重大な告白ですよ、男爵。仮にも領主の地位にある者の背教は万死に値する罪です。わたくしは、あなたを捕縛しなくてはなりません」
「捕縛？　その弱々しい腕とちっぽけな護符で、私に裁きを下せるつもりかね？　なら、やってみたまえ」
嘲弄の色が、男爵の顔に浮かぶ。
セラフィナは、右手の護符を男爵に突きつける。
「父なる神と守護聖女の名において命じる！　アレトワの領主オルランドよ、邪教に堕したる大罪、痛みをもって悔い改めなさい！　アノス・クラギト・アプタトロン！」
バシッ！　護符から発した雷撃が、男爵の胸を直撃する。ローブをまとった貴族はもんどりうって倒れ、そしてぴくりとも動かなくなった。完全に気を失ったようだ。
セラフィナは物思わしげにため息をついた。
「オルランド男爵、あなたを拘束します。数日中に正式な異端審問官が到着して、あなたを裁くことでしょう。こんなことになって、とても残念です。あなたはいい方だと思っていましたのに……」
沈痛な面持ちで、セラフィナは静かに男爵へと近づく。
にゅるり。
不意に、男爵のローブから、ぬめりを帯びた触手が伸びる。ピンク色の、タコのような触手が。
「――――ッ！」
身構える間もなく、触手はセラフィナの手首を捉えていた。
ローブの隙間から、さらに何本もの触手がにゅるにゅると現れる。
「クックックッ。可愛い《聖天使》様だ。あれしきの雷で、この私がどうにかなると思っていたのかね？」
むっくりと、オルランド男爵は身を起こした。黒いローブをはだける。その下は、まったくの裸だった。しかしそれは、先ほど息子ファビアンが見せたものよりさらにグロテスクに歪んだ肉体だった。
肩から先は十本以上に枝分かれした太い触手と化し、下半身の皮膚は黒くテラテラしたウロコ状に変わっていた。尻からはしなやかな尾が生え、股間からはおぞましく膨張したペニスが強欲にひくついている。両目はカエルのように黄色くなり、長い紫色の舌がうねうねと口から飛び出していた。
オルランド男爵は、完全に妖魔に成り果てていた。
セラフィナは切なげな眼差しで、その変容した肉体を一瞥した。邪教に淫するあまり、ヒトでなくなってしまった者の哀れな姿を見るのは、初めてではない。
しかし心優しいセラフィナが感じるのは、嫌悪よりむしろ憐れみだった。
セラフィナは、静かに口を開いた。
「オルランド男爵、残念ですが、もはやこうなってはあなたを法で裁くことはできません。神の慈悲をもって、あなたに死の安息を与えましょう。安らかにお眠りなさい。アノス・クラギト・カタストロポス！」
再び護符をかざし、聖句を唱える。
今度は至近距離で、雷撃が男爵の眉間を貫く。妖魔への、必殺の一撃。
だが。
男爵は、依然として立ち続けていた。嘲笑うような表情のまま。
「効かん。効かんよ修道女様。私が何十年ウピシュトゥに仕え、どれほど多くの生け贄を捧げ、その魔力を体内に取り込んできたと思っている。その程度の法力では、私の髪一本焦がすことはできんぞ」
「な、なんですって……！」
セラフィナの顔に、初めて恐怖の色

が走る。
今までこの聖句で祓えなかった妖魔はいない。聖マリシュカ修道会でも数人しか伝授を許されない秘法中の秘法である。
それが、まるで通じない。
「さてそれでは、名高い《聖天使》様の身体、どんな味がするものか、たっぷりと賞味させてもらうかな」
触手が、ぬとぬとと僧衣越しにセラフィナの身体を這い回る。
柔らかな巨乳をぎゅうっと締めつけ、くびれた腰に巻き付き、丸い豊満なお尻を撫で回す。
「ひぁっ……！　や、やめなさいっ！　そ、そんなところ、触らないでっ！」
ぞっとする感触に、セラフィナは悲痛な声を上げる。
だが、触手はますます荒々しく、セラフィナの肉体の隅々へと這い進んでいく。
粘液に包まれた触手は、やがて僧衣の内側へと侵入し、セラフィナのすべすべした肌に直接絡みつく。
びくんっ！　初めて肌に感じる妖魔の感触に、セラフィナの身体が跳ねる。
「あ……いやぁ……やめて、汚らわしいっ！」
ぷりぷりと張り詰めた乳房を、舐め回すように触手が蠢く。弾力のある柔肉が捏ね回され、今まで感じたことのない刺激が、セラフィナの背筋に走る。
「や、やめ……そ、そこ、恥ずかしい……あくぅんっ！」
「ほほお、取り澄ました僧衣の下に、これほど熟した果実を隠していたか。たまらんぞ、この手触り。こんないやらしい身体をしていて、男に触れさせたこともないとはな」
好色そのものの表情で、男爵が囁く。セラフィナは、身悶えながら答える。
「あ、当たり前ですっ。この身体は、神に捧げたもの。清らかに操を保ってこそ、神様にお仕えする資格があるのですっ」
「ご立派なことだな。しかしお前の身体は、先ほどから淫売のように私の手を悦んでいるぞ。ほれ、乳首ももうこんなにコリコリと固くなっておるわ」
僧衣の下で、触手がぬめぬめとセラフィナの乳房の先端をくすぐる。
「な、何を……！　か、固くなってなどいません……！」
セラフィナは懸命に抵抗する。だが男爵の触手は、なおもぬらぬらと修道女の乳房を絞り上げ、勃起した敏感な蕾を嬲りたてる。
「ククク、せいぜい虚勢を張るといい。だが、女の身体は正直だぞ。そら、ここが感じるのだろう、んん？」
無数の触手に拘束されたまま、セラフィナの身体が大きく波打つ。今まで誰にも触れさせたことのない乙女の乳房。その乳首は、セラフィナ自身が考えているよりずっと敏感にできていた。
ぬめつく触手に弄られるほどに、セラフィナが今まで知らなかった甘美な快さが背筋を走り抜ける。
「ひぅぅぅっ！　だ、だめぇっ、そ、そこは……っ！　やめてぇぇっ、お乳の先を、そ、そんなに弄られたら……はぅぅぅっ！」
「どれ、神に捧げたその柔肌、じっくり見せてもらおうかな」
しゅうぅぅ……。
セラフィナの僧衣から、かすかな煙がたち始める。触手から分泌される怪しげな粘液が、僧衣の繊維を腐食させているのだ。
「なっ……や、やめなさい！　ああ、いやあぁぁ！」
触手から逃れようと必死に身じろぎするセラフィナだが、その動きは僧衣が腐り溶けていく速度を早めただけだった。
ぽろぽろと、断片になった衣服が床に落ちていく。セラフィナの僧衣の胸回りあたりが、見る間にすっかり崩れ去っていた。
僧衣の破れ目から、若々しく張り詰めた形のよい豊乳がふるるっ、と弾み出てくる。クリームのような肌に、サクランボ色のみずみずしい乳首が鮮やかになまめかしい。
男爵の顔が、好色ににんまりと歪む。
「おお、予想以上の素晴らしい乳をしておる。その乳首にむしゃぶりつけるなら、城を買えるほどの金を積む王侯も山といようにに、お前はまこと人生を無駄にしておるな、セラフィナよ」
「お、お黙りなさい！　なんて下劣な！　わたくしの身体は生涯父なる神様のものです！　ほ、ほかの誰にも……んんっ！　くふぅぅぅっ！」
セラフィナの毅然とした言葉が、途中から低い喘ぎ声に変わる。
男爵の爬虫類のように長い舌が、ねろねろとセラフィナのルビー色の乳首をねぶりたてている。触手は、まるで乳牛を搾乳でもしているように、乳房をぎゅうぎゅうと絞っている。
「おお、聖都でも一、二を争うという神聖処女の乳の味、たまらんぞ。このむっちりした弾力といい、乳首に滲む甘い汗といい、極上よな」
「や……やめ……はうぅ……そ、そんなところ……舐めるなんて……んッ……くうっ……け、汚らわしいっ！　の、呪われなさい、この獣！」
精一杯の気丈さで抗いを見せるセラフィナだが、男爵の舌がぴちょぴちょと乳首から乳房全体を這い回るたびに、その肩がひくん、ひくんとわなないてしまうのを抑えきれない。
「クックックッ、無理をするな小娘。ほれ、こうして私の舌と触手の愛撫で、乳首がピンピンに膨らみきっておるわ。どうだ、身体を汚されるのは気持ちいいのだろう？」
「き、気持ちいいわけなんて……ひぁぁぁんっ！　お、お乳、吸ってはだめぇぇぇっ！」
セラフィナが激しく背中を仰け反らせる。触手にある不気味な吸盤状の器官が、セラフィナの左右の乳首に思い切り吸い付き、食いちぎらんばかりに

引っ張っているのだ。
きゅっと唇を噛むセラフィナ。しかしその顔は赤く上気し、しっとりと汗に濡れている。
（ああ、いやぁ……生暖かいのが、おっぱいの先、ちゅうちゅうしてる……こ、こんなの、気持ちいいはずないのに……か、身体が勝手にぴくぴくってなっちゃう…な、なんなの、これ……）
「ふん、だいぶん蕩けてきたようだな。さあてそろそろ、処女の門をぶち破ってやろうか」
男爵は、何本もの触手で軽々とセラフィナを持ち上げると、上が平らになった魔神の祭壇に修道女の身体を荒々しく押し付ける。
いまだ触手に嬲られ続けている乳房の膨らみの下には、美しくくびれたウエスト。
愛らしい臍からさらに下には、薄い金色の柔毛に飾られた神聖な泉が息づいている。
ぐぐっ。
また何本かの触手が、セラフィナの左右の足首を掴み、力任せに股を開かせる。
「いや、いや、いやっ！　そ、そこだけは許してぇっ！」
大切な秘処を無防備に晒されてしまう恐怖に、セラフィナが怯えた声を上げる。
だがもちろん男爵は、そんな声を斟酌する様子は微塵もない。かえって余計に淫靡な笑みをたたえた顔を、乙女の股間へ顔を寄せていく。
触手の先端が、小さなクレバスを左右に引き拡げる。
ぴっちりと閉ざされていた陰唇が、おずおずと細く口を開く。
いまだ育ちきっていない可憐な肉襞。包皮の下で可憐にうずくまるクリトリス。そして肉割れのなお下方にひっそりと息づく、すぼまったアンズ色の肛門までが、妖魔と化した男爵の眼前にあった。
「おお、これぞ《聖天使》の女陰だな。上品な造作といい馥郁とした香りといい、これほどそそる肉壺はいかほどぶりか……！」
「やめてぇぇっ、み、見ないでぇぇっ」
セラフィナはなんとか脚を閉じようとするが、妖魔の強靭な触手はびくともしない。
男爵の細長い舌が、にゅうっと割れ目の中心へと伸びる。
「たまらんぞ……この聖なる割れ目、どんな味がするかな……」
その時だった。
それまで取り乱していたセラフィナの目が、すっと鋭くなる。
セラフィナがここまで屈辱と嫌悪に耐えながらじっと待ち続けた、おそらくは最後にして最大のチャンスだった。
男爵の顔が、ヴァギナの寸前まで近づく。そこに狙いを定めて、セラフィナは下腹をぐっといきませる。
「聖なる水の洗礼を受けるがいいわ、邪教徒よ！　ユリヌム・サクリピアテカ！」
しゅばぁぁぁぁっ！
触手によって開かれ露出したセラフィナの尿道から、熱い金色の液体が噴出した。聖水は狙い違わず、男爵の顔面にまともに吹きかかる。
「ぐふうっ」
男爵の口から、小さな呻き声。
（ああ神様、守護聖女さま、セラフィナをお救い下さい。この闇の生き物を打ち払う力をお貸し下さい！）
功徳を積んだ乙女の聖なる小水は、いかなる妖魔をも四散させるはずだった。だが――――。
セラフィナの祈りが天に通じることはなかった。
手足を縛めている触手が緩むことはなかったし、男爵が苦しみ悶え倒れることもなかった。
やがて修道女の秘処から放たれる尿も尽き、僅かな雫が滴るばかりになる。
セラフィナの股座からむくりと顔を上げると、男爵はますます淫らに口の端を曲げて嘲笑するのだった。
「ヒッヒッ、これが名高い《断罪の聖水》か。これまた極上の甘露よ。どうした、もうしまいか？　出し惜しみせず、もっと出してみろ」
「ヒィッ！」
今度こそ、心からの絶望がセラフィナを襲った。
この妖魔には、セラフィナが持ついかなる武器も通じないのだ。
男爵は、まだセラフィナの肉襞から滴る小水を、気味の悪い長い舌でぴちょぴちょと舐め取り始めた。
唾液の糸を引くナメクジのような器官が、ぬちょ、ぬちょっと修道女の敏感な柔肉に絡みつく。セラフィナが今まで想像したこともない刺激が走り、真っ白な太ももが激しく跳ねる。
乙女の最も神聖な部分を、厭わしい妖魔に口で貪られている。
そう考えるだけで、セラフィナに怒りと吐き気がこみ上げる。
「ひぃぃっ！　そ、そんなところに舌を……な、なんておぞましいっ！　やめ……やめてぇぇぇっ！　おしっこ舐めないでぇぇぇっ！」
「いいぞ、そうでなくてはいかん。もっと泣き叫んで抗うがいい。お前のその気高さ、誇り高さを見るほどに、私の欲望はいよいよ猛り狂うぞ」
今やセラフィナの花園を蹂躙しているのは舌だけではない。うねうねと何本もの触手の先端が、小さな陰唇を味わい、包皮に隠れた肉豆を擦り上げる。
くちゅる。くちゅる。
湿った肉音が、セラフィナの乙女の部分で鳴り続ける。
「はあ……ッ、ぐぅぅっ！　ダ、ダメなのぉぉぉっ！　そ、そこは大切なところなのにぃぃぃっ！　あああぁっ、な、なんなの、この感じぃぃっ！」
初めて性器に加えられる爛れた愛撫に、セラフィナの肉体は、本人の意志とは無関係に応えてしまう。肌はかぁーっと桃色に染まり、割れ目からはい

つしか、ねっとりとした処女蜜さえも溢れ滴り始めていた。
男爵が残酷に笑いつつ、その染み出た愛蜜をぺろりと舐めとる。
「ぐふふぅ、どうしたセラフィナ？ 可愛いマ■コから、欲しがり汁が洩れてきたぞ？ 貞潔が自慢の修道女殿も、体を嬲られればやはり女の肉欲が疼くと見えるわ」
「ち、違いますっ！ ほ、欲しがってなんか、いませんっ！ あ、あなたのような邪教徒には、必ずや神罰が下ります！」
「ククッ、そういきがるな。ほうれ、今からお前の処女を奪うお道具に挨拶するがいい」
そう言うと男爵はセラフィナにのしかかり、ずっと股間に屹立している節くれだった巨大な男根を、修道女のたわわな乳房の先端にずりずりと擦りつける。
鈴口からだらだらと垂れ続ける先走りの粘液が、セラフィナの女神のように美しい乳房を汚していく。
セラフィナの大きな瞳が、畏怖と不快感にいっそう見開かれる。
「いや……いやあ……な、なんなの、これ……」
「くっくっ。いくら貞節一途の修道女でも、まぐわいのやり方くらいは知っておろう。今からこいつを、お前の小さなアソコに突っ込んでやるのさ。お前の蜜壷を犯し尽くしたうえに、私の穢れた子種をたっぷり植え付けてくれるからな」
「そ、そんな……！ やめてやめてお願いですから！ そんなことされたら、わたくし……誰か、誰か助けて！」
セラフィナは追い詰められた子鹿のように手足をばたつかせる。だが、いくら暴れようと、男爵の触手はいっこうに緩もうとはしない。
「神も天使も、お前を助けには来ぬよ。そうれ、妖魔の肉槍をしかと味わえ、修道女セラフィナよ」
ぐちっ。丸く弾力を帯びた先端が、セラフィナの濡れた花びらを二つに割って、ゆっくりと体内へと入ってくる。
激痛に、セラフィナが絶叫を放つ。見開かれた両目から、涙がこぼれる。
「いやあああああっ！ そんなもの入れないでぇぇぇっ！」
ミチ、ミチィッ。
妖魔の男根はしかし、容赦なくセラフィナの処女地へと侵入を続ける。乙女の操の証である秘膜が、あっさりと引き裂かれる。
男爵が我知らず、感に堪えないという声を上げる。
「おお、たまらんぞ。さすが聖都で最も美しく清らかと言われた修道女の肉壷よ。まさに天上の快さだ。千切れそうなほどの締めつけ具合だな」
セラフィナはひたすら歯を食いしばり、ただ操を蹂躙される汚辱と惨めさに耐えていた。双眸はあらぬかたを見つめ、手には魂の最後の救いである護符を、ぎゅっと握りしめている。
「お願い……もうやめて……早く抜いてぇ……」
「ハッ。馬鹿を言うな。楽しいのはここからだぞ」
太い妖魔の肉槍が、なおもセラフィナの奥深くへこじ入れられる。
セラフィナの細い体が、苦痛にぎゅうっと反り返る。
「ひッぐぅぅぅぅぅっ！ やめてぇぇっ！ お腹が……お腹の中、壊れちゃうぅぅっ！」
律動が始まった。男爵は自身の悦楽のままに、肉茎をセラフィナの中で野放図に躍らせ始めた。
まるで熱せられた破城槌で全身を貫かれるような痛みに、セラフィナはうわ言のように叫び続ける。
「ひぁぐぅぅっ！ ひぐぅぅぅんっ！ ああ神様、守護聖女さま、セラフィナは闇に汚されてしまいました……弱いわたくしをお許し下さい……そしてお救い下さい……どうか力をお示し下さい……！ んはぁあっ！」
だがそんな祈りに応えたのは、男爵の冷酷な声だけだった。
「お前の神様は、何も聞いちゃおらんようだぞ？ お前もつまらんお題目なんぞ忘れて、思う存分この肉の悦楽に浸るがいい。我らの世界に来るがいい」
「くっ……だ、誰が……、そ、そんなこと……ッ……んんっ、はぁぁうっ」
眉根を寄せ、最後の気力で男爵を睨みつける。
今日まであらゆる世俗の誘惑に背を向け、固く守り通してきた大切な乙女の純潔。
（それが……こんなにもあっさり奪われ、汚されるなんて……！）
セラフィナの瞳が、涙でかすむ。
もう、《聖天使》と称えられたあの清らかな体には二度と戻れない。処女ゆえに発揮できた祓魔の法力も、永久に失われてしまった。
セラフィナの手から、聖なる護符がぽとりと床に落ちた。
失意に震える修道女の顔をのぞき込み、男爵が嗜虐的に囁く。
「どうしたセラフィナ。ずいぶんとアソコが濡れほぐれてきたぞ？ 貞節ぶってはいても、お前の淫乱マ■コは、この肉の杭が嬉しい嬉しいと泣いておるぞ？」
「や、やめてぇぇぇっ！ んぐ、ふぅぅっ……わ、わたくしは……ハァ、ハァ……に、肉の交わりを……け、決して悦んだり……しませんっ！」
「くくっ。気の強い娘よ。そんな生意気な修道女には、罰としてたっぷりと種付けをしてやるかな」
険しくしかめられたセラフィナの表情が、さらに強張る。
「……やめて……お願いですから、それだけは……！ 中に子種を出すのだけは許して！ ……ひぐぅっ！ あうぅぅぅんっ！」
「クハァッ。たまらんぞ、その怯えた顔！ 見るほどに子種袋が煮えくり返るわ！ おおおおっ、出すぞぉ……妖

魔の精汁、溺れるほど注ぎ込んでくれるぞっ！」
男爵の律動が、火を噴くほどに激しくなる。
「ひぁっ……や、やめ……そ、そんな強く動かないで……だ、大事なところが……壊れちゃ……んくぅぅぅっ！」
「おおうっ、おおおおっ!!!」
低い呻きが、男爵の口から洩れる。
びゅるっ、びゅるるっ。
夥しい量の熱湯のような粘液が、セラフィナの子宮口で爆ぜた。
どく、どく、どくっ。
しかもそれはとめどなく、肉茎の先端から溢れ出し、セラフィナの胎内をくまなく侵し尽くす。
「ヒィッ、ヒィィィッ！　で、出てるぅっ！　あ、熱いのが、い、いっぱい出てるぅっ！　お、お腹が、焼けちゃうぅっ！」
セラフィナは全身をのたうたせる。だがどんなにもがこうと、男爵の触手からも、胎内でピクピクと痙攣し続ける呪わしい男根からも逃れることはできない。
「……いやいやいやぁ……こんなのいやぁ……妖魔の赤ちゃん……孕んじゃう……」
やがてセラフィナは、精根尽き果てたようにぐったり脱力し、ただすすり泣いた。
闇の生き物に弄ばれたあげく、子種まで付けられてしまった……。
生まれた時から人一倍の禁欲と信仰に身を捧げてきたセラフィナにとって、それは受け入れることのできない悪夢だった。
もはや抵抗する気力もなく、セラフィナはただ呆然と天井を見つめていた。
すると。
そこへ、誰かの足音が聞こえた。誰か別の人物がやってきたのだ。
はっとして、セラフィナは足音のほうへ目を向ける。
まだ全身に触手が絡みついていて、視界が思うようにならない。
しかし、足音の主が誰かはすぐにわかった。
「父さん？　そこにいるの？　何をしてるの？」
不安げな少年の声だった。
セラフィナが先ほど祓魔を果たした少年。
男爵の息子、ファビアンだった。

＊

「ファビアン！　こっちへ来てはだめ！　すぐにここから逃げて！」
セラフィナは叫んだ。
憑き物を祓った今、ファビアンは普通の無力な少年だ。オルランド男爵は、我が息子とて容赦なくまた邪悪な儀式に捧げるだろう。せめてそれだけは避けなくては。
しかしセラフィナの声が聞こえないのか、ファビアンはふらふらとこちらへ近づいてくる。
「父さん……？」
セラフィナの視野にも、その姿が入るようになる。無垢な表情の美少年が、そこにいた。大きめの白いローブをまとっている。
ファビアンの目は、祭壇の上に半裸で押し付けられ、いまだ妖魔の男根を受け入れたまま、湯気のたつ精液を股間からドロドロと逆流させているセラフィナにも向けられた。
羞恥に、セラフィナの身がすくむ。
「いやっ！　み、見ないでっ！」
ファビアンは信じられないというように、セラフィナと変わり果てた姿の父親を交互に見やった。
「父さん、ズルいじゃないか。一人だけで楽しむなんて」
意表をつく少年の言葉に、セラフィナは息を呑む。
「え……？」
男爵が、薄笑いで息子に問う。
「お前こそ、さっきこいつに焼かれたナニは大丈夫なのか？」
「へっ、当たり前だろ」
にわかにぞんざいな口調になると、ファビアンは、はらりとローブを脱ぎ捨てた。
その下の肉体は、父親と寸分違わぬ怪物に戻っていた。変異の具合は、先ほど祓った時よりむしろひどい。
「ファビアン、あなた……」
唖然とするセラフィナに、ファビアンはニタリと笑いかける。
「悪いけど、俺は昨日今日妖魔憑きになったわけじゃねえんだ。親父同様、生まれた時からウピシュトゥの崇拝者で、ご覧の素晴らしい体さ」
「じゃ、じゃあ、さっきは……」
「芝居だよ。名高い《断罪の聖天使》様を、どうしてもこの地下聖堂に案内したくてな。なかなか名演だったろ？」
「そ、そんな……」
ファビアンの股間で、父親のものと遜色ない雄大な肉棒がひくひくと隆起していた。先走り汁がたらーりと長い糸を引いて、床にまでつながっている。
「ところで、そろそろ俺にもやらせろよ。このメス犬に、俺もザーメンたっぷり飲ませてやりてえんだからさ」
己が逸物を触手で撫でさすり、ファビアンがねだる。男爵は、まだセラフィナの陰部に埋まったままの分身を指し示す。
「がっつくな。まずは口から飲ませてやれ。そちらはまだ処女だからな」
「ふん。まあいいか」
ファビアンのそそり立つ陰茎が、ぐいっとセラフィナの顔に押し付けられる。セラフィナは、懸命に顔をそむけようとする。
「いやっ！　や、やめてファビアン！」
「ちっ。処女でもねえのに気取るなよメス犬」
触手がにゅるにゅると伸びてきて、セラフィナの顔を押さえつける。そのうちの一本が、鼻の穴を塞いでしまう。空気を求めて、セラフィナの唇が僅かに開く。

小説／天戸祐輝
NOVEL
挿絵／牡丹
ILLUSTRATION
単行本
1巻発売中！
公式サイトで購入者
特典プレゼント！
イセリア
英雄戦記
the legend of the Beerya war
第20話 羞恥街の淫獄
メイベルローゼの手引きで帝国から逃げたフィオナだが、
合流したエルスともども、皇帝の憑依したミノタウロスに、
牝奴隷へと堕とされる！

「この宿でしたら、しばらくの間は身体を休めることができますわ」
フィオナ救出のため、バーンドベルグ国に向かっていたエルスだったが、その途中で敵国から逃げ出した皇女を見つけ、何とか元イセリア領だった街にまで辿り着いていた。
しかし、この街だって安全とは言いがたい。
元イセリア領最北端の街、オーダイ。平和だった頃は、バーンドベルグとの貿易で賑わっていたところなのだが、つい数ヶ月前に帝国に奪われ、占領されてしまった街でもある。
「そのような服をフィオナ様のお召し物にする無礼を、お許しください」
「いいえエルス、あのような淫らなドレスよりも、このほうが気が落ち着くわ」
質素なチュニックと膝丈のスカートといった、まるで町娘のような服を着ているフィオナが、槍騎士に向かって満面の笑顔を見せる。
久々に皇女に会ったエルスも、やっと安堵できる状況に軽鎧を外し、薄紫のチュニックと紺のタイトミニスカートのみの姿だ。
「これで、あのことを忘れられたら……」
「フィオナ様？」
急に笑顔を曇らせ、宿屋の二階にある部屋から外の景色を眺めたフィオナに、エルスはそっと近づき、その高貴な顔を覗き込む。
何も答えてくれない。しかし、物悲しげに下腹部に手を置く姿だけで、余程の屈辱に遭わされていたことだけは推測できた。
何より、彼女と常に一緒にいた小さな精霊ルシィフが、出会った時から元気がない。
「ごめんなさい、ボクが付いてたのに……」
小さな羽根をパタパタと羽ばたかせ、そっとフィオナに寄り添った精霊が、落ち込んだ声で話しかけている。
落ち込む精霊の姿と、「大丈夫」とばかりに優しく微笑む皇女の姿に、槍騎士は何も言えなくなってしまった。
「まったく、なんなの、この粗末な宿はっ。こんな汚いところに身を隠すなんて、ホントに考えらんないっ」
「そんなにデカイ声で叫ぶにゃ。第一、お主はそんなことを言える立場ではにゃいはずにゃ」
会話のなくなった部屋。その重い空気を解放するようにドアが開けられ、メイベルローゼと大騎士団長が口喧嘩をしながら入ってきた。
帝国から脱出した魔姫は、ボンデージ調の黒いコルセットに紐のようなショーツ。長手袋に、コルセットと一体型のガーターに繋がれたロングブーツといった姿。
猫耳に尻尾を生やした子供のような大騎士団長、ミーシャ＝フルナクト、ミーニャンの愛称で呼ばれる彼女は、赤いドレスに、武器を変化させたコックのぬいぐるみを腕にしがみつかせている。
「ミーシャ様っ、フィオナ様の前に、そのような女を連れてくるなど」
「随分と言葉を知らない無礼者なのね、イセリアの槍騎士は。私がいなければ、フィオナは逃げ出すこともできなかったのよ、少しは礼儀ってものを憶えたらどうなのかしら、エルス。それとも、私の魔眼で、娼婦にでもしてあげたほうがよくて？」
「このっ」
敵姫とはいえ、無礼極まる態度。しかも、皇女と自分を呼び捨てにし、妖しげな術まで使おうとする相手に激昂する。
「やめてエルス。彼女は協力者なの」
「まっ、そういうことにゃ。歓迎というわけにはいかにゃいがにゃ」
「……っ、わかりました」
皇女と大騎士団長に止められ、握った拳を収めた。
が、怒りだけは鎮められない。
彼女のおかげでフィオナは敵国から逃げ出せた。確かに、状況だけを見れば正しいのだが、療養中に副団長のレーシアから受けた伝令では、皇女を攫ったのはこの魔姫だ。
しかも、この女のせいでレーシアを含めた女騎士たちは犯され、フィオナも皆の前で尻虐を受けている。
「フィオナ様のご命令でなければっ」
この場でこの女を串刺しにしてやる。そんなことを考えてしまう。
「今は怒りを抑えておけにゃ。それよりも、よくこれだけの少数部隊で、姫様を救出に来れたにゃ」
「いえ、本来はセリーヌとの合同部隊での救出作戦でした」
「セリーヌが来ているのですかっ」
第一騎士団長の名を聞いた途端、皇女が満面の笑みを向けてきた。
「はい、ですが途中で敵の急襲に遭い、セリーヌは自ら敵の足止めを」
「そ、そうですか……」
もっとも信頼する騎士の不在を聞き、フィオナの顔から笑みが消えていく。
それほどに、彼女にとっては大切な人物なのだろう。
「大丈夫にゃ。あやつがそう簡単に負けるはずはないにゃ」
「……はい」
ミーシャの言葉に、フィオナは俯いたまま頷いた。
「それより、本当にこの宿屋は大丈夫なのかしら？　元イセリア領だからって、今も安全とは限らないでしょう」
「ここは、わたしが貴様の国の部隊を全滅させた時に使っていた宿屋ですわ。そのおかげでここの主人とは馴染みでしてね、貴女が使う娼館とは質が違いますの」
「ふんっ、そうならいいけどね」
メイベルローゼとの会話に、自然と嫌味が含まれる。そもそも、エルスは、この女との会話などしたくもない。
「エルス、お願いだから、メイベルローゼへの憎しみは忘れて」

「姫様の命令にゃ。それに、こやつがいれば、帝国の人間を騙すことだって可能にゃはずにゃ」
「っ⁉　そ、そうでしたわ、フィオナ様のお叱りを受けるまで気づかないなんて、……申し訳ありません、フィオナ様」
　再び窘められた言葉に、怒りに冷静な思考を失っていた自分に気づいたエルスは、騎士らしく膝をつき、主君に頭を下げる。
「やめて、そのようなこと。これは命令ではなくて、お願いなのだから」
「はい」
　皇女の言葉に、槍騎士は立ち上がり、
「失礼をお詫びしますわ、メイベルローゼ」
「別にいいわよ。私こそ、無礼を詫びるわ」
　憎しみを忘れることなどできない。が、今は手を組むしかないのだ。
　エルスとメイベルローゼは帝国から逃げきるため。そして、生き残るために己の気持ちを抑える。
「よかった。じゃあ、わたくしが紅茶でも淹れるわね」
　事態の収拾を嬉しく感じたのだろう。皇女が笑みを浮べながら、部屋に置いてあったポッドと茶葉に手を掛けた。
「んぁっ⁉　あっ……なにこれ……はふっ、身体……が……んん……」
　ガシャ……。
　嬉しさを顔に表した皇女が、茶葉をティーポットに入れようとした直後。
　突然彼女の肢体がガクガクと震え、崩れるように床に座り込んだ。
「フィオナ様っ」
「んはっ、はぁはぁ……あ、熱い……身体が……下腹部が……」
　慌ててフィオナに駆け寄り、槍騎士は身体を支えた。
　だが、彼女の身体は熱く火照り、少し汗ばんでいる。
　呼吸も荒く、染まった顔が、同性をも惹きつけるほど艶めかしい。
「フィオナ様……っ⁉」
　一目でわかる発情している姿。
　陵辱を受けた時に、自分も体験したその状態の皇女に、エルスが言葉を失った瞬間。
　突然背筋にゾクリとした悪寒が走り、全身の毛が逆立っていく。
「これはっ」
　無数の敵意。
　戦いによって磨かれた危険察知能力に触れた気配に、槍騎士が大騎士団長を見詰めると、彼女も同じように気づき、顔を険しくさせている。
「どうやら、売られたようね」
　窓から外を眺めたメイベルローゼが、冷たい声で言い放つ。
　エルスもフィオナのもとから離れ、そっと窓外を窺うと、数体のミノタウロスと帝国兵が宿屋を取り囲んでいた。しかも、敵兵の隊長と思われる人物の横には、札束を大事そうに抱えている宿屋の主人がいる。
「くっ」
　考えの甘かった自分に悔しさが込み上げ、唇を噛み締めた。
「はうっ、んぁあっ」
　己の甘さを痛感しているエルスの傍らで、突然肢体を震わせたフィオナが自分自身を抱きしめるように腕を組み、天井を見上げて仰け反った。
　金色の長い髪はサラサラと靡き、太腿には一滴の蜜液が流れていく。
「なぜ、姫様がこんな風になるにゃっ」
　発情している皇女の原因がわからず、ミーシャが目つきを鋭くしてメイベルローゼに問う。
「し、知らないわよ私。豚に犯された時に、何かされたんじゃないの」
「犯されたですってっ⁉」
　元敵姫の言葉に、今度はエルスが声を荒らげた。
　予想はしていた。が、その事実を聞かされると、ショックを隠しきれない。
「マズイにゃ、姫様がこれでは、逃げきることにゃど」
「できますわ」
　ミーシャの言葉に、ショックを受けている場合ではないと感じたエルスは、確信の言葉で逃げきれると提案し、聖槍セルフェザーを片手に持つ。
「そうね、私はこんなところで捕まるわけにはいかないのよ」
　続いて、メイベルローゼも賛同する。
「フィオナ様はわたしが連れていきます。ミーシャ様とメイベルローゼは、道を切り開いてください」
「わかったにゃ」
「ふんっ、私に命令？　でもいいわ、やってあげる」
　作戦、などというものはないが、このまま部屋にいても敗北は必死。
　エルスの言葉に賛同した一行は、大騎士団長を先頭に部屋から飛び出した。
「ひゃほっ、女だ女っ。しかも、ふたりは乳がでかいぜ」
「俺だ、俺が一番にぶち込んでやる」
　元敵姫とミーシャを視界の外に外し、フィオナに肩を貸しながら出てきたエルスを見たふたりの敵兵が、興奮に雄叫びをあげて襲いかかってくる。
　が、次の瞬間にはミーシャに殴り飛ばされ、全身の骨を砕かれながら宿屋の壁を突き抜け。もうひとりはメイベルローゼの魔眼の光を受け、自らの身体に剣を突き刺していた。
「失礼な敵にゃ。ここにこんないい女がいるというにゃに」
「下賤な者が、私の目に触れないでくれるかしら」
　胸を比較されたような言葉に、ふたりが倒した敵兵に向けて呟く。
　だが、敵はそれだけではない。
　階下にいたエルスの部下たちを退けた敵兵が、次々と階段を上ってきた。
「ただのザコにゃっ！」
「私たちの身体が欲しいなら、隣にいる仲間を突き刺しなさい」
　ぬいぐるみを巨大な出刃包丁に変え、一振りするだけで数人の敵兵を葬り去るミーシャ。
　その横では、艶めかしく自分の肢体

を指先で辿った元敵姫が、魔眼を光らせて敵兵を互いに争わせた。
「すごいですわね」
皇女に肩を貸しながら、エルスはふたりの戦いに驚嘆する。が、そんな余裕など、今の彼女には与えられてない。
何かしらの道具を使って外部から二階に上ってきた敵兵十人ほどが、今まで居た部屋の窓。そして、廊下の壁を突き破って侵入し、一斉に槍騎士と王女に襲いかかってくる。
「お姉ちゃんっ!?」
「どこかに隠れてなさいっ」
叫ぶ精霊に答えた直後、エルスはセルフェザーを逆手に持ち替え、
「セフンナ・フィールドッ！」
槍先を床に突き刺し、自分と皇女を包むように半円形の結界を張った。
青白い光を放つ結界に触れた敵兵は弾き飛ばされ、壁や柱に激突して意識を失っていく。
「ほう、フィールドを張れるようにニにゃったようだにゃ、にゃらば」
「はいっ」
セフンナ・フィールドとは、エルスが独自に編み出したセイバーとは違い、先祖であるマイハが編み出し、代々受け継がれてきた絶対防御の技だ。
以前のエルスは未熟で使うことのできなかった技だが、淫乱な魔術師スレアによって覚醒をうながされ、半ば強引に会得できた技である。
そして、同時に得たもうひとつの技が、
「ふたりとも、そこを退いてくださいっ」
槍騎士の声に、ミーシャとメイベルローゼがサッと横に跳び、敵兵が次々に上ってくる階段への道を空けた。
「セフンナ・ニードルッ！」
フィールドを張っていた槍先を敵兵に向け、自身の魔力を光の針に変えて連続で放つ。
「ぐぎゃぁぁぁぁぁっ！」
醜い敵兵の声。連続、無数で放たれる光の針は次々と敵兵を貫き、脱出路を撃ち開く。
「さすがだにゃ」
「あ、ありがとうございます……はぁはぁはぁ……」
ミーシャの言葉に答えるが、呼吸が乱れてしまう。
セイバーほどではないが、フィールドとニードルは、精神力と体力をかなり消耗する技だ。
フィールドは結界を張る範囲によって使用時間は少なくなり。ニードルは命中率が悪く常に連続使用が必須。しかも、撃てば撃つだけ精神力と体力が削られる。
マイハ反応を使わない分、身体への負担はないが、それでも乱発はできない。
「今のうちに行くにゃ」
「フィオナ様、ご無礼をっ」
原因不明な発情で走れない皇女を抱きかかえ、敵兵を全滅させた廊下を一気に走って階下へと下りた瞬間、エルスたちは無残な光景を目撃した。
階下に配置していた女騎士たちが、身に纏っていた鎧を壊され、衣服を破かれて敵兵の陵辱を受けている。
多数対少数、そして奇襲だったとはいえ、ここまで簡単に敗北する騎士たちではなかったはずだ。
「どうして……」
「あれにゃ」
ミーシャがいち早く敗北の原因に気づき、宿屋の壁に開けられた大穴の向こうを指した。
そこには数体のミノタウロスに囲まれたひとりの男。この場にいるすべての人が憎む人物が、いやらしく口元を歪めて立っている。
「ギュスターヴっ!?」
吐き捨てるように言葉を放つ。
瞳に映る初老の男は、間違いなくイセリアの敵だ。
怨敵を目の前に、エルスの身体は怒りに震えていく。
「なんて、魔力ですの……っ」
セフンナ・セイバーで突き刺せる間合い。だが、槍騎士は動くことができなかった。
ギュスターヴから滲み出す強力な魔力。その寒気すら感じる力に、エルスだけではなくミーシャも動けない。
「やっと見つけたぞフィオナ。さあ、ワシがその身体を鎮めてやろう」
「んあっ、ふぁぁぁぁぁっ！」
皇帝の言葉に反応した皇女が、全身を半痙攣させて床に崩れ、スカートの内部から大量の愛液を滴らせる。
「貴様、フィオナ様に何をっ！」
「決まっておろう。ワシの魔力に反応して、身体が発情しているだけだ」
これ以上怒りを抑えていられない。
槍騎士は自身の魔力を聖気に変換させ、セルフェザーで増幅させていく。
「落ち着くにゃエルス。あのギュスターヴは何かおかしいにゃ」
大騎士団長の一言で、動きが止まる。
「あやつの魔力、帝国で感じた魔力に比べて弱すぎるにゃ」
「そうね、それにあの豚にしては、身体が大きすぎるわ」
ミーシャの言葉に、メイベルローゼが付け加えた。
フィオナ救出の前に耳にした、【王女を攫った後に、ギュスターヴが伝説の魔王にも匹敵する魔力を得た】という噂にしては、確かに皇帝の魔力は小さい。
あの魔力では、せいぜい街ひとつを従える程度だ。
「あれ、送精神体みたいね」
魔姫の言葉に、ミーシャが皇帝の首に付けられた首輪を見て頷く。
送精神体とは、自らの精神を他の肉体に憑依させて操る術。
古からの術で、今では使える者のいない禁術だが、グラマトンではそれを独自の技術で復活させ、首輪という魔法具にしている。
それを踏まえて相手を見れば、確かに目の前に居る皇帝は異質感がある。

著者近刊 『これでも僕はご主人様？　ダブルメイドに板挟み』『わたくしを穢しなさいっ！　お嬢様の婚約こわしちゃうわよケイカク』『生徒会長のセキ裸うな秘密』『魔孕の姫騎士　屈辱の受胎』『イチャらぶ生徒会長』『おしかけお嬢さま　私と同棲しなさいっ!!』『退魔教師希彩　蓋虐の学園』 好評発売中！

顔は一目見たら忘れられない、欲に塗れた醜い顔なのだが、身体が人のものではなく、筋肉の隆々と付いたミノタウロスの巨体だ。
本物であって本物ではない、半ギュスターヴといえる存在である。
「これなら、勝ち目はありますわね」
「そういうことにゃ」
「だったら、貴女の部下を助けて戦力になってもらいましょうか。帝国兵は全員、自らの身体に刃を突き刺しなさいっ！」
槍騎士と大騎士団長の会話に割り込んだメイベルローゼが魔眼を光らせ、女騎士たちを陵辱していた敵兵に、自滅するように命じた。
次々と自ら剣を胸に突き刺して倒れていく敵兵。
解放された女騎士たちは、肌を露わにさせ、大事な部分から精液を溢れさせながらも、健気に皇女を守ろうとミーシャたちのもとに集まってくる。
「いくにゃっ！」
その声をきっかけに、一気に大騎士団長たちはミノタウロスへと突っ込んでいく。
巨大な出刃包丁を持った彼女に、敵兵は相手にならず、一気に牛魔人との間合いを詰めて数体を斬り飛ばした。
エルスも皇女を抱えたまま走り、上司を背後から襲おうとしていた牛魔人の胸に聖槍を突き刺し、憎しみの瞳で半皇帝を睨みつける。
「ワシをそのような目で見るとは。なるほど、お前がマイハの子孫エルスか、フィオナほどではないが、噂通り美しく、揉み応えのありそうな胸だ」
「そんな穢らわしい目でっ！」
性的な目で見られ、背筋がおぞましさで震える。
一刻の皇帝とはいえ、このような下種に皇女が穢されたと思うだけで吐いてしまいそうだ。
「少数だというのに、ワシの下僕をここまで退けるとは、なかなかのつわものぞろいのようだな。しかし、その程度では儂には勝てんぞ」
「借り物の身体で偉そうにほざかないでくれるかしら、豚ジジイ」
横柄な態度が頭にきたらしく、メイベルローゼが毒づく。
「親に向かってそんな口を利くか、この愚かな娘よ。ならば、イセリアの牝とともに、ワシの力を思い知らせてくれよう」
魔物の如く、半ギュスターヴが目を赤く光らせた直後。突然ミノタウロスと敵兵の身体がおぞましい魔力に包まれ、強さが倍増した。
「な、何なのこれは……私の魔眼に操られないなんて……きゃうっ⁉」
魔眼が効かず、魔姫が数人の敵兵に押し倒され、コルセットを引き下ろされて小胸を嬲られ始めた。
「な、何をしているんですのっ」
元敵姫とはいえ、今は仲間。そして、同性が嬲られる姿を見ていられない槍騎士は、フィオナを抱えたまま彼女のもとに行き、聖槍で敵兵を薙ぎ払う。
「ワシに敵対する愚かさをその身で味わうがよい。エルスを拘束し辱めろ、フィオナっ」
「んぅううっ⁉　そんな……そんなことできな……っ、は、はい。ギュスターヴ様」
「フィ、フィオナ様……なぜあのような男に……ふぅあっ⁉」
主君である皇女が、敵皇帝を様付けで呼んだことに驚いている暇もない。
皇帝の命令に従ったフィオナがエルスに抱きついてきた。
しかも、彼女の手は躊躇することもなくチュニックのボタンを外し、露わになった釣鐘型の美峰乳に顔を埋めながら、肉果実を揉んで鴇色の乳芽に吸いついてきた。
「フィオナ様、お、おやめください……、やめ……ひゃんんっ」
鴇色の乳芽を皇女に責められるムズくすぐったさに、槍騎士はまともに動けなくなってしまい、敵兵に為す術もなく床に押し倒されてしまった。
「エルスっ」
大騎士団長が叫ぶも、数人がかりで床に押し倒された彼女には、もうどうすることもできない。
守るべき皇女の行動で動揺させられ、大きな戦力のひとつを失った部隊は次々に床に押し倒されていく。
「は、放せっ、この虫ケラっ、ひぃくうううっ⁉」
メイベルローゼが再び押し倒され、露わになっていた小さな肉果実を揉まれ始めた。
女騎士たちは再び犯され、悲しい喘ぎ声を奏でている。
「お前さえ倒せば、お終いにゃっ！」
唯一残った最大戦力であるミーシャが跳ね、猫のように空中で回転しながら半皇帝に出刃包丁を向けた矢先。
「フィオナ、ワシの盾になれ」
「は、はい……」
「にゃぜっ⁉」
命令された皇女がエルスから離れ、半皇帝の前に立ってその身を盾にした。
振り下ろしていた出刃包丁を、間一髪のところでぬいぐるみに変えて着地したミーシャだったが、
「寝ていろ、この牝猫めっ」
「ひぃ、ぎぃにゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
半ギュスターヴがミノタウロスの巨体で腕を振り上げ、そのまま拳を振り下ろして大騎士団長を地面に叩きつけた。
「っ、み、ミーシャ様……」
帝国兵に地面に押し倒され、大きな胸を嬲られながら大騎士団長の身を案じるエルスだったが、彼女は苦しげな表情しかしない。
「う、迂闊だったにゃ……」
その言葉をきっかけに、ミーシャにも敵兵が集まり、赤いドレスの胸元が破られて肉果実が揉まれ。スカートまで捲られて、白いショーツに包まれた淫部を嬲られ始めた。

※

牝犬の隊列。

今のエルスたちに名づけられた言葉は、その屈辱的な名称だった。

敗北し、両手を背後で縛られて拘束された彼女たちは、それぞれ肉果実を露わにさせられ、尖らされた乳芽にロープ付きのクリップを付けられて、街中を歩かされていた。

「フィオナ様のおっぱい、なんていやらしくて柔らかそうなんだ」

「エルス様の胸、憧れのあの大きなおっぱいが丸見えだぜっ」

「くっ」

街人から浴びせられる言葉に、魔物に陵辱された時以上の恥ずかしさが込み上げる。

この街、オーダイはエルスが遠征に使っていた街。それだけに、見知った人も多い。しかも、今は乳芽にクリップロープを付けられ、敵兵に犬のように引かれているのだ。

「ごめんなさいエルス……、ごめんなさい……」

隣で同じように乳芽のクリップロープで引かれる皇女が、涙ながらに謝ってくる。

彼女も胸を元自国民に見られる羞恥に心を痛め、今に心を砕かれてしまいそうだ。

「今は我慢にゃ。今は……」

「こんな、こんな屈辱……」

ふたりよりも小さいが、乳芽を引かれて歩くミーシャとメイベルローゼが唇を噛み締めている。

特に、騎士でもなく、帝国の姫でもあった魔姫はこの恥辱に耐えられないらしく、涙を流していた。

「さあ、さっさと歩け。牝豚ども」

「「「くぅあぁっ!?」」」

クリップロープを強く引かれ、乳芽を千切られそうな痛みに、フィオナたちの唇から悲鳴があがる。

その姿に、街の男たちは固唾を飲み、女たちは瞼を伏した。

幾多の人々に肉果実を見られ、不様に街の広場にまで連れられたエルスたちは、支配者として豪華な椅子ふんぞり返る半ギュスターヴを睨みつけた。

「どうだ、牝として人々に見られる気分は？」

下卑た質問に、槍騎士たちは唇を噛み締め、フィオナは美貌を背けて肢体を震わせる。

肉欲を刻み込んだ相手の気配に、皇女の肢体は反応を抑えられないらしく、全身の肌が汗ばみ、太腿にはいくつもの蜜糸が伝っていた。

「これからの期待に、兵士や街の男どもが待ちきれないらしくてな、貴様の部下を使わせてもらうぞ」

「な、なにを……っ!?」

「や、やめ……はふッ、あッ、いやぁあああッ！」

「やめて、こんな……こんなところで……あうッ、あッあッあッ！」

半皇帝の言葉終わりとともに、裸にされた女兵士が連れてこられ、兵士たちの性欲の捌け口として犯され始めた。

その中には、メイベルローゼの部下である、イーバの姿もある。

「愚民ども、この牝どもは、ワシに犯されたくて自ら捕まってきたのだっ！」

犯され、悲しみながらも淫らに喘ぐ女騎士たちを見た半皇帝が、声高らかに宣言する。

「その証拠を、今から貴様らに見せてくれよう。フィオナ、ワシのもとに来て、その胸と唇で奉仕せよ」

「……は、はい。ギュスターヴ様」

様付けで呼ぶ王女の姿に民がどよめく中。後ろ手の拘束を解かれ、乳芽のクリップを外されたフィオナが半ギュスターヴに跪き、肉果実でペニスを挟んで亀頭に舌を這わせ始めた。

「んチュふぁっ、んんっ、んチュパ……んふぁ、美味しいです……ギュスターヴ様のチ■ポ……んチュっ」

顔こそ皇帝だが、ミノタウロスの身体に奉仕する皇女は、幼児の脚はありそうな巨肉槍を乳肌で扱き、唇を切っ先に被せてキスを繰り返している。

「フィオナ様……」

目の前で見せられる皇女の恥辱奉仕に、エルスは瞳を閉じた。

「んちゅっ、んっんっ……んチュパっ」

「皇女があんなモノを……あのフィオナ様が……」

「あれでは、まるで娼婦みたいじゃない。どうして、そんなことを……」

見ないようにはした。だが、聴こえる口淫の音、そして、街人の声に悲しみが込み上げる。

「なかなか上手いぞフィオナ。民の前で牝となったお前たちに、ひとついいものを見せてやろう」

半ギュスターヴが街人の群れに視線を向けると、ひとりの少女を放尿の体位で犯す太った中年の男が、神輿のような台に乗せられて運ばれてきた。

長いピンクの髪に、凹凸がほとんどない■くて小さな肢体をしたその少女は、秘孔を突き上げられる度に可愛らしい顔を蕩けさせて喘ぎ、秘孔から愛液と精液の混じった体液を溢れさせている。

「リ、リアっ!? 貴様ら、いい加減にするにゃっ」

淫祇邪教の調査をしながら、ゴメスによって売られた少女を探していたミーシャは、やっと見つけたリアの姿に怒りを隠せず、声を震わせた。

「その小娘は、イセリアの諜報部隊にいたらしいが、捕まり売られたあげく、今やこの街の貴族の娼婦よ」

「んあッ、あんッ、もっと奥まで突いてッ、リアの、リアのオ■ンコ、もっとジュボジュボって捲り返してッ！」

ピンクの髪をユラユラと揺らし、凹凸の少ない裸の肢体を上下に弾ませながら、リアは歓喜に喘いでいる。

その幼い顔には肉欲以外の感情が見られず、そのお腹は、何者かに孕まされた証拠に少し膨らんでいた。

「イセリアの、俺たちを守っていた人たちが、あんな女の子まで娼婦のよう

に……」
「淫乱よ、イセリアの騎士はみんな、皇女様も騎士もみんな……」
フィオナの奉仕姿、そしてクロウの少女の肉欲に喘ぐ姿に、街人たちが罵声をあげ始めている。
「これがイセリアの実態だ。皇女も兵士も肉欲のことしか考えられない、ただの娼婦よ。そして、今から第三騎士団長の実態も見せてやろうっ！」
「な、何を……」
淫らな命令を受けた二体のミノタウロスがエルスの肩を掴み、ふたつの釣鐘型の美峰乳に牛顔を近づけてくる。
「や、やめ……」
じゅろ……ぢゅちゅううっ。
「いやだ……はくっ、くふぅううっ！」
ふたつの牛顔が同時に大きな口を開き、大きな肉果実を丸呑みするようにしゃぶりついてきた。
胸を食い千切られてしまうような恐怖と、柔らかな乳肌全体に這わされてくる長舌のナメクジのような感触に、背筋が気持ち悪さで震えてしまう。
「くう……舐めるな……んぅ……」
魔物の口の中で飴玉のように舐め回され、乳肌にネットリと絡みついてくる唾液と、口腔の生暖かさに美貌を歪めた直後。
二体の魔物は器用に舌先を動かし、鴇色の乳芽に取りつけられたロープクリップを外してきた。
潰し千切られてしまいそうな痛みから解放され、敏感な状態になっていた突起には魔物の舌が這わされ、執拗に嬲ってくる。
「やめ……んんっ、そこをそんなに……はぁはぁはぁ……ふぅあんんっ」
おぞましくも汚らしい魔物の舌。だが、彼らに肉果実をしゃぶられ、ザラ舌で乳芽を弄ばれるくすぐったさに、エルスは濡れた吐息を奏でてしまう。
（魔物の舌に、こんなに感じてしまうなんて……）
乳芽を舐められる度に生まれ、肉果実全体をムズくすぐったくさせてくる乳悦感に、濡れた吐息を抑えることができない。
大きな柔房は、魔物の舌に反応して乳肌を張ってしまい、乳芽が限界まで痼り尖って、小さな乳輪までプックリと膨らましてしまった。
（ふぁんん……我慢が、我慢ができなくなってしまいますわ……）
スレアに肉体を改造され、女王アリオナとともに奉仕と肉交で快楽を刻み込まれた肢体は、ヂュルヂュルと音を鳴らされて乳芽を吸引されるだけで秘孔が蠢き、愛液が溢れて黒いショーツを濡らしていく。
「魔物に胸を吸われ、感じているのか？　エルスよ」
「ち、違い……ふぁんんっ」
皇帝の言葉を否定しようとするが、ふたつ同時に乳芽をザラついた舌で舐められた刺激に喘ぎ、肢体をピクンと跳ねさせてしまった。
「エルス様まで……牝豚だ。ギュスターヴ様の言う通り、イセリアの皇女も騎士も、みんなただの牝豚だっ！」
「男が欲しいなら、娼婦にでもなればいいのにっ。淫乱っ！」
見ただけで感じていることがわかるその姿に、街人からは侮蔑の言葉がぶつけられてくる。
「――っ⁉　違いますわ……わたしたちは……ふぁんっ、やめ……あふっ、はぁはぁはぁ……んぅううっ」
街人の罵声に心が痛み、何とか誤解を解こうとするも、胸の刺激に言葉が続かなくなってしまう。
快楽を拒もうと、濡れた吐息を繰り返しながら唇を噛み締め、顔を振ってセミショートにされた金髪を靡かせるが、まったく効果がない。
それどころか、どんどん感じやすくなってしまい、下腹部がキュンキュンと疼いて、太腿にショーツから滲み出した愛液が流れてしまった。
「さあ、ワシのペニスを受け入れ、お前が誰のものなのか宣言するがいい」
「は、はい……」
拒めない快楽に耐えている中。突然聞こえた声に瞳を向けてみれば、まるで娼婦のようにスカートを捲ったフィオナが、皆に見せるように白いショーツを脱いでいく。
「や、やめるにゃ姫様っ」
「フィオナ様……おやめくださ……くぅんん……」
拘束されているミーシャとともに皇女を止めるが、彼女は止まらない。
すらりとした美脚から白い布を脱ぎ捨てたフィオナは、薄い金色の草むらに彩られた淫部を披露しながら両脚を広げ、半ギュスターヴの巨ペニスを背面座位で受け入れていく。
「わ、わたくしイセリア公国皇女、フィオナ＝ブリティッシュは、ギュスターヴ様のしょ、娼婦にしていただき、赤ちゃんを孕んだ、チ■ポが大好きな牝犬ですぅううっ！」
じゅぷっ、じゅぷじゅぷじゅぷっ！
「んあッ、ふぁあぁぁあぁッ！」
顔だけ皇帝の巨肉槍を受け入れたフィオナは、歓喜の嬌声を奏でながら、淫らに広がった膣口を民に披露して自分の立場を明言した。
「ご、ごめんなさいみんな……わたくし逆らえ……んうッ」
民に淫らな姿を晒し、エルスたちに逆らえないことを謝るフィオナだったが、背後から半皇帝に肉果実を揉まれて言葉が止まる。
「いいぞフィオナ、ワシのチ■ポがいいと喘ぎながら、快楽に耽ろ」
「そ、そんな……ふぅあッ、あうっ、き、気持ちいいですっ。ギュスターヴ様のミノタウロスチ■ポ、フィオナの子宮まで届いて、すぐにイッちゃいそうですぅううッ！」
ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ！
処女の契約に操られ、皇帝に逆らえない皇女が、淫らな言葉とともに肢体を上下させ、広がった秘孔で巨ペニスを出し入れさせ始めた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/